湖月抄

まきはしら 2

39

若菜上

此巻の名は詞と哥とをもて号せり。花 わかなの上巻とは
玉鬘の小方わかなまゐりしことあり。哥にもすゑのしらわか
なをまつりて 河内 小松原末のよはひにひかれてや野べのわか
なも世をつむべき 細 此上巻は玉鬘源氏へわかなまゐりてせ
給ふことあり。下巻には朱雀院の五十の賀に若なまゐりて世をへ
たりけり。仍此巻の名とせり。下巻は例のごとく三冊の書籍
によりて二つにわかつ。是にみえたり。上下に分ちたるは是あり
又後に注人多く此例をもて上下に分ちしことなし。花 漢書高祖
紀上下あり。曲礼上下ハ記者分之。欄上下ハ後人経をつくるによつ
てそし簡策繁多なりし故に二巻に分て上下とする也
細 日本紀は則神代上下あり。それら八今の抄は上下よそれも
河海に後漢書にも上下の沙汰あり。それに二巻に分て上下となす。但文段

真木此巻ハ源氏三十九の年より有り。女三の宮裳着の事
有り。四十年賀の事并明石中宮懐妊の事。翌年一月三月中宮
御出産の事并ニ三ケ条の事有なり

きさいの宮 細 弘徽殿の大
后也母后崩御の事ハ系
の巻よみくらべて知て書
おきし巻々その作之

みこたちハ春宮を
細 朱雀院の御子ハ
春宮ハ今上の御事也 并
代ニ冷泉院也
藤つぼと 細 藤壺の女御の
此女三の宮の母也

朱雀院の御門ありしみゆきの後ころ（細 六条院へ行幸之 孟 紅葉賀の御幸ニ行幸）
ほひよりハ例ならずなやみわたらせ給ふ。もと
よりあつしくおハしますうちに此たび（靈還アリシ桐壺帝ニ注）
ハ物こゝろぼそく思しめされて年ごろを
おこなひのほいふかきを。きさいの宮のおハし（孟 流出家の本意）
ましつるほどハよろづはゞかりきこえて（細 御出）
ていまゝでおぼしとゞこほりつるを。なほその
かたにもよほすにやあらん世にひさしかるまじ（家のかた）
き心ちなんするなどのたまはせてさるべき御心（御出家の用意ニ也）
まうけどもせさせ給ふ。御子たちハ春宮をおき（花 廿一歳藤壺女御ノ女三宮ハ四女也之）
たてまつりて女宮たちなん四所おハしまし
ける其中に藤つぼと聞えしハ先帝の源氏（孟 せんだいハ桐壺帝より前之 細 先帝）

先帝之源氏 延喜の御時承香
殿女御正三位源和子光
孝天皇の源氏也式部卿
の宮腹にて藤壺の御子斉
子内親王三人又今上の
是ハこれにあたるべきなり
いや
まだ坊と申し時も 細 立后にも
さだまり給ふべき人なれども
とて後見して朱雀院乃
御代にハ立后なし 弘徽殿
の内侍のかみこそ立后
あるべき人なれど源と
云をぬる故に只更衣
にて立后なきなるぞ
のかわりハ下ぶ人をまいり
にまいらせ給ふ

にそおはしましける。まだ坊ときこえさせし
（抄 朱雀の春宮の御時より此源氏の）
ときまいりて。たかきくらゐにもさだまり
給ふべかりし人の。とりたてたる御うしろ
みもおはせず。母方もそのすぢとなく物はか
（若菜の御母也先帝の更衣腹也）
なきかういばらにてものし給ひければ。御
まじらひのほども心ぼそげにて。大后の内侍のかみを
（弘徽殿也 朧月夜也）
まいらせたてまつり給ひて。かたはらにならぶ人
なくもてなしきこえなどせしほどに。けおされて
（藤つぼの更衣）
みかども御心の中にいとおしき物には
（細 朱雀院の御心よりおりさせ給ふ）
思ひきこえさせ給ひながら。おりさせ給ひに
しかば。かひなく口おしくて。世中をうらみ
（孟 朱雀の脱屣ハ… 抄 源氏の世を…）
たるやうにてうせ給ひにし。その御はらの女三の宮を
（孟 此女三の宮…）

後の世に 抄 山ごもりしての
ちうまつる後の世に
なるべし
西山なる御寺 細 仁和
寺也 抄仁和寺なり
花鏡日本紀仁和四年八
月十七日於新造西山御
願寺一行ニ先帝周忌御
斎会ヲ今ニ云西山御
願寺とハ仁和寺を云
光孝天皇の御願寺
として仁和年中に御
建立ありしに仁和三年八
月崩せり則光孝天皇の
一周忌の御斎会と説ち
わけて行ハルゝ事有て
宇多法皇の後延喜元年
十二月に御室にて仁和寺に

（抄 すぐれてかなしき）
あまたの御中にすぐれてかなしきものに思ひかしづき
（抄 女三の宮の年のころ）
きこえ給ふ。そのほど御とし十三四ばかり
（抄 朱雀院の御心也）
おはす。今はとそむきすてやまごもりし
（孟 女三の宮の事を朱雀の御心におぼしめす也）
なん後の世にたちとまりて誰をたのむかげ
にてものし給はんとすらんと。たゞこの
（細 一本に御いそぎとあり）
御事をうしろめたくおぼしなげく。西山なる
（朱雀院の也）
御てらつくりはてゝうつろはせ給はんほどの
御いそぎをせさせ給ふにそへて。又この宮の
（玉 裳着也）
御もぎの事をおぼしいそがせ給ふ。院の
うちにやむごとなくおぼすみ物たから物御
てうどの事はさらにもいはず。はかなき御あそ
びものまで。すこしゆへあるかぎりをばたゞこの

まてらの同四年円堂を作らせ給ふ。本尊は金剛界会の三十七尊聖形也。又兼平帝
天暦六年三月に法皇家ありて四月に仁和寺に遷御あり。此物語の朱雀院は兼平
の帝によそへ侍れど又これをとりあはせて書るなり

ほそうぶん　花　宇多法皇
門を八法出家の後に朱雀
院と申す。兼平四年
に法皇分の事あり
李部王記に見えたり

孟　女三へ童髪はやう世にうせ給し
このはらさきにわかれしもそのまつとのそでのつ
ぎくをなん、ことさらにはそこらふかむど
とおりきこえ給て　今上　朱雀院のと　はるかやまよそへて、
まぼろしをなかにへきこえうちつくひよるん
ときう世もそてぬるゝ世のこりがてぞ　細　弘徽殿の女なれはとぞ
ひきこえさせまうて。まつり給ひつゝれける　ほかのけ君のみのりくと
はかなしみしをおくぶりしかど、　又このはかなく　家のつくて
かはしむとれをくをのぶりあるめでさけ
いかしころのはなかぐ給へやうよきこしたれそせ　朱雀と女御とと　孟　朱雀の東宮にのぼりたまふと
給くりぬよをしよりのくしまさりし給

りんはんづくひろどこまゝしまかく世給ふ　孟　さるにてやは
のかどゆりえいとよくかくるひさをあぢ　かたよくおぼしとき
はかしろまだもこすさきのこくろぐし　細　女院の后のさまに明石中宮のみぐまれに
らむすりしひよりのしのへいひとこゝろや
もくおなさてさる給。此世まうしくのこころこと　細　朱雀院の御一節　弘徽殿へ乃
ともし給しぞ。女更衣らのおほかたのこゝりと　此物と
じまりめさるをひやつあんさ
みもかぐしありめくかりもさかさるひとの
くへよこさゝしかも。女ハこゝろのかりそり
あそもしくへよかしめくろくすくさを
あかるかんいとくちをしくれしさいづれと　細　法住にのつらぬ後つてくるとこ
をうらみたるやうにて世にうせ給にくよつけ

こよなうなれぬも
孟　老ぬれはさりぬ別
のかなしさ

その中にもうしろみくみのと
孟女一女二女四なとじハ此
母儀ともめのすゑの孟こ
多は親類ともつまさこ
此女三家ゑんよりきを
このさきとら

前にもこころへ門なしき
孟館母よそへぶきよ海
つゞくえこなさき海れ
とわりりこれある說狗
道し
されば母女御　細川承書
殿の女御え數々不の女御
の寵まハさしけされなひ
し入すてば御事とても
さのさへよいわれなるま跳
物なきこみす池のさるえ

てはんとぞめて此分しらずにはその中にハ
うきろくるとあるんざうろうさるにも出ゆべり　孟朱雀
細川重子うちまにゆくと
作り三家ある人いひけるさまよりひまてだく
ちかりを女三の宮のことおもかけそふのくさえ
ひとりとさみかりし抱と言くひてうちとそ　朱雀の院
家の所ゆへ
てくん故のよはにうらひさをくへんてとし
いかがうしろめたくおもひしく侍らしはめとし
のぞひつくさえてあるくを給、女御にもこうたろ　細川承香殿え
えりくしきさ海よさるてつけさを給ざれ
女三宮の御母ぎ今不の女御のこと
とえく女御の人よりへまさりてときめき
承香殿とも申しことありし
給しよくれいとさまり給し御ども言るり
孟先帝のてくと申し
うへどもし、えいろいろしりくざりしくばその
すうりめくげよいまはわらそしもよくしとい

なくとくとまくしよんとくめてぞひうし
ちらんとすでいはすずりやとぞちかしえ
孟朱雀の院なり
うちうつしおさゆかまこの御こころを見て
孟女三の宮こと
なげくられゆくまくにはすめでさまこ
とまよりくなさんまうしせまそこそその
とよをつゞくさ給給ひどれいりのつけゆへ
ときくくるやまをはなれともわりつれどい
とくちちへをやうしあまさ海よいゆえ
しますでまつるとびしびいさ紙うさうりな
まとさきそのしうり皇太子ねとさらし给
孟皇太子をもうけし人なし
ときへれどもちその世よりのこそそめそそ
まりまへる人ぞいはまもあすさしくめて

法住はかりせまつれと
細道とは祖たちを給
なく人多さまこ

九抱のけして何と
おえ朱雀のここまん
病えよおかしくなりで
なうまよりつかて八幡
ましりのとくえ

院ハいとゝてうしまたひ
孟 六条院の御すゑのあ
るへきうしと朱の院ひ
まうて

さきれありさまをとくやりがたきまゝにいは
うちまかり給ひこそりへるをつくしてお
しこころしすぐ給ふ六条院しんりを流とう
御源の朱雀へまゐりまゐらんとく
らひもとゞくありさまいりまゐらせもまゐりき
まかべきありきそむそ院いよいよてくしろ
孟 夕霧
こびきうてしさま給ふ中納言のきこえさせつる
まゐるとぞこそのしるよめしられてけりの
細 朱雀院の御猶子 孟 桐壺帝の御
よろこまやかなる故院のうへの御はしの
ゆいごん
そぐさまよおもきこれ遺言あるもし中よこ
孟 桐壺之
細 源氏
の院の御はしとてまゐられしてはいとりんどり
細 源氏の中納言
まとこそのまひとそうしと思ひやけとするり
朱雀院法華よつかさせしその今
御おもやけるの大法あるそ
てこしくさりありかれはらく乃く

そのうらくとのうしまうけ
しき 孟 源の根あるべ
きさと露わらしも我り
もとをえまゝなと

孟 朧月夜の尚侍は源氏への御そく
しせちかうきてあつうちさることわがま
源氏とも
まよううろどうれさてまつることもあり
りんしやふよしびしくまかれてそれう
らこのうしみなるそきとをすんりしき
たぬさうしきへとえどゝあめらへよなり
めれどしとうひさくらうつきさうすくしを
そのむらひうしゆうめうしことすんいつめく
御下の
ゞよゆかうりかゆるすんおりよう・そ乃
三そうりれ御んとそひしとも
れうろだんかとろふべりし人ど世人をと
御覧ハおくうらかくさの源の仏上世のうち
りじけうさびひなるとつねよゑのびをく
まて哀うぬあじらよさらとゝ世にまゐ
細 ゆゑの姫君とする世のうち
いまそうこゆるくさうしうみくき中をおもひ

このみちのやどり
子をみせふやうしたるの
めるすもなのもしぬところ
からう朱雀の御こゝろく
をんなせあそんぶりなど
て一向よ源氏よ仰せて
んくるなら玉のりますべ

三意のせれめさらてけさ意
孟 冷泉院とハ天暦帝
よろうむしくなりし
此秋の御年 細 花の宴案
の御年ニ十月さすれも
秋とするむ源くこの
執前よりあり

三あありにりん 細これより
夕顔の卷一向卯女の
時のうすハ何くも知らく
どとし 師 夕顔の御こし
源氏の御事をハゆめさ
あるまゆづりてみざめ
さりのし給ふまふる

ゆうしのされりしき
細 おいまひるなきの
めやすりまんをよれぬ
ふかしとおもし夕書
ぶり

わびひくしまつるも、うさうりふかくこころよハ（源氏の御なせ世を朱雀の御遺なな）
わたるうり
めりひなりし。帝ゟの〜とかまるにそへてこの（朱雀の御宇下の御こし）
たのやまよ立あじうてうてなるさ御よ
やくそかくしそのこと事をくるなさ
なさ御みくく侍る。内の御こともの御遺ぞ（冷泉院の御こと）（桐壺の御遺勅乃）
まくに世をゆづりまひしとく
ふぐへとつうまでりたてしづくとしき（朱雀院の御世の）
のしれあなしけりさ給とをしてこうとこの
うろうりしとし今かくめしに
ゆかりてかをともゆうし給おいのごとくてそう
あしくをんこのあさの御年の後つめし
のとこそりそくゆゆしくゆがうつかするん
ゆぶしまふひめんよゆのめづきここぐも侍ん、（孟 朱雀の夕顔よ源氏への御待従し）（源氏よ御虫あれとし）
るすみぶつりしらひりめのしきまつべ

さよしりまりしゆのへかどうらさぞさ
れつの給ハず。中納言の君すぎさ侍り侍ん（孟 夕顔）
うこいとくくもゆりへまへかさがつく
給う。とまれ入給てゆかやけよをつく（孟 夕顔の年の中こしおなし）
まうり給わりごせ中のこととさるまへまり
あかりくかじしハ大小のこしまつけてくる。（世ろの大さふかきのよ付て源氏と夕顔の逢）
しらくのさうくべら御かてうりなどのつかそる
をつかしへのされつしきこしありてなんる（源氏のやのふまいふなきとし）
どうらうもとわりのうてありしは給てもでな
ん。くゆかやけのれうもろのをさつうゆくら（孟 源のくわと夕顔の御こし）
うしで、らけうらるそひとよるへんとひとへよ
こりぬしのうらハおよごしとをもらてぬやう

三位の御ゆいらん 孟 桐壺
の后門の御かたへ乗源に大や
けるに徒さきすを御おやし
とく

御位におりまし
細 そのほかに源ハ凉しと若
うけしく。第三工に被
仕のやしらうどもおりせし
らざし稚心の稚まなる
こころしとどのおやとく
今うく政をさりて
細 只今もうつるおりし候
を附よるせんの行事を
もうげきろ口おしめす
くし

まて。故院の御ゆいらんのごとくにもえつうりま
つりて。御位におりましまして世の中はしめてひ
未雀の御位の時のこと
帚木里もおさ付ハ及びすまじく
の稚も。男のうつり稚と。とうけりすりしううこう
孟 源氏よりも上のかた
この人々のかわりて。その心えもしとどけて御ら
孟 朱の御子なと源の弟之
んぎしうてしくとおもうかき。今うくもあつり
ごとく御わりて。お心ざしおわりつみ御すの御心の
ちうをと海なすくまひわりたけたる御つろつき御
孟 源の流居とうう
しんさと。みすずよゐにと。うすと。和おきこ男の
ゆるしまと
たて御ひそて。そのびらし月日をとすぐまて
こうるん。わりくなげるに給まで。薮しき給
細 夕霧今年は十九歳也
二十すもおもさうかげうろうほどなるれどいうとしよ
くとくのひとくしてうらもともさうりよほか

孟 夕霧と朱のおかうう
ひそ。いそぎくううろうろと。これ
うちまかりしくを給ひて。このりてもおうくりを給
嫌まのおくうしろうきまこうれきをやるなど。ひとくもれ
細 未雀院の御翁し変女方に徳付の事
ど笑へしくうつそり。めりくさ所とくのなくうりほ
孟 雲ゐなと思ひて ゆるし
いまはすきく何うれはそうくれさうしろうわらえ
あさうしまと
ねう海にもうくしがいふにかしうきと。こうや
もうき福くらいすずによつくさうつくしうこそあ
れとの給ひみうろはそうしきと。いつうなの給え
孟 大宮の心ゆつくやうち
すうりしろうにくしおやしく。こひめぐうれ
孟 大宮三条也
よびなめうやとうく笑しくおうつひて。ぞうへ
さひとのうへおのりてころやすくしゃくせ世と
をおりひさるれきやしるる。笑しの給けるを

このりそこうろりせよふかるあ
うやの 孟 朱の御くそり
女三宮をくへと契
りまし

すうりよ播て
宮の御うしろそよりとお
わそんも
細 女三

その院のうちにはおはせて
またありける故よハ
孟 源氏の御乳母れ年の記
ろやうに、なにゝ人給
ちことりやし

かれいにしへ奥にまかりし
細 ……朱雀院代の
さて 孟 源のまへ源ハ
別所のやうに
さうずらてつかく
しくさ 細 ……
蓬の時のやうに
よろこびけてさりかれ
御源の事をいはむけそ
て さうし

あはれなるのづゝしりこうてまへゝすりめ
まされいさやうのすがたもやさしくそひけれど
みやこなるえびすみゆも何かハいとへ心みせさせ
細 夕顔の宿 孟 私ハ
えぐらくらくしてハ侍らぬ身まハしらくもきこゆ
ひだりくのとゝなんとりつかうにして上ね女房なとハ
孟 夕顔をのこと
のぞきてさゝめいて、いとゞ雑くもしく給ひてならい
なおあるのでしるすでおつかうて世中のをおいまつくへるハ
老人の詞し
細 六条院
つぐさのとゝ、その院のかげかりよおくちし
はありぬ御小ばえるなぢて人世にし給ハなあり
源氏のまへ
いとめとおやましてさうくよりの給
孟 朱のゆかりてし
れといひありふをこゝろしめして、まさにり
れいいにし御くしなりしへぞりしいまれは
まうこそのよかもわびまさらてびらうに
うれなりのべきまやとこゝろしわひさんいハ
とぐらゝもふもうらうつしぎらてそう
ぎりしきらよまれでいつてしくあさや
うまめこゝをしもぬらちすると見るうちし
けくまうれどしてもりひそれあそへ
ぞ、そのさよつけてハ、かう柏すくわひぎや
うつきなうしくらんくまきこゝのなう
びるまさこしそいまよありがくされ、まするよごと
お お世の御紙をくれなくくとし
かるさきのよ ぞしうくれてかづくう
なう人のまう給なうこそのくらよをひ出
孟 源を柏つかの伝露意えくきそなかとし
しでのまうのうぎうなすくなりしき柏おし

夫よりちよは　細　源八九一
まて参議よ成あらる御
もとこなんとなく暴
進なとゝも思不しま
とく
それよりこれハ　細　夕霧ハ暴
を甚進なる也　孟　夕霧ハ
十九暴まて中納言よ
次第なるとなり

おやまりても　およをけ
まくらり
やさまなきのをぐれよる　杜丹花云　夕霧
まくまのおやよやうまな
るハしそれなるをを
めやまうくもとハ係を
らんとし　師　又よ一さ
まうらんにかうさうなある
とのやまりても中をけ
やさうくるをとハなまて

或かんの身のとまる
孟　此第と源のあるや
うにをとまる
しよのく

かひさはりなそうしまゝゝをへくて、さゝし
さん〳〵うとんのまくみとしとこふんぐすひを（中納言みちまをみへのこし）
して夫からぬは、納言みちまるゝとこ御よ（男　是までなら と書う　師）
らし。ひと何あかりてや。宰相まそくだね
りけまりりんそれよこれもいとこふまとすく
をくそかさめらへつきくのこれ地かしのま（此男く子源の世盛りの）
まうなめりうしまことよりしこまうさりさ
えんすらぬなとぶくれをかきくのとも（細　夕霧のこと　孟　源氏みちまへなとしら）
すぐくおやまりてもおゝけすけまさうりんさ（しと来の此句也）
なかりていとこ。とまあり なとめそ事を流
ひめこやのいとうかうしけすぞ、わつくるあん（細　女三宮也）
なるさ流なる猶なるとうもそ。まうり給（朱雀院の此段まるなまで）

やしまう何ハまさうこゆひはすもんへとと（孟　且君也）
まうくしまよへゆうてつべうしんひの〳〵し
やとうふんよおづけるそくならおどゆかし
給ざとなましされめのとぐそめし出て流ヲ（女三宮の）
ぶくの経乃ことなをどの給さうすうつのぞう。（此常思る足也）
六条の御かくれ或かゝのちこのむかしあかし（朱雀院の此句也）（細　姓常也）
そのんやうこのころやをとあかりてそく
くわん〳〵りがな。ぐぐん〳〵のなうよハあのゝにし。
此み後、中ぞ玄ゝめつひ給。つぎくの女房達と（孟　秋ねのこし）
ても。いわし届んごとちすきうごうりのそし
なくよ。そろぐくきさうきうそなくて。さゝや
うのすずらひいとなりくなからんこ。これ権中（孟　夕霧也）

いとゞゆるぐべきにもあらず
雲井雁とのかたらひは
かたし。只源氏へ女三をと
すゝめまうし

やんごとなき紀伝わりなき
細 花鳥の本ふ本養と兼
の縁なかありぬべし

納言の紛にてひとりあかつる給はざりし
とめてこそよくなるべかりけれど
いとうやうざくまめひさきのありける
今人まぞあめるとの紛つる中納言へ
りうらいとしあびとみつ年ごろ水もらさ
さらまんとうけく心ばへ猶よりひとへにうつ
ろふべくも侍らざりけるよ。その君もたえ
ひそいかにゆかしくなどの院を
かくる紀いる古よりしたて人にゆかし
くおぼしらんは。さらぬものにも世にはたれ
その中よりやんごとなきは猶さへつく
て。前斎院などといふよりこれらくに

あまたのうちよりつらんは
てなさのかなまひ
源氏へ女三宮をまいらせ
まらで紫上明石上などの
おひんの名うふてめざま
しき嫉妬のことのそひ
ありぬべくもとと

これ女房かしこ
てあくじなるゆへ源
細 女よ
よハあざむかるべしと

そなたに紀るれとやさていとそのかうぬ
ぬあおざけれは、いとうしろめたくなれとはの
紀わすれどはおもさのみうるはいまだよ
てめざましうなるべき事なりけりとのゑ
やごとなきやうなさよきこゆべきさまやゆ
づりてきこゆしまうちたるしめさせぬべし。
まらしよすうしを見でそむかしとさとに
の人女宮をえうばゆるじくかのへのあくり
よってはかうれたちて、をそのかしつれてだく
すしねこのよのあひさんはさらにゆくまへ
さ御ありしそむそ。さ御そしらねとれ女々ゐ
らばゆゑにさらうかりとあるこうかた

女のあさむかれんハ
あざむくハ欺瞞也よぶ
らうせうこゝろ也

いつひかるまゝにわかくつらき時なりしかばこそみん
ながしまして女のあざむかれんハこと
よろぞやと心の侭にまもして御心のくらきにむ
の乱れハとま芸し出しよべしとのれこゝ
しかるともの為なるよ ともかくしさ此めの
よめきつゝ左中弁たちうの従の為さし
きんかそかしたつさまうへまなうとこのを
やよもんよりとかしめくさふ人へぼまうさ
為よあひく物語すなつべくようへるんきゝ
しう御氣色ままそことて語しまゝの従ま
おりあうハわかしかとさせま人をこゝ
ひろかおりしせみすしそハ側のくるしれ

らへうんぞろく
とみ中弁よ物語まろ
し孟左中弁よめのし
のふやう大業の出名を見
みてうらハひろうおりし
お皇女なるとしハさるの
こするきがむしされと

人を垂そまつて又ま
ごゝろよ そまろ世云気
の御孫え もすべきまう
みすさるをいひて孟来
産後を垂そて又真実
のふよあるん人すしくし
とのれハつゝまつ
お御乳母など御孫え
やぢうハ御などの心すも
為ーしと

御後ごゝろよとまもろくも
お妻産の御為そにぐそう
のむす実めてさゝとし
うしこさすぢとよこゆれと
お御身の任乃為あるらく
孟貴人もえども女の富
せそて実めづきうれど
みちすとし

さ風ぐくよつけてこゝあるとをとさへあう。
何ぶまよつけてま、御うらゝとし語人のの
ハしめのりしげうつへを垂として
まこまごゝろよらひやすまべし 又
これハどのれハつゝましもくそそしつまた
うちのまめづうハよかわらんうとんひとふかし
をわしそどのつうらうひのかのうしやかわ
しかしうらくまうさやすしともあんとさこれ
ハらうぞ御よかうぶつしうん乃かんすう
うまもとをうくもこの御ことさぐせうう
バづうせうかくうえんあるへさうしつさそ
ぢとえてかれどぞんなハいしくせくぞめ

くわしくの洛中に
於御京田人の中にも
こまかく常盤の出んせハ
人のきはにありて侍る
ともえおもえんとせん
まとし
いそぢらもすんなもじ
花康友の寺の御もちし
まびらも人よおもく
ちらせなもしのそとみけ
がちれなくし

がらくおもてむきにあはれげにもてなすけり
しくらくわきさの洛中に。とちらまことの
さも経よつけくも人のそねをあらへらせと。細帝
いそぢらもすんなもじとりてらよ。弁
寺の御もち師禅寺思案の首也
いとらべきれこもまのへ。深〈呉常盤花也〉へあやしきれ
ますくれひすびぢらおろくもそそめのある
人ハれらうろきろしろとも久さしもある
くしぶろきろをもてらじくまつけて霧とらう
あひておもさつびくへ出てまれどやむびと
細書上
すく出がしくろハかずるありてひたこゐあ
実にあかハる
れバきればとちてひるげたやすゐまゐ
女三の
ちら経ならじつゐハゆゑかわらとなしくちゐわら

それはとちそひるげ
ゐらを申ゐ　細書上は
ちりきししら候こそ
盃書との蔵えよ出されて
とらま答之
ゆきくせありて　とし　女三の
此際まそて六条院へかりて
申すかするわらべざらん
いとうり書上とらふとも女
三宮へと云ぶびて押立
て中蔵え　とらずらなん
えわらしとハ云へども。代い
ぐとうしら是のよゆるて
とし於義
代りぐとらくりうる
細書面く思案して代
知ぐらしと云つる面白道
ゐりい以世のさろへおま以細
らり以下ハ源のつ以代れ仏
と弁の女三の乳母まさき
きし人のりどきことも出ひ
しし勝月衣六条院
思ぶのゆす　あびとそれ古
人のそしきおりしるうと
くらくよつけく　細帝
多かれし皆すらそ
ざらしで今しらう

てりしさやうのおつりもるよ　とあらぐ
いらしきんとゆの由ともしらわすくびでと
書上ときてらし
しらのふくしいえあぐじとくそへぐ
くらくされど。代いでとどでりしるくこ
わたくえみんぬわゆうどろハひよのさろへどもの
源の代案氏の君
世よすぐそてわよらりしゐすさことハるさし
呉源氏
女のすびつてそらんびへのりぐさとも此ん
の源て辛巷ならのみ式さと
らふもあゐぬかしともあわしろんつるよう
らくのすさひしらくぬもおびの給りすら
源のく
よげまぞのれぐさえそしまろうもぞる
無りころるもと
まぶ源の給ひとくしろるとし
んおりまそでぐくよつけてわれげなうく
しまつる人ぞれを人すらさでそらくされる
をの

おほ源氏のかたきところを
このこ云ふあれかへるけ
れども源氏ハ比量もんき
ものよハあらぞとし
それまめぐらくハげにまま
おほやけことへ 細女三の宮ハ
御つかひきことよくよそる
さわわかられハ柏木さ
まく思おつしらがれ
りあるそしに兼てるど
紀へるんずるこの文を
知ゐのこりいわかりきと
ありあさし
あのくゐしの比ゐでまよ
孟子ハとしおほ女三のめ
のとまう中務しに続せ
しかくとき朱雀へや今を
らしの比ハいかなるひて
おほきんけ中弁の女三の
御乳母よりそけしきうり
御字にし柳あまよけいゐま
とありぬかありとし
給まゐくのそくひら

きへよいのし給ひぬとくりわうさん
ことよく源氏のれあわりき[illegible]
こそぐしうやいかゞすうぞそれにみれど
くへげよことかりつまさべいうにさぐひさ
みれあそらひるしへしくうしふみとめのしまる
ことのつゞくよきかくるんすまよがしの[illegible]
そうて まことのめうしかりしハさのはよ[illegible]
うけひさしきを給てんたうしびの[illegible]
ひくおもひめぐきしくうとこうとの[illegible]
しまくこよあわりあくしいつくきこえん
とらんや給しといふらうへきこしまうぬ[illegible]
んかぎりくよつけそいのあるのしらはしくへ[illegible]

けるよう比けてし
おひしまうけてし
それくよつけて 男 源氏
のはんとさん おほ源氏の作者を
ゐるのちりくより作る列
の比ハ回源とく
にうこのぞこ云ひ云ハ
女三を云さむ人ハ柏木大
将夫とそどかわりとく
おほめのくよ源へ三婦
つうんとさひあがしく
つふしおほ宮と云ふへし
女宮権の作る列とき
んしかと
にまのせれやうとそ
細上古のうりハ源素うそ
ゐやうしそまし海とも
しれとふらと今の世ハ何
ふうもとして兼んと云列
し給ふでいと南附のふう
ひとふゐまひ女三宮ハ何う
とおまうまくなやくまう
ぞまとくし

しまさまへつゞきうくきれ かずゑゐよま[illegible]
し給ふれどもさくへんぞよみつゞくへひ[illegible]
へさらずしひさうくといふ人のおもぬへ[illegible]
あし給めりを見ど御さことりや給ひん
れうしろのぞこ給んでいおほきさ物し給
めうぞしくゆかりしめしきこめそてそう[illegible]
めうぞりうきへとやゆれどこの世
うさそいざれ限りしうよのえうしくゝ世
中をれんとぞくしあつべきまあつしまう
べうあうとひらきやはあさめしく思ふつる
くゞ給ふくのきつへてさを給よまうるよ
へぞいつうのわりこそくそくつぐ給へるさ

わかつゝに　咲　下に諷違しつるとし　師　わきてくちをしくものゝしこれ為ことの世の人て
ふかうくとく上臈も進退あしとといひあそびへすぞこ
つらゆう[illegible]師　下とは乳母どもいへめくいふ忠臣とつくもとすれどもさうあり
あらこの涯ふとすそ　細　上うとまそによきさぶふさあれべし孟上がらずおれば下ものあり
ことふほうるとそし

のほどにとまそてよきうへさとてし、さうしき
ちとぶんもるびさるふ　ふとそし、さうりあり
ことゆはゆ[illegible]めらうそしうれらしろく
りのしてはざうし人は、おもてつあさわざよ
かん[illegible]へさしこうも、おうりひあ[illegible]ら[illegible]
かんとことらのよびさつる後に[illegible]そてあ
おくしさやつみもありかくたりさ[illegible]く
いそどと女はゆくとよこ[illegible]あおよつけて[illegible]
らやしげるつくともめか[illegible]さとひも[illegible]
げ[illegible]しりのるのかれとい[illegible]

ちうひすむまきこ人もらふ[illegible]べ
おうやしにきてくゝ刻と
る初[illegible]てき[illegible]山
こともゆがりつこら
これこうやてまるとき
つそてえるべし
よこうさびかとそども
お日女[illegible]の男よそて
あみはこのまあまのか[illegible]
又女は男よつけて[illegible]を
[illegible]とひあう[illegible]とし

ぐらくちひ[illegible]くぬすきさるふさ人り
ちとそれくどものびけども刻ゆうのち
ふそそく世[illegible]るもくさんとも昔の人
のふさつくうくよゆゆうろおべ[illegible]
のことをはぞひろよぶぬ物しすくひより
そん、いまの世よいすさびくしくきろう
しきこともおつよられくさて[illegible]
[illegible]日むぐくゝうきこか[illegible]の家よわづらふれ
ずれひらのむそあのぶふ[illegible]代[illegible]しくる
ぞれうさ[illegible]のすさ絹どのよれそらわさむ
まくるさゆやの[illegible]りくをかきげとぶろ
しむうさぐひ[illegible]あくいすゆる、いひりそゆけ[illegible]

わくそれ[illegible]くさきくよくらと
それ　又男[illegible]よ[illegible]ひ[illegible]
[illegible]そふそて[illegible]の[illegible]人[illegible]
[illegible]の[illegible]父母
[illegible]るよとふれての
らも女の[illegible]
[illegible]人[illegible]
[illegible]人の[illegible]その
[illegible]人[illegible]の[illegible]
[illegible]男も[illegible]
[illegible]の世[illegible]
[illegible]
[illegible]

いひりてゆけ[illegible]
細[illegible]下の[illegible]人[illegible]

ゆせびらくて同じからく
所らとしても女の人ハおほ
みだりごと
きらくようけても世ろ
しいふなからしハ
まるるものそても嫉妬
ずとりが身しくも始末
の者縁ハもうびすらず
うれバ女三の従男の始末
かりしあること
もくものくをとうとも
細 居窓よつけて教の
定めうらうハ道の始
とべのびらうずとし
あらくさうるすさこえ
死をハ下に孰よろう
せとこさうび人もゆう
うねと我んづりし思ひ
わざうしうら女の道を
へうこてするさるいそい
ありかやとそうするる
身もあれどそをとめ
かしこうしつけうか川く

みなあまくしたり。殊にはつけてもとくを
あやまちなからしはきかりがたきわざなれ
ばしろびようしろひきうんとくべくあらき
ともくおさるべき人のうらしはゆるしと
ききあまくみて世の中をとくぐすべからく
とするせよそ猿のよよせとろへあうと紀こ
ふびきものめやよろしはなるべきおりへ
てらしまあさいろいありかやすること
よそろせりいくてしきおりうごうひせ
あしきあれどあ我きちゆえらよい[illegible]
きくつけさる猶はせやよちしれどもあん
[illegible]

ゆやようさん
細 孟子曰不待父母之命媒妁之言鑽穴隙相窺踰牆相從則父母國人皆賤之
かうくしきうじんの
親うもうくべきん今もなら
ぜぞ女の思ひまぎらき
るまとつて死しめつ
ねの人のしておざるよあ
いつけくせがするよ思し
てらくのすがり
なかりにし
ろうしのくりりあれて
死三從唯志必不各別諸
の道うあれべきまもあし
こそもらそつうれておく
さよめくざうし 細用と
すぶらん。かすよ人ても
てくもくせの。あくらうり
かまんすえしみでする
とつひりてゆけべ我ん
くしく所移用にの幸き
ふるおくぞまとくしき

わざなくぐしうれん。女の身よはなまちてとど
すれをぜすし也ばゆうわざたらうずよく
きうし人のすうしひそそざるおもひける
んづきうすさしとすり身づくしのくりうへ
るれくおりくきみもおしぬとせすんよ
まほよ人みもうえすしとの猶さく哭
くれんるん。いとうしく男のりそか
しおうさ個。よろしうしし何つへ。 便くかつつくるもし
細 女三從の注るし
あやくりのらうろこころわら個しをし
さ個あかれいさ個たうよこれ道のらるよ 細 あのとこのらよするそうは之
うきそりくろしさて申る。そやへけかこ
とのよよりいぞれとこはいしゃうきこへせ

人まへしおどしてさ
かゝりのおほせの御ありさま女
よくそみえて。みな御後
見くせのかたどもとさぶら
ちれんいうらぐしさ
るとしく
さてそれにも　細　所存なり
わけまゐらせ給ひ　後見したまふ
と成輔しるさとし
とひかけるなどいひてきん
御方々のかへしうすかけ
ことにもれまけて女三の
御ゆるしをかけりもありさ
思そ御後見あつるを
あそうに譲せしかべき
細　かくのおもぞもしし
らど思ひかし給べきとと
御おもひ人あまりてあり
とてそれいのかうわべき
うみもあるむじとし
そもうくてる人のんう

なりなむ。よすてまつりなんのちのうしろ（朱雀院の御遺世の後の女三のありさまをおぼしめす也）
ゆくへもいかにきこえかたし
いとくるしくおぼしめさるゝ（細　乳母のこと）
よのおぼえも。おひさきすぐれたる（朱雀の御方々の御後見し）（かれ女三の御うしろみをそこ）
ぎんじうにへうちじわれしつるを。みなさ
ほいもとげずなりめくらものすゑにおひ
ゆきあれてゐん。の御心のうちいかげよ（右　孟津　乳母よりさきに朱の御思ひ）
うしろもをのこゝろえてしるや（もとも）こ
さへともならるんをみくよわがなさも
のちらろべきんひとにひくきこゝもめしも
しかしてもらくてもんのいうちかで。のど（紫上の御こと　紫源氏）

つまても人のそゝなさとおお
いまはことを

みれしすらうて　細　若菜
又女三宮の御乳母の兄の
女わうちをいう

左衛門のかうべ　細　左中弁
の別当と奥玉薮の衛士
いわ比諸の別当として
ありしつねかうりて
よりの月人及女人所扱
とのなかし　細　系図の右
の家づさは女三宮の勅
別当とのぞむるをいへり

しろやすくうきいかすくびらく物をして（孟源の御事は雅なる人として）
ねんころにてしつらひしうきでひとされ
ぐらゆくはおもん。おぼえまゝいゝめでたき（細　宗の事）
しうしおれじすらかくしくんとなるへ
へゆくしかべきみはみかねとおさがりく（細　あまりにちかきうへの）
おとし　すんびらしめくゆどよどりきこえとなれ
てどうしろびよくゆかしやもてなしにてん
れまうくへいしくのとしげすくうまんわたかな
左衛門の別当の家づくさのをびるまことさ
よりのまあやうるすへきこしまへあるすれ
ゞまえすようゆよそやさやうによそも（又人の事なり）
さうなくはてなぜかぎ悔しくなんあるん

むかしもかくやありけん
細 嵯峨天皇・延喜御門の御よ
のはなむすめの事、おほよ
り王河帝王女遇庶人
事 嵯峨天皇御女、賀
陽太政大臣藤原朝臣
良房嫁之、延喜皇女
康子内親王配九条右
丞相師輔 略記
細 柏木也
師柏木家の娘にて右大
将の娘 細 女三宮
へ嫁し、うへの
内侍のかみ
此大臣の弟は此内侍のかみ
ハ兄君之師 女三の宮の母
のすゑ 柏木の母は女房姉妹

たゞきんだちなく
おちゐるのうしろぞより
の人かハアでとし

のさみぶしとひとりそへまゐらせ
くざらさんぞありける
お女三の宮にうらみをよせ
ましまゐりてかうぶりし
させし
今はつゆもわすれしなみねんね
唯世人もたえなるよしをき
うけし、お女三の宮の御姉
といきてよのくさがり
あつふゆくよしむかし人
もゆかりおもふ恋を道をば
人もえんりすともなれば
えもゆふさんとそれせは
くらべ人もすくし

こむかしもかくやありけんとひとへに侍ず
も人よこしなるためしもありけりて
こそありけれさてひとへにまゐらせけり
やんごとなりかりしこきことよおぼさ
めんハいしあまたにらうぜくさわざに
なん、太政大臣のすゑをよおなる御内侍の
のきれをうけしそのへたかぬてゐ
まじ今すこしかめりとあるみだる
かどりはしとものぬべきさとしい
とはくびよらびらきひとつなり
きらかりくてやのみずまそて
つくりしなづかりとあがれたりしさびと
よハぬけてさえたすともてしかくつね
まへよのかく光とすべきへるゝれバゆく
をさもよのりそれとするえこのまゐ
みてものひそんよへどりぞありや此
しかりよゆかりしひとかりやうゑも
ゆかりゆあるゑしらとバけてもせ
えたやまのみなりあしもやくらら
こちよの給ハ手まかりてしくのと
のかくびろうりてらをつくとんで
ゆかりるゆかりさゆくもこの涙つ侍り
今まくひとりのあめてみてすらか
をいそうとさゝるゝくわれさせめとも

そのおほいとののこと　花二条
太政大臣の四君柏木などの
母ハ朧月夜の姉也。このこと
なり。細二条太政の
はなしとめし
奏せさせ　細　玉鬘夫を聟
にとらんとおもひしかども、
けしきばかりにて、そのまゝ
きこえはづしたまひしを
かへりみさせ給ふべくと
もおほしつゝのこなたより
みせてつかうまつれる
うへよろこびよろこびて人の家
いひかはしたまへるまゝにて
と云事也

きたるをりに、さやうにもおもむけたて
まつりて、めしよせられたらん時、いかばかり
わがためにもめんぼくありてうれしから
んとおぼしのたまひて、尚侍のきみには
かのあね北の方して、つたへ申たまふ
なりけり。よろづかぎりなきことのはを
つくして、そうせさせ、御けしき給はらせ
たまふ。兵部卿宮は、左の大将の北の方
をきこえはづし給ひて、きゝ給ふところあ
らんに、かたほならんことはと、えりすぐし
給ふに、いかゞは御心のうごかざらん。かぎり
なくおぼしいられたり。藤大納言
ときこゆるは、年ごろ院の別当にて、
したしくつかうまつりてさぶらひなれ
にたるを、御山ごもりし給ひなん後、より
どころなく心ぼそかるべきに、この宮の
御うしろみにことよせて、かへりみさせ
給ふべく、御けしきせちにまもらへきこえ給ふ
べし。権中納言も、かゝることゞもをきゝ給ふ
に、人づてにもあらず、さばかりおもむけさせ
給へりし御けしきを見たてまつりてしかば、
おのづからたよりにつけて、もらしきこし
めさるゝこともあらば、よももてはなれては
あらじと、心ときめきもしつべけれど、
女君の今はとうちとけてたのみ給へる
を、年比つらきにもことつけつべかりし

かくすこしもとめて給は
孟　夕霧の女三をおもはぬにもなく
れむとおもひ定めかねて
て朱の上はまことにあはれ
ありしかバ、もとよりそく
なれてハ思せうちとけ
うひすかで

細　雲井雁をゆるし給ひ
ことにつけてもとましけり

さりつてきまよくくつ
りそ、ふそへ云ひなるべ
なりしとさん陽気にせ
とみ悦とや云ひさんとも
まかりけ地もとや　御へる
いふつつさを紙よるを
らわされて　紙よ物ぞ云い
そうなれ

りきうりすきくしうね
孟夕鳥ハあるくるを
へんのうしねんくされ
ども女三のまさん中出
わうべきつくどとよも
なり

こあくろうり　孟吉気
よ所作の手紙にされは般
代の例かま　うゐんべいさま人

右前給し

うまくゆかりとろつしまう
ぐ　おとそとも此般見を
足めあわんとあしがほ
取よますみおもじと
あそよの間に御殿の
わうせ、米雀の書点状
らし

経ざまよ、ほうぐ海のうろろもなくてとそぐし
てしとあやふくよ山まつしよきらくり。
よいうありのとやおわりせのかんずの兜（廿三夏殿元）
なりしれ、やむじしうきくまりくつくひる
ばあまじしと御ふかくぞ、ひぶら志よ（廿三三二雲弁のうえ）
やそうしれハうがとらりしくとそいわる
めありしりすき（夕鳥夏住をみて）ハしうしねんるれば云ひ
三川めつくらいぞねど、ふすうらはいうぐ
悔よきくめりそて給かんまいつよるや御
えてぞくしきわりなり、恙気めよもうつと
とじもうつしめしてさつあくうりくさぐ
いゆめのくしろり、も、のうらの世出（細般代のまきと）しめし
うすぐきこしわりと、らく気しめしめぐ
らとくきしるりくへびしうしとそとを。
まこんいうぐうわりとるくとらゆかしう河
ここすりいい般（め）三重院よこそ御やさ悔よゆ
づりまでしきを給いめしとるん、わざとの所を
くそとしもいおくねど、けくしさおかりけると。
（生雀のさ）ゆからさうを給ても、（お米雀の書夫の作せ部さと）げよさうしわりい
とうくゆかりの給いそくうりと、いわく中
（御ゆうくりし）わづくとおそて、ぎしけりの（おおのとな中弁と）弁しして、ぞう河く
あるいつく（恙くまり害の給を）へ中のしさを給いうこの（孟女三のまと細三重院よ）夫乃作と。
うくゆかりしまつしよさ悔いさんかぐもられ世
とききまりつれでも（お恙うほの目く）らうろぐけりされしくよ

いろく立をとられ 細 朱雀
院より源氏より三家の見
はなれまゐりし 嵯峨源氏
卅九朱雀院四十二之より
なりし也
なくいとやんごとなき
嵯峨天皇の御子に御後
是は朱雀の御身なれ也
いづれの御時よりも
昔いづれも御名あり
まして一段の御絶
世の人は別であつかひ
ましとて
まれなりて御家
御源氏くとは六代をもて
世のあらひにかすり流や
わたくの世なるれバなり
さうすなり御よりもかくまし。仮名の御はかなくまゐらすの由
ましてなく子のなれ
なり。ぶりてとらぬ六源へ出る

ときめかれ給ふありけりこと流の出世の始
まさく人しくてらよなきいくらくなら
とられまうりてまるべきしてくその御よしろ
このくとどいらけたり出しんげるまらざい
とおやけなぬそし。いまもまゐらの御はまろ
くらとゆうりくさうかくいゆかるまうりて
いづれのけふよりもまさりてよぶくさなる
よそまうべきめまおかくねどもきうくと
あまさてらてとささすりてんどいひしるよ
てそいらうしもきてめし出しもと。それ
ざるいとわ家なる世のさざめわりやし
のまそしかしてひくしよとのまりれさそてまうへ

十二ぶひくへよものちれ
なりぶりてとらぬ六源へ
さきてなしよかくもし。仮名の御ハからやよちらてしつるのむき
おおよくとりくまで雲居なりそんとハ大かたの由ならん
のよそてゆかりまゐらん氏源の御かざるしもころざきの道

きすぢよりひろまれ出し人ことにいひて中
中まうちぎみとさうぞくくぐ
あしく身づくろのよめおとおさうくぬ
ほどしまるんわくるて。中納言なるとはかて
しわくる御くしきやうなれども御さ
さとくてんぐらもつるよふやけの御れ
うつとくも御めくさ出ひきれるあれぞ。
きも前しかしんよるどうこよなりつくらん。
されどいとくまさらそておふ今さらこ
まりふるくそておめれバそれよるくしくせ

ちかうつき世よさらん
姓 源氏も九条づくより
御家のくおかりしより
御未なき立とそれまで
なども とく

ゐゐんさこちりとく
出られハ雲井居のさ
ざすりまくとく

ゆかりの御そうめい事を
あつねとくくのまへは
大きこの御孫合きてわ
らどふうく源氏よみて
多くの朱雀の御心ろ
よ源の大領掌あさ
れとまし

后とこれは一條の人
のえりぞくふらておい
り申すし女御達一所あれ
よ春宮御わうべきゆへ
わうもとし孟源の領掌
の人せ出きし 細ろよ
ま系りいへとも割よ
ちからの申すよいつべ

まうやおもくおもしののいひて、身つうしは
ゆかりしるれさうら御あろと、弁ハゆかりの
けの御さぐめかもわくおそとうくのさまへ、
いとおしくをとらもかくもお心ひそぶらく
よ思ひくらよさうさ御みどくらくうち
ゆれバえずよ打息して、いとくるしくて
まり給ふこころあれバおぼろよふくさ
しきりに親のさしりをかくこゝろあり
かゝやくうらよこそなり給ふあやん
どとるよし心の人でかひそしいふとは
りるさしるすりそれよさうぶくきこし

さくにてハおりくまし
故院の御付 細 父頭
立り弘徽殿の大后も
藤壺よ竈とらてれ
おひしるし
大きさの 細 后ハ桐
壺帝・先帝後よ
世ハ一御今よりあまん
生まれし女流そうそ
いきましし 細 藤壺をそ
とし 孟抄日 御いきおひ
どうひさらみどいふよ
しき方ニいうねうある
この御子の御そうし 細 女三宮
の母と藤壺と姉妹る
うまして 暁孟
ゆうとさしつぎ 細 若菜
まつぎて八此女三宮の御母
きさうしれおのし給て源
も藤壺がおひおしきされ
むとの姫宮を源ハ御う
おくおひおふへしとし
幸もうれぬ 細 十二月に

とうぐうをやうしきて、藤壺の御付なり大
后のむすめのむじめれ女御にてハ、いときよ
給しかど、ひげのこを忠よ系りまいらし。
へ后宮によそうしたとさうれ給ふよさうし。
このここの御母女御ハしそして、の宮の御わう
ゝゝよ押し給ひつあひうちもう つざまハ、
いとうしといふれ給し人のおぼへいづ方
よつけてものひわさやどうぬてのさえ
おはらも此をとしゝうどいふりしく心ひ
おしまてし、年をおしらハ朱雀院よハ猶くらら
れとそさうら御かとおりしまてろ又ハおら
ゆわさてえてゆかりえうく心すさのとと

おろくをそりて兼容よへありしを奥よ年もそりぬとおりて年のくれへみてしう

孟 保元の御禊の膳月し

れ嘉元のより 元昌子内親王け法名を例をおもひつり朱雀院の法ひにおわ

又法體の御附なり也とく 同 李部王記云天暦六年十一月廿八日昌子内親王初服

孫廂 主上親結腰ヲ又云 同記云天暦六年八月廿七日太上皇御乳母加賀命婦告送云院

御悩ゝ重 又云 同十四日落飾入道抄 左兼平の法門御悩よりて法落飾のよし

ありしやつぐえ風こうしうきゆくえ紀えたうけ

おるまぐいつらしくのきむこ法えぬらひへ

人袋のおしありてよ流当ゆきおりしありく

うのあやみしさとハまさきせ給ひもとめ

うのうきえ紀乃うぐらをおがりやうそう

りくこしくしくうやくぐらりとくの

おせ さとえ法腰ゆひ汝任衣領左右と

へませさまつりれにてゆひよハ

とかわそらりあしさきまつりれども 孟 おく

ぞうあきんかれしまかさ

久袋 細 栢梁袋朱雀院

まあり 同 栢縱者皇后

御在所也見九条右丞

相暦記 孟 栢そつる

こころえときもへし

りうらの后けつうり

同 延喜天皇仏仁八年男

女衣服用唐法ヲ 出朱雀

札王后の六服あらは元号

まふくより衣 同札王后

六服よりは褘衣揄狄

闕狄 鞠衣 展衣 禄衣

しかうり

元康子内親王の法りうき

のこしかひよ小一条左大臣

の例と 同 李部王記云承

平三年八月廿七日康子内

親王初着裳服黙小一

条左大臣 親王外舅結

御裳腰ヲ

おもきれど法の法ことよむりうりそむこさ 新 前の小 細右大臣と

ト給りてよだしまうり給今二所の大臣達そみ

給りの上ま了るどにまんなるさきつりあり

をおかがりうよ多めりとひまけつくまい

つ給えとうらハ人袋上だ人そさきうれ

をゆそらく 抄 内裏の袋上人又玄宗の袋上人と

ていかめしうされのそされひくさうり法の 朱雀院

れしとハ山うバいてそとらどうかすれと帝王

まそ 大業八帖よひかりありなせとく

まきを初きそてまつりてくらうしくこうて

めつて、蔵人所おさあ袋のうし捲どこと

むかくなしせのまうり云多院よりもれと

あらひいとこうさしちょうりのとも人

蔵人所よきあの

膳 蔵人所八年の世にも蔵

人まして調度捲など

こしよわて もとゆし之

孟 蔵人不納殿共納 度

の 御ちよ 棊の へのり

ゝ 椀なりよそて捲く

の縁、高君の大将乃れ引出抱るぞ、披院
らりぞ有りせ給ひる中宮ともられさう
ぞくゑしのそこ心ぞるてうぞろ任ぬて。
ゑの前れぐるおりの具、ゆへありこ候り
おくしみくろへて、さまりよも のこゝろ
ぞんもうしるそんぞれしとうとてその日
れ久つるとありしさき給ひ女の権乃ゆけ院
の前上ふゑにふらう娘とれ使にて姫君
のれ宮よゆりしをもんくの給ちせつれどう
君しゝぞ中まよありけり
うしるぐりしる昔を今まつるまれいまのを

の袖とまらしせし折くゝ
高君の大将乃 札記八
大饗の例とりてしれと
らのとしゆひを高君
とらりおぼりて唐綱
まハ徳宗爵齢の之風中に
一まもあれバ高君に立
るのえしんとまま
兄弟りさまハ先人教上乃
然式あれだその皆主
いろりし
この昔の代々あけの具
高宗兄ハ後合屋三 秋好中
宮の御の時、朱雀院よ
てけるのところく
ぞんのそくあすてつてせ
ませしりわらぞれよあり
あらそへてなどせ宣
うけやりて此中宮の代
御肉きさいあれども
袖けらうもれじしゆ
づりすてたるとうろる
るべし 喉細盃あし遣ハ

じしぞ沖らばけり、院にらんぐしつけてわれ
姫宮のれうへ、みぐしの御ものれ
へまゐらせよ。久しきゆかしき別の御備ともりしかや
きうしなひて、御あかして御かへりまゐらせ給ふ師仲さへ拝みゐらんと
きゝの世わりしかりしこゝじもありそれおえ
捲けたうハあさとしゆつりてまつる旧
どけよゆをしづてそうきんさしるれバ浩くへ
てしも、むかしの表とばうし乗て
ふしつぎよこゝ捲みこしゞまゐり世を
つぎのとぐのうえぶ(ろ)うそて(と)しまゐこゝびさ
えしまへおれたいしらうしことわんべし
つ。思てかうしてこのれいそこそあれい
三月ゐうてつねよれぐらいめつ、給ひもうさ

かくし別の小様ハ後合の意てしのちの
るつくへやめて往復(かれ)ゆけの後と
うらまして 細
そぞろくあへ
さまのう
こうらく、師介ひよりとハ
あへ神 細
くにむ秋好中宮へ
まいらせ
あの哀とん
まてのふへく今日ハ後去
のとふりく
そしつぎに 細中宮
頂よ此女三宮を見る
りのみくなる
盃中宮のさしつさに女を
のさへていおつせとぞろ
御そろそうぐへぐあし
さがつまでとる
罪といふなさつて

細 中宮大権亮之
杪 比権
廿三ノ之
亮り朱雀院の前上へ今そもあるく
杪 枕好中宮へ
盃 秋好の中宮を
朱雀院之
秋好よ
喉
廿三ノ之
盃 朱雀院之
盃 朱雀院の心をなく
杪 古宸忌の三日三後朱雀院出家之
細 中宮の人さへとも
六十三

らしらんとにまかせて
孟勝の心しとまゐを朱
の出る火えもあるとさう
く
まとせず梅乃ハうころあり
女三るどの出よの別乃
乃しくハくぞらあり脇
月衣の話さきぶ別の
出しくハうさうゑのしと
山の存るよりそめてそ
石李部王紀云天暦六年
三月十四日亥時太上天皇
朱雀落餝入道延暦寺
座主権大僧都延昌為二
和上法性寺座主権律
御堂運照阿闍梨勢祐
已講為唄師

宮の人々ミないミよいはずとてさ所々そ
家かハりけしげうりわざあれハおうして、
表げよ。出家ぐしも出がりしまりぐ。閑行の
山の表い。つとさふ。ひまてハうくい別
いうさうとごうら人てひまそしさのとさよ乃へ
ぐまらあらなうく。まひとぶしまる別出ん
とぶさくをわうれてし出、いとぶられめん
それどおいのぐらよ出けうゑくよう
て山の存るよりそめて出いひとと乃
あぐりミ人まみいて。月うか、なとしまう
経。此世の別まますふ出さあういまくるま

ゆささき家よ　女三宮す
乞ひ出刻ゑゑのさらめ
ぐきさありよ世とかくも
とまれしまりぬとし

あさうぞうりのとふるまて
為太上天皇封戸二千
戸勅旨田子町おり太上
天皇封戸全除よのせざ
るよし記るよあり。故
裏報み上表可勘て

ぐよ。源もえんとぐめるひいはずおして。女宮まうら。
女出。更衣らくらの男とんなり。うとしミとゆ
もんくさらて寺さとしむよいてんあそさ
うしうりらでも川やりおおう所よやぐく
こもりく〳〵見しまうりくうふ。淨いさうひ
てゆかりしめさうしをとあぐこの地さるさき
よひらされてと見しの経とも出よう始め
すりて出とあうらひのきけさいとさう〳〵也
六条院をずうし出くらふまりくさ
らをあて。系りのふ出しうらぞんの。ふさと
とそふれせあり。ごい。おりねのみうどくひと
ちくさとよりあるへれ心に。まとしものぞ上天皇

まうしの太上天皇との儀式にはうゑがりしまつで　私記　封戸年官年爵みしても太上天
皇とよりつ不るかけ世なりし天皇にみなくましくし御門の脱屣の後乃儀式にハ又か
つゐさことし、是又旬論るの事同封戸の戸とのふるハいかゞのことそや・一説戸ハ民戸
也・千戸万戸とのふハ民戸を寄らつくる事ぞれを封戸ともいふ

細　万事よそそき様なふし　お　天皇ろれたもとふ給と
乃儀式、まほうけざりまつぎよのまて御し
去格まゐみなとゑし
とひまゐしうろさ度あそどハんことるれどこと

ことしく／＼ね御車
細　常の檳榔毛の車なるを
うべし・庇の車・などそ中
在し事より出来れるりのゝ
孟　檳榔ビリヤウと読し・
花　西宮抄ニ云ツ太上天皇
御行　供奉人装束　上皇
乗車　檳榔　朱雀院　御令
檳榔ニ　今案　唐庇なる
ハ檳くよ出来れるりのゝ
し玖しまゐすらく
お　朱雀の妻の院なれとさ
くは庭中　又は御んるまさ
まゐし

さうよそそごまそて・例のしとくしうしゆか車
よるそしまつりて・とよ生アるとしさうべさうぎ
つ車よてぞつろくまつりまゐる・院まいりて
じくお様ハさこしさゝせまゐそ・らうしされ
うらを御わりつまりて御對面あるうへ
しさゝ度るすくハ・さぞおりつしまゐすうへさて

の御御御以りぬとせ給
て抱んかざき御おりさ
まぐりよみてよぶまして御
らし御りし給を御らん
まり御らうもいかつれ
まうん言われてハ異り
とそとふるとさろ寄り
の割まする

男まとうそえこともみ
あらまじつハ　お　朱雀
よろしくハ源の男教
まするぬまりし

アまゝするれわ給ことまり給わ・さうしくうさめ
さ紀りさられそれしくとく・めでとく地ぶ
まうれハどもみまえまあまひ給ひ・教現
みをとられなりし此わひまうよの一の御なく
とまつれりしハ此ときのかいあつくもとそ
袖まよとうろつまそくとふまへく・よ西・まふ
ことのそ給て・つおようくまうそしまりる
し給まぐふどられさそまうりわうんのわる
さと・ふ刻りしく昔なまくらりそれ男より
とりてハことみをあつ世じしく・とし申へ
うち給あうくあるど・さうしくまいと志乃ひ
がうさらし地わりわぬべきわぶきまてそ給

はの命

なよかなもうし
世の花をたのみし
くれなふかなをもるげ
つきうるまし 朝世集

とうすひのくさしもくさ
盃くても餘命あうそ
八歳まのくさしとげさ
うべくされども
の比おそて 師世とのく
れ志んくさうとりてし
命にをらよ 師一命十命
とるりとものよし
くはいしよ 鬼法出家
べきゆへよう事とむろく

それとすぐさめがたくながりしうち花を抱
んぼそくながらさうしはえらんでようらば。
さらに御されぬつていふべくのまの
うらいとまたげよきうしさをあてあふ
くわたうて世かし作くいまぎうよ彼へわるを。
うちうちてかうきれいのうしまそこと
げもてまりすんこしうそひとらしてまんかく
こことのちぢまつるひとすくはどころすひのくさ
しまらるすおもぶかれどもかけりつてものの
めとさて命にをぶるよとも作うてらくし
さらぬ身までも世よるあがらふらうしくて

とく
今までつきあるすきとそと
うらとぶるよ
し願ようけどめぐる
ま命ありしば。今まさく
法出家遊行の罷と謝
いうてそふとく

まれよりすくぬ法くらしさ
孟女三のまをお師度と
ありども思ちむまきぬ法
うしろき

のへきつくれいふしをあとくれども
めるらさをきこりをらまやとをうくとるん
とてかわしとそそうち尊るどもく
の給すうつくしよ。女ここうちをあふくさ
うらとそ御あんいころくう紀中佐。
又やまぶり人あさとどもりおそそうしろ
めくうを思づうひ給そて。まれみはおもしね
れらしさうと。心ぐらしここてまうり給。
とろのうらみもさうずうよゆうしさ法あ
まさ海るれぞ。世かしをくしうさて。げよ
さく人より色。くらすらいとさらしく海の
法うしろをあさいくうおしげるうわさま

すゑの世れまうけのきこえことと
何 備君 注ニ 往よつきこゑ
づきさ朱雀の御子へおほ末
の世のまうけのきさきとハ
近代の東宮の中に質く
まうけもと申すや
まして此御すと申さを
うせ 東宮をさす下の人
さいふのみかどつきとさま
して朱雀の此御すと
さうて源氏とられん
なりハよもとそうそうよ
ハ東宮の上ありしとく
此るすとハ女三の御すを
こあてののふるなし
しらぶりあれハ此御やけ
とまりあひるハ
おひ意文往よつき給
つぶ世ハ御心のゆうなる
べられども又れるすのかさ
つまあれハ女三などの御さ
めをこまやうえん 御う
あらこハまたがさりきべし
女の御ためよ給だくり 細
御心の依さよハあらうられ
よて源氏とりえんよそて
あさやうる御心よせ 師
さうつさまろうよ移りを
おも嘉宮のうろさハ夫婦
のあうしひすうてハるき
御ぞとらのえて

ほ役ころて 細
御うしろと定給く
ようべしとす

子しへのまゝしと 細 浮澱
天皇の皆子を忠仁公と給
しゝと 師 紫姫のまゝ
おニ注ス

なん侍きつゝ嘉宮あらくておりしまつ世ハかゝり
こゝすゑの世れまうけのきこえこと。わめ乃
きさのさ乃を取よおふさゝ申さしさすらど。侮
してこの御こと申さしとさを侮りへしと
ハ一ゝゝしてどうそうまうろめやおぐ
さふは侍るぬハさうゝよゆくさ之のこと
此がりるやもとさみる侍しねどけまこと
限あれバ此御やけとさわおひよのまうり。
どもれとろよろるすめべしとはりひるみがる。
女の御さわよおふりうのけざやうなう御ん
よせ。あるべきふも侍しまうりきべて女
細 御かけを嘉宮の御心のまゝなるべかれど。女の御ためなるとハ
くろゝすをなるべしと 師 あられハ女三よおくるの御うしろ定め給
あやけすハとうかてなどやうにハするこゝろく
とうぐさりのハするをさるべきさとらよ移りを
うそりえさしぬるしるよたぐそさこゆる。
御まりわめ侍うるんうしろやすてうるべきこ
とよ侍りど。あう役ありそのちれよの御こと
びひのゝべくハよううれよ此りしえくひ
て。無びてさるべきさ御おうりど。さるごめいとら 孟 朱雀の御子世 女三の之
の附不若定重を由源の細と 細 源の御名るを
をのべきよるん侍りと。蓋しなべきうよ そう 此若もやうあるる ハあるがさこととく
せいすりこと侍れど。それもくらさこえに
なん思ひるうバわさへのこゝめしさこうて侍るに
を。ぜをとうまうりのことよう。人をと

人とえらひさる御の
此五位の帝は女に所す
もうしろやもくさぶは人
と撰ミあり。朱雀は随
世の物子残玉なへ此ませ
一候人を撰まく書にさ
れと是は世を随ふ除
なれハことくしく人を撰
申も後の事也をつろさ御に
をさまで給て移くや
物語とし抄
みちり人さこうさみとあ
らね 詩 日月流邁(ス) 不我與(タ) 毛詩 日月逝矣 歳不我與 論語 日月
なことのゆかなるやし
内親王一人(ヒトリ) 哢 同云女宮
も親王宮下わりて号
もろや 一動 合点

ゑらひてさうさ御のくしとをしまつるく
ひめかうりたりますてうく今ハここの世と
なるうしきはまそこしとくえらくさへきるま
さおしまどもさまさうすつる中にも後るさ 細 西白説之
きこしおりて、さ御くるさひきろくひ給
ほどもやすからひとりゆくみにうらへまへき
ふとわしぬ月日のるゆけいかはかうし
くるんかうきりつさゆつりるれどこのいと 箋に源氏へゆつりあつけんとのこと
けるさ内親王ひとり、てうさて、さくさゑへ 言 是也
しそさうつきよみすかどと流んてよ頭りさる 是源へおやの御よゆつりあふ朱の詞也
めそおかげのくしよあしまほまさ代行中納

抄 此面はかうらうさまにまん
ぜられて 孟 先世為の
う 抄 夕顔の後任おほ
の筋まうけなさるれ
かまさらすそ 細 源の我
身ハ源さらにもるさも
下ることも
おりまんれかり
細 保るすを涉を世よう
わることとさいけ
されど我身の後来をと
さてかろうへきことを
め何とし 愚案 源の後
人やさ八朱雀の内王世
よかりて後さまし八女三
の事かれまし好と

くしそおりなれがかいまうしらさるよまん 細 源
世られて、わさく所かしつとしうて給中
納言の御ほまりやうたうりるえ。いとよく (の御とし 孟夕顔之 かくえん) 抄 官位といひかれと云
つろうまつりめいく行ひと。行うつもすぐゐ
さくてめぬとうりすくあくてそ侍しめかさ 抄 是也 (深う々ヘーーとし)
じけりすくともかうきんまそうしろさき (是源の御ソ月の詞し)
こうさせ給ふんよかうしきますれけるよう
よりていかがれしど。さくもしさいをこと
くてつうまつりさすくらや侍らんとこう
さかはしきうきの心るんころがかるしく
侍るへきとしけひるさ行紀つ。中よ入せれ 抄 朱雀の御むすめの女三のこと
はあうじの心かてをまうしうの心さまア

世んかく 細 流香のうけ盤
之師 流香ハ浅き流香し
ゆうかち 細 は出家の後
ころよ依ぐく経を身給
し花 経を食量置と
りなし出家の後の若く
宇多の帝は出家の後
四月三日 朝覲の行幸
のうち延喜帝仁和寺へ
行幸ありし時ハ法勢鼓
を撤せられて又手に三拝
しまう。又うとよりも法皇
からも同く此葉を借世し
るすあり法法師の門乃
前ぬ出を俗の礼まつえ
る事のとあんは抱給ふ
朱雀院は出家の後は
粧を抱そて此経をお
用ゐ給ふ寛平法皇の昔
を御らうくしより 細 源氏
業よりは御行をうけまゐらす
いとよろこび
さらとおもしろき萌御徒
細 葉上のんくし 権勢流
とも金比まかし能祇
こうちまてそうきてなはみるき
しぞのおもうはざきと思
給ふ 一上

東くりとよろこぶそま
さらぬ 孟 十三をもまへ
ていおもうく思をそひ
まうつらんよ一度の何らう
と其ひもんを思ゆしとし
こころめ給ハさるらん
細 桐壺とまんの折しは又立
めまふべきよいかう時す

（朱雀のはうでし）（お粧を抱そて盤とまうけ）
しきらをとられは〻萬ふかく川あまりめでたくとさ
（おもてきこうぬ抱とし）
ころとんゆへしうつ抱まそてうりしきて御めかしく
（朱雀のし）
をさせまつり。流のはゆへよもんかくのうけ
ぢらんよれはうらるじ。着よりりてまいら
と人ぐ御としのぐひ給。教ふうすらぬに
（細 葉上の也）（源氏還御して）
とぐもあれどうさけ世ハうくもぞ。秋かけて
（お 今の若き納言也 女二の）
くり給。孫ともとつきぐま給。別当大納言
（此後又ちうとく）
されとくりよまうり給。おもじの彼をみ
雪
のゆさよりそじは風くもくあまくさきさ
（御ものまさし）（十三の月を院の御）
つるやもしくめずされども。のみえ給に
まれしそぐ見つくとごうらやをくめが
（院のくて）
しめり。朱雀院ハ。おゆふるむりをしとう御く
（葉上の也）
めぐりしうらしきれの人へもかきりはそで
（十三と申すしと見え）
めさし〻して御のさく給ふれども。
をあもし。萌御流とともわんびよ中しる
やうもうしうとわざさしをめかりとげ
どすなしとるじらて〻らくてやむ
（細 葉上の事也）
おもをとひゆし給うてなまらうとる
（孟 源の御弟也 お 葵上の御弟を云）
くておかりすゑよいつしかしくばくともいる
（中将の御）
めずさんなるい家もうろうむぐくざると
をあかしんよいつけていゆきのひぐかさえそ
まうらめこさご給いざらん給いつまた
（細 近年とありては秋なれもなし）
ひうらひ給ひもんるじ。やもとらじど思いさ
御今のとし比とぬらくいまりて〻をまり

の御末がちよつけて八一
入なんよもくきこえと
えうしくはつてそおもうた
らんも　師　紫上　女三
の事かにまのちゝその
源氏きこえもつてて
やすみしとさいしめしるを
ごしその御こゝの源氏ぞ
もとくしばうはもとらし
源のおかして思中へ
しや

とくしきんかなひ
抄　源氏の本意よ出入源
おもしれるなるべしと

漏くゆかしうす、哀なる心中なれば
えさらぬところにつけてぞ、ゆかしうと思ふ（細　朱雀院より源氏を御後見也）
んといふをきゝて、その御心ちやすきて
わし源氏又の日ゆきちうり、女の宮
しきと拘義よ、ゑみしりさりきれの御拘（孟　源と紫上とし）
所ゆのしうてし源、御心のさのりしげすくなり（細　源の詞也）
源よしうれとかひよ気なうて、義なるて
大のたつられ、女三の宮の御こと、いと
据ざげよおかりてきりくなんの源りを（まそ）
つうしつべうらぐりしくて、えうらへいか（又　辞退なりしとなし）
ひぞぬかしをとくらくぞへいふるさん（御念し）

いさゝかわうとも此ゝあ
ある世よ　抄　源の一生の
万紫上よんのららまかわ
らどとし　師　紫のくあるよ
源の在世よはいつうまわ
をゆりぞきこと
の内におそらぐゑし
うゝめ　細　女三宮之　抄　紫
上よんりけては女三を
次かくべきれば、くのゝこと

[illegible]
まじくいひすゝられば、いへでてよし（抄　大中弁して侍られ）
きゞませ給しかば、よくのがれきこえし（河のゝし）
しどけめんのつゞくまゝに、なかなかうきさ事なか
なしともきのゆかひつけし山にえ
もしくをそくえさひよそでなんかうまき（孟　辞退なりとなし）
れ山ごもりよう給ひ給ひん程よはてそえ（朱雀の御隠遁の時之）
まさしくすくめわがさるすくやそらざる（女三之）（細　紫上何ごと源へたりし）（河あり）
べきうとさむしわりとを此ゞめわり
よりそくして、いうつよわらわかじうとも
とろかとまひそよ、あれはあくてそ（細　女三宮之）
んぐりしくあ、それをこくまうう浜
りそすてん、非もくのぞらうそゑし

もろもろこれをうけひとし
とぞ　細紫上ハ是が
ごまでうきことなど　たゞ
嫉妬のこと八係ら八全
めさまうしくうくてハヘど
細紫上の心まくことそぞ
ともに人がたるとおぼぞ
八心まくにくくおもひ
く師女三宮なうらのど
があぶなるすくいしの道
りの母女御　細紫上の始
しされど他人よてえ
なるうとし　孟若菜の女
湯てうみかの比妹紫上
の法おハし
ましくいはでよおぼし
おされども心えよきかり

ゆくがるごろうて給ひうるをこれをそうひ
ごしとぞ　おのが御心あさき物よ見えてこ
やとりしぬはんが御すれどいでかくし
と物わすまいとつれなくて哀なるの法ゆ
づりよこそハあすれごとみはいろかるど
重なりべきよりめざましくうていなど
やがめしなまじくいらやなくてよ給ふ
んとのてこ女法の御ことご御心くもう
とりしん物かしろをまへでんやとんいで給
と。おもらうう打とけおふれゆるしえへこ
るんぞとしつめくうそあれまさく
[illegible]

人のくらしつか内　細人中
えとるをとそう河海孟
みとりたし　河人中を人
ぞさくるうゆかまゝを
人の中じしこうてうる
うこ
むひとりよえりあて
細すく紫色と先く
らもえここし
ありさ毎よもこうよ見かるる
そこの寛平こうるよ
さつくぶかそ根ひそさ
るうるうが根をうらずよ
をくこし
まうざうまさハぞそ
お物のやうとも見人言ど
よ根をよみ給ハうつしど
と哀きよ細く
細ことよんぐりすひ
細孫かるしもづきとふ

て。ありうりよそるゝし給ひていふよ
いよ哀よるん。ひがこしおくなるとらん。人の
とゝ思ふれすふるもくてらの人ふくらえ
ふりのみんぎういひ出るこしもらすくぢの
しゝ人のうろうひあすぢら物てゆるゝ
やうすかりしいてくらう物まあろとくひ
と月よえ月あくおりさ御よえてざふな
ん。まざるよさしござてあいるさき物
根し給ふといとうくかしへある給心のう
まさみとり。寛しもりてくてよこうかやう
あるとふくのうれ給てゝなうさゝ
みと思てなまうし。我心よてくうりゆうひい

てもうしとく師宗よ侍りすい宗のいさめよ上もうひまかくさき我とるれとのんかり

おられる我ゝすみるあらしぞとし

とのがどちの心より

細 源の御身よりおこり

給すくそへきこえ(?)られ

ざ我身の御本(?)ひとつは

まそとかみしじくふく

つしこ給し紫上を

紫の性乃奇特之

式部卿宮の北の方

細 紫上の継母按察の

姫君の御母也

あぢきなき大将の北方よりそうこく

盛(?)ひけ黒の大将とおよい

ひしうし紫のおかう

のすとかりうれるか

し継母のかひし

らまいらそへてといひ

紫上の継母の心よ髭黒

の北方のしかねよ女之

のゆゑ本(?)しろしといへ

とおもへて

いかゞかりのくまは

さむることにしたがひ給ふべき、とのがどちの

心よりおこれるけさうにもあらず

き方なき物からをこがましく思ひむすぼゝれ

ゆゝしき御世の人よりもりきこえじ。式部卿

宮の北の方、つねにうけはしげなる事ども 河 呪詛の心也

をのたまひ出つゝ、あぢきなき大将の御事

にてさへ、あやしくうらみねたみ給ふなるを、かやう

にきゝて、いかにいちじるくおもひあはせ 紫の上のおもひ給へる心也

給はんなど、おいらかなる人の御心といへ

ど、いかでかはかばかりのくまはなからん。

今はさりともとのみ

細 紫上の今は盛者必衰の理あらはれ侍り

紫上のおもひ給ふよひとのあなかしことよう

うらなくてすぐしける世の人わらへならん

ことを、したには思ひつゞけ給へど、いとおい

らかにのみもてなし給へり。年もかへりぬ。 細 源四十歳之春

朱雀院には、姫宮六条院にうつろひ給はん 孟 三ヶ月之

御いそぎをし給ふ。聞えつる人々、いと 細 蛍兵部卿宮柏木衛門督なと也

くちをしくおぼしなげく。内にも御心ありて 孟 冷泉を内といふ

てきこえ給ひけるほどに、かゝる御さだめを

きこしめして、おぼしとまりにけり。さるは、こ

とし 細 源四十歳 ぞ四十になり給ひければ、御賀のこと 源の御賀の事

おほやけにもきこしめしすぐさず、世中の

正月元三日　粟　正月の三日子日
多く用子日元三日子日
ともろ活賀のるゆありき
延長二年正月廿五日
甲子天子四十御賀又上皇
於御前献之於紫宸殿有其
儀采女調和若菜羹
供進之又これ例なれば
みしかども正月の子日
四十の賀に若菜を調和し
ことしてうつくしげなり　細おなじ
左大将殿の北方
らく賀の時若菜を用
るこの事のはじめと見えたり
ぐさめまゐらせ給ふとぞ
あつじ紙衣手に…
つゝての賀の例に
るひてかしきもよし
孟子繁暮の仙洞もせて儀
よ賀のくりかひ人ハ
源の勧盃を及びぬ中く
みひしれど　細　前時おな
いとうるをみうくかねてよりひぐくとこしのある　大臣ハ
の姫ひめれけく
らひやりくいろあしきとくしハ昔よりこのこ
給ふぬれんとしてしれんとかいや給ふ正月廿三
ち
日よの日なりよ左大将殿の北方なり
てう給ふて…
しく思ひ…
ろまて…
これどさ…
まふ儀式…
ども西ろ…
ぐへ…
河海抄　式ニ曰

首の中かくに　細　六条院の女房の　花　六条院の…殿の御わ縁
おほきなりぬ
ぞしろ　和　白き衣を
けるとハ　細　思ひ給ふよ略かる
よはらでんのしそらしとあり
ちぢき　細　唐毯は綿を
さくらりの花地織ハ
唐毯は大文の高麗縁
をつけたる物也或説類
の地舗なり　師説ハ毯の
きらひなりべしといへり
の物れ下にしきて上に用
西宮記云　延喜十六年御賀　当御
座南鋪地敷二枚其
上舗四幅帛備端縁
畝　細　茵　同御記ニ
ぶとく　細　茵
御幸亭子院西向東座
当同座南立間皆用
茵　河　脇息　同御記
けうそく
立蒔絵大床子三脚其
上立沈香脇息一脚

らでんの御づし二よろひ　河　延喜六年済変記云母屋前立二尺座蒔絵御厨子四基二基納御法服二基納御法具同十六年御記云立三尺蒔絵御厨子各納法服冬夏各五具

細　夏冬の御さうぞく四季にそなへ　花　浄器有臺并蓋

ゆすらづくえ　嘆　びんさくいの数し　花白

かうげのをとこ　細　かうげの器みてりの器などの数し　河海　延長二年正月廿五御斎会記云南廂自東第四間立棒以机一脚有銀山銀水金銀花樹云々

ゑくし　細　作り花を髪にさして花とうつくしきを表示し

みすーとうさともつゝろひるしょう　細　つゝひをしこのかたとしてもつひるしょう

こゝろまことにしう

ぬかづく　所　面にいつはり

しきこゝろを法とくひ

あられに内くの細かなる

こゝやびとつくしきかく

おほしよりてのことて

細　手に法ほふかんとて

え内にて法みるに對

面ありし

ひりかくん　細　法の法に

のらくしくうかり

りくゐんの宮拙のかゝやひかりいうどめくさ

まるく…めきれぬ海にあそのしまへ

てらかたのことよぞれこゝろまことにくしう

らあ録かりくんぐまるすらむかとろしきそ　おほし

よりぐ経とてりんの宮に法斜面ありける

のしろう法しはい　八地利し出ることも海く

なりまんりいはまらくそこりつうそしのく

すまの巻も　細　すまの巻の…

ゆかしき海のあら磯見えりしも人のけやけすく

おほしゆへにもめづらしくあはれつくそ

まことあはれなるいとゞ御心しられど猶けさ

やうすかへさまにかすそ法推須磨しらう

絵おさあすさ宮も心とゞ河らしくてこの

しゐりんの宮にしらつでまさてもはらんせ

られしとの給ひつるとなりのうつゐでに

どまにぞんどさせんとて心うつりあはれや

つまぶかりもけふとのあすよごとろあすきこる

しすべきをふかくおかつもすぐるさまにいひも

さ河りくのむかし法ふくるにはりひとかめる

世にざりまてかけ青あけしのわりかく法きさ法揆

うつらおもくの
細 御孫盛之盃ゆる老
ふうとい思ひあまり孫ども
ことつらふかし
中納言のいふしうと
細 雲井居勝之盃夕霧
の御子由利くわれともい
まさ源の君孫なとく

夕とられさるれ
由霧いられしられど老
とおもひしらせ夕へい花
くれつさとし

わか祭之後 細 清子盛行
つまそ来りて御年を
祝ふりとし 御 りのはる
い源氏の御子を催ふり

せめて時ならむ 細 盛あ

ても いろふしもあるると、うつらき思
すゑのまりかしはおんなは便をんしうる死ま
で、おもひきらしかりも給ひて中納言のい 夕霧之
源の老をし
つーゝとおうけさるもとうらくしく
折りひてでらくはまごうるを千まりしへゆりとに 細 幼君かなを貴一子
夕霧之
うちくらりののひけうかうふのまで、日ころ花が紙
うれさるれおぞしい花をもとられても給
でこなきとらへて孫ぐんのこえもいとうくね
ひまさりたおかくしさけさんそひてこうかひ
あつさ便しまつり
盃 夕霧
わり祭さをりくへの小松をとひきられて、まとの

そらぢなおりかしくく
りひなすしまつるし
ぢんのおしる四 御 何の
物を四づくあり。翠笑
の数く
小松京 細 来をさき人の
齢よひられく秋雨を
年を遠よ清とつべしと
し盃 源氏年をつびじ
さとい子秋万翠とつま
んとし 御 出目のくわるか
なきられど君がしある年
のかむともつりんとぞお
りふ

武かなま文之 細 様柱の祖父
ゑくおなづくの不と由不
しそるぬの志まつるをす
なか祝よ盛を添しまつる之
盃 業之の父ゑくおなづく
のとりからちまされども
いあるやくうへおくんも
御 かくよい根ありの花あ
しきさるりとせつがべきこ
とくみさくらんあるい論

孫ぢんのたてしきふか心して、流もとられさ便へ 細 幽せかに
物差の君をかりく 源氏之
くり来れりけふくらりけるりまそて
盃 源氏
小松もしくも思のまくひよひられてやの
べみるわれもとしとつまべき。年くさてもく
しまへて上盛ゆあまたさるつのひさしよ
つさ孫武やんで家いまつりよらて若うられど、
源氏よりよおびよまつるし
れをうつそこあかりかのようくしうと流出まする
らひしてらうろおうなやうちあんとひれすうて。
盃 ひけ思の折節と武文々のへく
日くしけそぞひうりまつる。さぬの志へてりがお
彼は源氏おどのさよ不之がかみらみて
まそでうかれはりしをひようけどうりて施し
孫もけげよんやましけるわざさるあれども
細 大ぬの様子盛武文々の孫盛之師 様柱の志の兄弟なれども
流もしまこの志盛いいづくさまつけてもあり

ふくあるくこの　細　獻物菓物無義
なり
もそえてごさりひびち物にも
る中納言とさへじめてまゐり
て　先外記云延長二年正
月元日御賀中殿敷
饗親王以下同着簀子
執持物懸北様　第以漸之
養之物盛小　類或是積
銀盃梅柳枝　次侍従以下執
所横挑懸北様　菓子也前く
入自日花門列立庭中一
一列親王以下並座各奏物
已上一列不依位
次着一下畧
まるやのれあつものまゐる
河　延長御記曰是女調和
若菜羹供進又以供進餘
羹給侍臣盛中境置中
盤一枚
ぐくんいめてまで　河　延長
十二年　尚侍賀御記云令
侍臣令奏絃哥自弾和琴
中務卿敦実親王弾琵琶克明朝
琴之例也

引うしまゐる　御前の
まうしそ我往の引絃
からへわくをいみ和琴をひきて
我往の引ぐ和まひし琴
されば三人勝敗しき
ふゆ人御本まて不見云
して墨菓御前六則我
往ひきまつしるるべ
引ちをまゐるや事
あくるまつらしてあと
おりてがまきごやれるを
ろうしのつくたともへ
お和琴の和唐らの傳へ
ろ樂器八譜も体を
以後守らえまつまえを
きまへし

雑役　河四十段
さらでぞうしやう志あるごものもそえてまゐる。
あけびでうちふらじ中納言とさへじめてまゐりて　河四十　夕霧之
まうぐさ根ものづけるてうつれまうけまさで　お盃のうちとし
つまにおをわれのれあり起まうりれはへゆけをんの　お源の少将之
うけぞんまうあかんつさじをしまつしく。いよ　細御器師まうかての数々
ゑんきそうり用じよきとられまう。朱雀院の御く　盃流抄
まうのこしう後気つくこそそ給をあ上よ
つまぐんみどいめずられ寄まどじゆひとお　細若菜の御前之
とじのそれさいとくの人まで世中まこの御　我往のまへく
紫まうゑめづらしくぞかくをつらるべきこ
とおくしとのあひてもくれさりねの根ゆく
れめそびあわうごくまむすうを。和琴
く。ふの始じの第一まなり給ふれてと内　おかさかくの秘蔵の和琴
まうまのくじまのくをしくて引なる
しまつるねいとしてうしびるさとしへるつ　お往
をまうでしまへいた濤の舞のくつてかる
るとそかあろえいげまいで御あらく　河　周辞
どうおずしひといつ御前をもよきのつ
いあすがらくしときいやぬわざとうしと　河　鼓詞
らろよらく衰まへじゆかをあくべきまる
うひておとあるまじさごさかれまうる
しのつくへ犬く。中くらるひまちへるを　是より和琴のてと
るそどうつまかまそてさぐらるあぐるう　和琴とまで

これはてよらくまよ

細 和琴を敷つきすゑたるハ……ありの[illegible]世又大臣[illegible]

とこゑはゆかしくとうち方のあるく一盃わくらう今大将[illegible]やらうなとし

宜陽殿 細 昔ハ楽器書籍

河 西宮抄云 納殿累代御物在宜陽殿二[illegible]例

御物ハ納殿人所[illegible]

花 細 朱雀院の同腹の姫

[illegible]

もぐさよしろ川のおくねとくのうれるハ人よゆりしろくおやしきこゆでひゞくらゝ梅木の和琴とのうとりえそ先ノ大臣のすとおし物きくへしものをこれいとゆうよりてうらうつうしてまことへひゞとこ 細 下の音よそひくしるくかりぞありこうあけをてぞうこえしいすこられたいと 柏木の和琴のすぐれたるハ……ひらくよのかりねのするつしくあいだくやつまうちをつしうらをへまとへくしうさしよしみこしらきをゆぶんつく絲琴へ[illegible]あひそ絲比[illegible]しく八宜陽殿ざれし抱ゆくぞくよ第一の名あり 細 琵琶を[illegible]の東つうさふ二あのとのと絲しゝ[illegible]絲[illegible]

ふえて[illegible]

[illegible]つまへ[illegible]

致太臣[illegible]

つる[illegible]とおもいまいり[illegible]

河 ……うすてえん

へ[illegible]人 細 螢兵部の

御[illegible]をとうぞひく

琴をゆうりまいて

まうぶのんてこうしれ 河 延喜[illegible]

めして 御記云 延長[illegible]年三月 御賀ノ試

楽中務卿親王太宰

帥親王在階下侍臣五

六人又唱哥

花 細 [illegible]

の[illegible]

んとすゝ[illegible]人の[illegible]絲つうまいるよえつくをかおきよいておもれよ昔[illegible]を[illegible]しく[illegible]る[illegible]もおひ[illegible]えとぢめ絲つぎ[illegible]えりかそ[illegible]そ[illegible]くよゆかりさて絲[illegible]の[illegible]まう[illegible]絲つぐめ[illegible]き[illegible]のと川づり 花 源氏の琴を弾せらる ひさ絲よとらくしてしれとと限すく[illegible]あうさ東の[illegible]るうちさうかのんでい[illegible]よ[illegible]してそられうる[illegible]のかどうり[illegible]て[illegible] 細 呂の律よたくらし [illegible]声よた[illegible]東のうくもまくよ[illegible]れさべとるゝしくうしてお柳わそび絲[illegible]げよねくらのうぐひをぞ

源氏より尚侍へ給ふ心
かれこれ一向の新年をおく
あまりなりてそのけや。覚一
のかよふとうさいきりや
祝の見つゝ　催馬楽律
小松原　細　源の歌也
末の齢にて　いた玉の注
哉年也　是ハ松をそるといふ
末の年たへく　一段と給
猶しきとまりし　哢　この御
松の代をしらむ私の祝義
也　むかし延ては　逸逸
こうくたとへ給ひそくれさ
かるわれしかて　きを
にハ是下しつ給ふ　孫
名と　逸逸にし一つ院　給
ふ
年月の御心と　孟　年月の
明けさもてぬ山のハ齢の
あたりやあまをあるらん
源氏の君へそゝ給ひをは
細　源の心と　なるなりせば
いつしよ院の松はしや　は

ろきぬべくいつくしくめでたくしくわざとう
ごとの御よたまはして。孫などいとこや
うさくまうけしれさりけり。暁よりん
のこゝろう給。細　おはらしの御らすこまよ源の御物語也　御所をくらりのるしわらかり。
細　源の詞　いくせともちやうしかくおかしくことを祝
あと年月のゆくゑもしらずおぼゆるをとかり
ける人をもまつりわかうつけてはべるところがらぞ
くるしき時々は老やまさりてねびまさりともし
しくふるめかしき身のありさまにて　ちまよりハ　おもきよ
ひて。思ひいでゝもいと心ぐるしくなんと
とやましまて表にもあしくといひいでゝ　哢

世にゝらのかなり
老やまぎらはしくなるかな
めかしく身のありさまにとよみきこえし
又きこえたまふ事もありぬべきなど
へ　哢　御所にありけるものにて源をも見きこえし御心をや

と世にもこゝろもて　細
の家にも中の御けしきみ源の
御心ばせども　哢　孟　源の
の進退の事をほめたてまつる

かくらうれしき世のつきな
るに　哢　寝殿也　御おぼえ
の花まつりごちせられ
同前なし

のたまふて。いときよらなる給ふを。いとめでたく　孟　源の帝之孟
この返歌なるべし　かうらうしくぞおぼされける人柄見えも見
こゝの親をばきこえざらぬいとよそひ出
　源の出らるゝ
えまでなるかくこのやうかりしけれどゝ
としの月よをへてかく世よりすぐしてぞ給ふ
つけてそもとぞりけるしにほひくるして給ひけり
細　朱雀院の帝ときこゆるなり　孟　朱雀院の姫宮
かくて二月の十余日に。朱雀院の姫宮六条院
おはしまし　女三宮也
へわたり給。此院にもみ心まうけ世のつねの
ねならず。わかなまゐりし西のはなちいでに
みちやう
御帳たてゝ。そなたの一二の対。渡殿かけて。

目まちう　細 入門の義也
すゑおなり 河 源氏流号
以後されど入門の儀は雅
ちくうて 新入上皇 宮司事也

古
車よせくらう 細 日下の
私は自車をさしおきて今
源氏陰号うくよりまく
ぐさいなくはじ私を窟きん
源の猛退の義し 河 后
下の私は素を遣す行ふ
うし車をとゞむるくらく
随中の義なん此義なう
へしくう私 後守云義
只人のりうりうゆへすむと
早下しにあら私
く人まかりられど
とすし
むくの義は 細 催る楽のふ
こ私宮守の由之細也

女房のつかひはへく、いとよしありてひと
ぐをまつり日はまつりの人のさわぎま
わびて、後おさはしりもれでゝしとゝなじく
どち。けうりのみさくしれいくざらへらね
とうりまし道守あはしあやしこまうり給はの
けりしのぞき給しに網衣もやをうらくそれ
もひなかくさらひのうへ車をしきさる所に
流まうりまて此のりも給つらひど給ひどしを例に
ぐらしくく車をよせまでをもりいひて
いうらひろくしむとぞなりうぐら人はうまれ
ぶらりのしとうりあかりて、うちまつに
七かぞ。むしこのえうこといとんふとこたゞ
ひくかうしきれ中のあはらひ人だしとりきん
三日が間ばいかの隠しらうもおかしの儀だこ
ましてうちめでしくさやびをつし
給ふあいのうへもゝてよふれてうじまされ
ださんぬ世のさま海なり。げよらるまうけ
てもとうまでくんよゆかしりけへらうてうを
わりかりしかれども。かうこうへのくるかし
まそいらやよゆかひくされどもおかなつり
わくさけりひそてらうひおつるよみ海く
しとうすくゆかさりれどもつきるすくのさいまそ
なしくおまくうりの後どもりかくよもする
ことくとまうくまて。いてうくうしけたる流
わけ海をかくじわりうゝしと出ひそくし

よむしきまくめゆり
お 紫上をよそびとにおもひ
しるを源のおもひ出ます
すべてくげなるをといもち
お 源の心よろこばれまる
ごとし 細 嫉妬などの注
すつることまじきよし
あざれるもみぎいひおくれ
湖 紫上也 抄 紫の折々思ふる

姫宮ハげにまだいとちいさくかたなりにお（お 女三の宮の御事）
はするうちにもいといはけなきけし
きしてひたみちにわかび給へりかの（孟 女三ノ宮にわかびたまへる 源の心也）
紫のゆかりたづねとり給へりしおりおぼ
し出るにかれはされていふかひありしを（紫上也）
これはいといはけなくのみみえ給へばよかめりにく（女三之）
げにおしたちたる事などはあるまじかめり（女三の一向幼きをおぼされて）
とおぼすものからいとあまりものゝはえなき
御さまかなと見奉り給ふ三日がほどは夜（孟 女三ハ源の心のうちを 細 紫上の心 孟 紫上と心一体なれ）
がれなくわたり給ふを年ごろさもならひ（あさきにおもふ）
給はぬ心ちにしのぶれどなほものあはれなり（抄 紫上の御事）
御ぞどもなどいよいよたきしめさせ給ふもの（紫上の御心をひたすらおもふくだし）

どもは紫上の身のをせさす
るく。源を心に入まゐらす
まゐらせ
まことよろづの事
細 源の心の中也紫上にて
さしあたりみることをおぼしめ
ぞ人もたゝき世くをもこ

中納言をば 細 夕霧ハ
雲井雁の所にハ又かく
るなともいひしと見えを
めしてあはての後と
をあらそひしと我ら
ろうかさ 取とく

あるまじきとて御後見よ
孟 源のこれより後絶之
之 抄 女のやうにのみなど
をみるやうに 女三へとだえ
ありてハ朱雀院の御方お
いかゞあらんと源のうら歎く

からうちながめてものし給ふけしきいみじ
くらうたげにおかし。などてよろづのこと（源の心也）
ありともまた人をばならべてみるべきぞ
あだあだしく心よはくなりおきにける（細 我心よわきゆゑと也 孟 源の後悔仰とぞ 小弱と申也）
わがおこたりにかゝる事も出くるぞかしわか
けれど中納言をばえおぼしかけずなりぬめり
しをと我ながらつらくおぼしつゞくるに（お 源の心也）
涙ぐまれてこよひばかりはことわりとゆる（細 源の詞紫上へ也 後白）
し給てんなこれより後のとだえあらんこ（抄 源の詞 あらためてとだえあるまじきと也）
そ身ながらも心づきなかるべけれ又さ（とかくあるべしと也）
りとてかの院にきこしめさんことよと思ひ
みだれ給へる御心のうち苦しげなり（細 紫上の心）

うはへのけんなるかうさり　細 是より後の
ところえおもしろくえあ
なかくもんかうきなり
さんへかれとおもふとう
弄より
こゝろも何をといつこま
給ふもしこより末ハおの
なりこさこそとくのまよを
いふにひるけまとより前
ますとらふ紙
めまちらく　細 是めあるき
とく　孟 紫詞のまゝ
源の心ハうらうらとくさ
のことを我面白し　河貫
之集之女のましらうを
せさりなる　秋萩の下葉
いつけてめまちらくそ
ある人の心をそへたる
命こそ　細 此二人の哥を
世のさためなき哥の類よ
しいふさとくし　孟 源の返哥
くらへかりつ命ハ絶とも

すこしほゝゑみて、みつからの御心なからたに、
えさため給ふましかなるを、まして、ことわり
も何も、いつこにとまるへきにかと、いふ
かひなけにとりなし給へは、はつかしうさへ
おほえ給ひて、つらつゑをつきてよりふし給
へれは、御硯を引よせて
めにちかくうつれはかはる世中をゆく末
とをく頼みけるかな。ふるき事なとかきまぜ
給ふを、とりて見給ひて、はかなきことなれと、けにと
ことはりにて
命こそたえとも絶めさためなきよのつね
ならぬ中のちきりを、とみにもえわたり給はぬ

すのねかはりつゝ絶なく
所以為肴　何れも心との
うしろ前へれろらか
とりひ中の哥とよるへき
本文を出すへし
年比さもやあらん
細 紫上の心也　推量歎
なりし
ありくて世のきゝそ
も　孟 今とめてとされぬ
る出来るよし　抄 世の
きゝくハおやのやくとを
のめすならぬハ朱雀の院
むねをめさるゝを
とふら後も　細 世のの
不定なるなりいふかるす
も出来ぬへきこと

を、いとかたはらいたきわさかなと、そゝのかし
きこえ給へは、なよゝかにをかしきほと
に、えならすにほひてわたり給ふを、見いたし
給ふも、いとたゝにはあらすかし。年比さも
やあらんとおもひしことゝもも、今はとのみもて
はなれ給ひつゝ、さらはかくにこそはと、うち
とけゆく末に、ありありて、かく世のきゝ
みゝもなのめならぬことのいてきぬるよ。おもひさ
たむへき世のありさまにもあらさりけれは、今
より後もうしろめたくそおほしなりぬる。さ
こそつれなくまきらはし給へと、さふらふ人
人も、おもはすなる世なりや、あまたこなた給し給

こさう　哭石をきく
娘之師いづれの女中よ
ふ嬉上よハ石をさ
つまく礼議あるらう
るんへるそ、し

ふやうなれどいづくさをうれこるすくこの内け
もひよやくさりそぐうろさ海みくるとし
さまんべこそくしニつくなぐくうろふもあれど（業上の女三よ）
しうちてくぞうけるうあさく海よけられて（お理運なるさまの人と師女三の後内のるし）
をえる、し絵りでおうこさうとそえうなさ（さうれなてにる絵りとと）
こをまつけてもやもうしぬことのあるうん
ゆりく、あまづうりしさこしう花めござるん
くみぐ、どのがあくしらうすしひろすけう（お作人との我をらいるまと）
しげうるを、寄をこおしぬやうしよ、りと（細業上之おく名まと海を作り絵之）
けそひおりしく拘着るとし絵つく、我ふ（細業上之）
ふうまでおりをうりんのこでをすもそいひ（細業上の須之）

くこられくれあまるとりのし
のんしうゆうれていつ
りのうしぶりしつるよ
女三方内あいてきるまえ

ゑ我らしいんのうせゆるや
お業上の我男九々主気ま
之女三の内年ゑのまさい
とわくおりしませぬも
孟女三ハ細くまりてわそ
びゑぐしさまさう之
ゆうしさうてとくらいぶ包
我と同し信、又我よらばと
とれるさず比りくんたし
こ状りあへしそさてみるる
るすも自我ハあうめ、女三の
内る人をを作よあるず業
雀の内ゆるりのん若しき
内るりまれどさし
うこけるくんうろしとく
お女三之業雀陸内山信あう

いちいうもからしてかりてしく
られありさるのし絵られど、内らんれうお（後のし）
りくいきまめくしくもどれさくうはふとお
らどもとめうれて、さうくしく出りしう
つるまこのくやぢうくもうらあるこそめ（お女三之）
やもうれ、すとわるハごろのうをぬしやあ
らんまれもゆうびきそしてあくるかうき
と、あいみくつでそおうこ海よ、人てやうう（孟嫉妬の心をおんとるてハうらみうんとし）
るすんとすしんひしきうれおとりわざ海が
じあんまうそしうでなしるんここしりとを（お耳まりく乳る之）
とあつうとらくちりわざさなれかうげまるくん
ぶうし絵内ことうすあれえいうてんとうれを
らしとうんおあるまどのきまんべえ、中堂中将（業の女房之かよくハ）

へさるれハ宮ちかき中に心苦
しき方もなふときて

こはさくゝろも
お花散里の人をもしぞ
ろひて千(?)薬の中将
さこそとし 盃廿二の後
ら世路そさずと云よ
つまちりひまりし

世中もいとつるあさ枕を
あぢそゝさのとい 御世乃盛衰
と記して行よきのさ
せんとながとらし
すまちのへしきしひのま
御劇ちりりうしん
のちりんあろとがりそし

源氏の君へかへりし
のまゝなどやうの人でめでたくすゞ世けくお
まり御すれは世にひやうりなくてどいかべし。若
いとゞおもひぬき御よつくひおくし給し人
どとおもひれど。さりとハいけ前よりつてひて。
られハいさゝせかくしうちありつしれりしつく
もうしつかにはやとしんりしつり云ひつる
世てきの人くハ中しうろわやとさとおとぞ
とりけつゝゞうひさして給もうつゞりく
ぐらろ人くして中くらそれば世中そい
とつねまさりのとおどそくさのさいおひる
やまんおもし世給をてわすりくまさしひろも。

おかりて。かゝ給めれど御かりのまゝ
げようさいつしまびしきしるまく
なそうでなすりぬさらとれど。
御別のありと世かりいつれハ。今さ
なれ給くも。うで世あで世のうらま
まりそうりや わかり前まそでのとい
ときわすらしくうばしうら
ぞゝしふそてそのやつされはまれ
らうたどなきりうだ、らうひかく
けりさし第しなりとゝて。風ちら吹く
けもひをまてりからくよそとね
ぬとちろくまふりぬんでおや

ぐすまさつしきびしき
師 業上の中将しまくは
人くのようつひけし
給よ書てぐわとハ云り
紙別まてのことハ
師 業上の中将のとハ
まつとそて源氏の中
らへのをりと云給しせ
中云ふ怡ふつうしそふん
のわる時に紙別とうとき
てんぞやつとき 業源
ゆかりなりとて
のさ衣女三へおりての業
のひとりわのうでなりぬ
と此源氏のまかそ云ひ
あとしまふんる[illegible]

これにてくらしがたし
師説此のうへにねられ
めでたくよまるゝせしと
しるへはかくいかゞしげる
事也
わするゝなくしよみなわか
ねども　孟　光のつくしといふ
まゝにて世ひろくねども
かなしきかなや源の君は
わくまへいくとどめらるゝ
ところあり
こゝのひやうにてまほれなど
御源のふる心秋のかなさ
その人の事をしる
ところおもひさくんのり
まうる声面白くうき
あそびをとつべし
やすくあやうしと　細　ま
うらめしくのるし　河　其の

くんどうちずしさ給へるもあはれにとく
あはれなり。秋かなしき鳥の声がたちて
なを御衣るらかずしつくしきはあわく
ねと。みやうよ思ひそうれしけりやうの　細　源の君の心
まよそしばしなくさめぐりあはむ月の
とのさへぐし給よ。鳥の。のちはれて
秋のくちも忘るべきよ。いそぎさはふ。
いとまとなくけるさまにかゝるあはれなめるこ
らぞくさめのひとり。つまねなくぞしおけて
よ。ことありとうらむかれのこゑよ。雲の空そて
おはつゝかし名おもへしもれなれいたかのひ

かづらがんそうの空の上にかたくたかいらのつゝ
めぐらかすよかゝりがたし所　師　座の
志給よ宮の給ふち御前
のさ面く
白楽天の宮し
細　楽天は詩よ〜城陰宮
在陰宮とこ文殿とはいふ事也
より紫上の方へみよく
誦しまする御面白し
発示天か作と誦しき
へうく
こゝろすくかうしりつる
細　源の御心ざしかねとせ
しるへ　師　はくくし
わかそこるしいかゞせる
ゆへ方もひえしと紫上
まのの御心
とがこさこ面らんの
思案かく表ふかく女二上
て師まふハ紫上源の御
方への涙からちぬふて
こそあれぞかうハ秋
まつるとあはしやとこと
ハり也る詞也　お前

よろづいとあはれにながめ給ふ
れぬ給ふよゆゑ御まへゆきてちの
びやうよくうちすまし給へるしら
くさ給も。ひとりうらいとうちつ
すゞしかんども紫の上ねむと　細　源とこそあはれかなし
とまりて。ひさゝめげこゝろすくな
りつゞ方をひえよかなしぞちるまか
こゝろのなかりすへねよこそあはれなる
つるとをかしやそ。おぞひのさやうかたし　紫上の御衣ろことに源のり
まふよ。そうしめされたれひとへの袖をひ
きてしてぐしとなくたわうしさゝの
うちちけてぐさあへぬ給ふかい

うちとけてハたあらぬ　細　女三
宮ハ猿俗言すこしされ
ど紫上ほどの御ことハなる
ことなり
さだめしかはしたへのうちとけ
師　紫上の御さまを　おえ
世にしかれめづらしく
このミ日ハかうし　孟　紫の方
まで源の遠目ましきまで

さやうにてこそ　細　文まいる
ごとく御かへりもおしめ
のうへの無興しくるおぼゆ
なり

ど。いとはづかしげにをかし。限なき人と
きこゆれど、かたかめる世をとおぼしよそへら
る。よろづいにしへのことをおぼし出つゝ、と
けがたき御けしきを恨みきこえ給ひて、その日
はくらし給ひつれば、えわたり給はで、寝殿には
御せうそこきこえ給ふ。けさの雪に心ち
あやまりて、いとなやましく侍れば、心
やすきかたにためらひ侍るとあり。御めのと
さきこえさせ侍りぬとばかり、ことばにて
きこえたり。ことなることなの御かへりやと
おぼす。院にきこしめさんこともいとおし。こ
のころばかりつくろはんとおぼせど、えさも

まばゆきひしくぞかし
源のうゐて、かう紫上がて
かうしくいひつゝ米薩の御さ
めかうしくわりとくし

こゝまでうかうしげもなき
細　人めかしき梅にて給ふ
うち紫しの方より孟女三
へ文をまいらせたり
しらくねども梅し
さうしてのやうにて
ひまてよおもりの人れたん
とのんで
なる花と　花の清てそらに
ところわえ雪の物ぶふの
人かうかりが　上句ハ猿人
ぞそしろ中なうねども
けさのあは雪よつけて
とふ乳なりし。花なるに出
せうよくまおそてこそ
べしとひの切なをいふなやし

あらぬを、さはおもひしことぞかし。あなくるし
しとみづからおもひつゞけ給ふ。女君も思ひ
やりなき御心かなとくるしがり給ふ。けさは
例のやうにおほとのごもりおきさせ給ひて
宮の御方に御文奉れ給ふ。ことにはづかし
げもなき御さまなれど、御筆などひきつくろ
ひて、しろきかみに
中みちをへだつる程はなけれども心みだる
るけさのあは雪。梅につけ給へり。人めして
にしのわたどのよりたてまつらせよとのたまふ。
やがてみいだして、はしちかくおはします。
しろき御ぞどもをき給ひて、花をまさぐり

細さかくべきほどの雲にはあらねどもおもり 弄 女三宮の御心をもおぼして
やさえ見知りて 細何となく艶にはものび給へるあり 伝 おりておもて女三宮へ
女三宮の御かたに 諸の心ありて又渡るべき事をも給へてし
ぐ玉の紙くろうミのうちとあり。紙詩には待伴とあり

しのふて
さこりふ花を鶯のなく
りくしのみく 孟 源の室
て女房たちにもし花を
ろは鶯のなく。鶯も音
こそうへ梅の花おりとや
袖をもうけく 細 折つれは袖
にほふて 細 やが
てえむしてところ此侍て
御返をよるやうて又給べき
のにあれど給つるまゝに
へのふく
桜よう ſして 花 紫上を
桜よう しへろうらうらげ

中川のわたりのまには御あつかひにおもちり
その室を添へ給へり。鶯のりやうよちうき
紅梅のさき急ぎよふちるさきど。袖こそよ
かくし花をひきくして。ことをなげて
まがあまへるさ御。姿かをかる人の方やよ
て。とりさらてゐるところえ給つむ。りう
うら御めりしこと御さ御かうれ。くのそでて
給ふうらうらもれへりのあて。女房もは花と
こととひり給。花といりそうくてはいきう

細 花鏡一巻いて此がれど
只花の上けりりと許し
くいみうちて面白が変
まぐつりりまでも紫上
の様躰をとうべくこそ
うふよ花の上るほどを
いひふうりりてきうし
られもあまくに 細 只義え
を亀や角やさてまうぎ
らうりまつくし世ゝ紫
上をおぐきわんとそさ
まのくりうをの給うり
花鳥の義無益く
ひよつゞれて 孟 女三の御返
るまと紫のまりまち給
へるそまひかゞん源の
ひよつゞれさり
源の御てわりさを 細 女三
宮の御秘の幼稚なると
紫上は桜りのふく
られ給てうしの定めぞ
御色へ源の君がれを恨て
る。あるほど。其のとれならぬ

うゝく芳ふすくやあらまほしるゞしの給ふ。弄 源氏の御れと
あまりくように(と)ひろくぬれど。めしもまちらかやわか
ん。花の盛によすゝくてえゞやうるほどの給よ。御
うつあり。紅のくもてやうらよ。おかやうよ。さ
つまれさらさぶ。しびつゞれて御きのひとりち
くれさらしこをとあらそであるやへづらとへ
うけれとわらく。芝さくるまへんいへ人の御きと
をうつうとさめくべかれバうさそれ。ひそが給
つるをたりめはしえをこをてそそひのうつり
くられつてうしのそくらぞ御めくさ風
まぐひふ芸のありし雪。れそけよいとわく給さ

さかりの程に女三の宮の
此年の程など云紫上なと
也
こと人のうへにもあらず　弄女三
のかはりたるにこれは外に
こそおもほすらめ紫の上の
べきにもあらずと同

一つは六条院の御心のうちに
御三宮中に大殿は御方々
あまたまかでこし女御入内の
後も又日をへて寝殿
にて准拠なり女三宮も内に
まゐりたまふ御方々の御さま
わびしかり
そへて御ゆかしさなどの
こそ　細 紫上などの
御方々は此宮はいまいま
まゐりたまふとも　弄源氏
の御心ひとつにそ
もらはれたなり
まゐるまじきなり
めでたき御さま

いとかたじけなくもあはれに
てはべりつるを　孟女三の
をめしてかくはのたまはせ
となり
いまさらにいかでか
女三の宮の
のたまはせ
ゆかしうて
河海面白き人と　細 大臣なり

すげなうもてはなれたまはぬめり人はいとうく　細紫上の事也
はおぼゆらむかしと思へどまたまたかうやう
なるすぢの事をもおもひよらぬぞ人のうへな　哢 源の心也
らばさしてもあらむなどいと思ひしみたまへれど
いとかしこくてもてなしたまふを思ふにも　源の心
のこころよく物のいはでは中宮よりも御ありさま　女三
など
いまさらに女房なども
とかくおもひあ
のさまなどの
とかくして

女三の宮
ていとどしくのみ
くもりなき
物おもひすがた
こともあまり
しなさけなき御心
ら
さのみ
もし世人のおもひ
ゆくへ
てうく

細
孟 女三の宮の
所
玨 男
孟 源の心

は花ちるはこくへゆかう
気よりはへおくもてさびれ
さかりとれひきそてうぢ
いかやうこと 男注
心とゞめ給へるみことゝ云
しを 抄 女三は朱雀乃
別にして 花 竜女とす
しづかにやすらふは不審
ありしは源の心く 師説を
しても此ひ出給へと也
くみゆべしと帚木巻
まいひしによせたり
昔の心ならばなし源の
ありし時の心乃まゝならは
はいとひとも給ふべくし
おもとも源のうつり
世のありさまを見給ふ見
ちかはよくいひされそ
れきゝはるゝ物ときこえ
ちりうを未へひのべこと
らくまでこそあかん
師 人の心はしらるゝに
きかたりには分ある
ころのくく
まのおもひは 細 今はさかりをわかれ
思兼 女三は皇女なれば源は六条の帝奉もそれ
まみえは内侍の不足なり
云はまんとし

月のうちに 細 二月中也
仁和寺にうつり給ひて
抄 御寺は仁和寺也 西山とは
うつりけり
姫宮の御事はさらなり
師 姫宮の御ことを
と頼まれてしかるべく
ともあるべし 御返の
御こと
わづらはしくいかにきく所やなど

いとはなやかにめでたくて人めなごりしもと
とやみをとぶらひかしけれど、めでたくかひ
こまかに給。さてもおぼしめして、よくととる（廿三の丁 源の御身ふるまひにかゝらん）
びきのかひなくいとなどをもたしほき
なつかしくいとけなくうちのみ心に出つく。（細 紫をいふ）
さしてもかくおもひつゝ給。昔の心ならましかば
かたくもせむと、今は世中をそむかれ
手海くまの心のなうちとめてとぞあるべきをうら
をさまはかるまことにへだてきこえさせまのあたりも
つもりつゝいよくそのかゝきえにあるかれたそその（廿三の丁）
ゆふひにとあかしまほしきわたりにかゝりし（細 紫上をいふ）
まゐりてはしばしびめかれどもしはらく
つるとしごろよりも、猶このかたのはかりきこえ給
ぞおぼえけるこそあはれにすぐしをとめて（お 紫上と源の御さかひ）
てなりとゆかりを一夜のおぼしみだれのまゝに
をしくおぼえつゝ、いとかしこまれるさ（仰 かたり）
しのびやかにおかしくゆかしきことおほかりし
さまでなき院のうらしは月のうちに御寺に（お 朱雀）
ようつりひめの二の院よ表つかはしてそこ（孟 源へ 朱雀より）
ども心ありし給。姫宮の御ことはさらなり、わづら（女三宮の事 消息の文也）
らくいとよきくやむごとなくおぼす
るすくてよくくもとしてはれんとすなけれ

細 ときにつけてのさまことなる人々まかて
まゐりし給ひあそひ
も角もあらすとて

ち出きこえさせ給ふ人
うつくしうおはしまして御ことに
女三の宮の御母そ紫の上の御
おはしければ　細 此世よりの
ことさらめし細けむ孟 朱雀院の
あはれなることゝもおほせられしを
しみのうきめを見給ふ
らん―――
哀なる御ありさまこそ
御原の朱雀院よりの文
にとりそへて紫上へ御返
事まゐらせ給ひし

りそなくまくそなひく紫のし給ひける。それ
と哀よろしかめてぬさうすくかくみすりを
さへうとく給ひて紫の上のみも、わたりきこ
えよわり給ひる人のいとなきさ給ふ
てかりかひ抱すうれしきつる心すかりしゆかし
てうしろをみたてまつるもやあらんと
朱雀院 ことむきすかしこの世よのこといとおもひ
ころのおもしろかりけれ。ひとそえうち山
ゆかしきこゝろし心とおもひかへしそ給
てなかなか衰へなりしとめいしくも給
まんとそれにつけひたすら女房してなりけ

細 衰へ給ふ所をまたもしいとしき
心のくるしさをれなど
らへきものゝ
細 世をめやすきさま
世にあらんこそ
細 世の中の御
細 さて世のこと世よりの
この世に御心をうつ
けるにそゝきしし
今は女三の宮紫上の
のおはするところの御あり
さまのうへに衰ふる
さまなり
御前の人のおはしますの
のみはかなき事の

あはれなるしかゝりけれとも
しく面白かるへきありのことゝもいつれもさ
うちとのへて
そむしく世のこゝろめくしさうらうまさ
かしをおきてけるうちなれてゐかへりけ
ぞあはれしあのさうしくよ何そゝのみかそ
てへ何をまたおのこのいしうめくさ
と御心うへしてゐるよこともかうしけるあ
なかうたふくなしてさて給へるんと
はとかうしうかりそうりゝ今はそ女院更
衣ともみなとひかそくまいれまかても衰へ
しとうへかりける。内給の人のさまは

抄 后宮の又乃御子なし
朱雀の御ことはさしおき
れいの事しかり
ひめ宮の御事をときこえて
ハ此ハ宮を　抄 女三の御
ことよりてハ此御説乃
ことのすと朱雀の御
事なし

うちきとハいふハ　抄 朱雀
のいまめきて思のまゝに御なく
思ふ 朱雀の御随世のさ
とひは朧のさまひのさま
まことさへかしこし
やうく仏の御こゝろ
朧月夜の尽ニハうりの
いひともくて仏との
御身さかりて
この世の事もきこえて
抄 宮かしこのかたし

うつのとやうにあり
世の中と 朧月のことを
源のおもひやりのふかく
あはれなるさまとおもひ
なり 孟 朧へ尚信ニ
つきる事へ思ひて源
の心にハものがたりの義
なきをも細ニあり
なし

かうしさのひ 抄 文の
面のこと、心仏にそ御お
くひそつ給ふ　細 昔の
源の心なとしきるに
昔の中納言の方
孟 朧の女房源のことさへ

おほきさいの宮ハおハしまして、二条の宮の (抄 朱雀の御母弘徽殿の大后也)
ぞすミ給ひ、ひめ宮の御ことをきこえてハ此
御しくとさへくうきうきよみたくしてきこえて
まかせ給ふ。あはれなるかなと思ひしらるれど、 (抄 朧のこと)
うちうちとひかはしてのやうに心あはれ多く
しくしかなりて。やうやく仏の御こゝろにいとしく
そむせのふかき事の御まで、ハ紀まゝすくもてのこ
まかして、やうかしうれあさりするれバ、さしこ (河 源之)
ろとわかれかく、いかならんかりにも猶おあ
らん今一度あひそて、そのこれしも、とくて (孟 朧ハ源のお世ニひさしくあわれまさ)
おもしくのこまかりつろとふくにる世の (源ハ朧まさしくおもひ)
せさと信いさんて
みえくしもくつかうきて女の御ことハいかし (細 けこ)

かけくあり (のこめかしきのみ)
しけゆるハ世のさはぎさまざまありけり
出くられバ、まかりのつくしなさひかた
とかくのこやうに心あるて、世の中を思ひ
ものかおり給へんとかりひの御の御様、いかく
ゆらしく仏待ちもれバ、あかなるしくさまさ
ハかりなる（。大方の御心ふかうひをまことつ
けそ義たう海よつゐにふかし給ひかなく
しかべされかなひかしくれハ御心をかりも時
明すりつけて時しかし給。昔からよ こころ
くうらうこくのひそてみくるれけるひ (思て)
とし給ハも、ふ故母ひさなくて、昔の中納言 (源の)
の為乃かりしみも、心あらさしくかりとつゐよ

人っそ〳〵て他くしにき
お見りう源の和
しえ
泉お目よ浮〳〵ひ草宿
し師直よ勝月まり
きりけ さうきつ わうき
きりめくくさえしうか〳〵
ていうしく見ひて志さん
盃やさよ勝月をとひ
かひけてあゝひ出んさ
むしまりつさされんを
師 源氏の流をし お二条
の世さ〳〵れ源人もましに
まうしせんよやうにわり
しいさうかみりりりう

の給ば人の世〳〵とるゝ。いづこのこれのかゝと（お中納言未の兄之）（和泉式部之）
ためしそそわくし〳〵いかんへよこり
てうしひ給ゝ人つてうして。物づしよきこ
えるしるべきさしうんあるさうめでくやし
きひしてりぞくきのびて年〳〵ん。世には
きうのあうきし所ぞくこ身の作にょ。炒が
ろけるしどもの及べきしるれば〳〵こみ（和泉式部云人）
み人よへりうし給つでしょ物よふよりさきまう（よいりふしさんのよし）
そうや〳〵らんとの給。人のえんぞや世中（勝月衆のん之）
とやひそらよつけても。昔ようつらされこく
わざらぶらひつかつらくしろのもてよ。（おゝ源乃）

けよ人へりりさうぬや〳〵
おほの和泉ま人よいりう
そむきしのゝひしるをとうけ
て〳〵ふとし
心のこ〳〵んしとて　細　引哥
かきみちそし人はいえて
あり及べしるの〳〵と〳〵〳〵
ぐうらんば哥君子よち
りのかゝとけづさ許哥く
論語ニ内ニ省テ不疚
いかしへようるゝうし
細　以德居の大名の主
みえれあり細しるすと
おほ哉よ出つとさ流
るゝとさしそとそそと勝
のなぞしらとうけて
八よ朱雀の流のおまえ
うりめてきれとしもとく
〳〵ぞんしよみても　孟今
〳〵めて違まうるゝな
しいびと源のらん
さゝれ謹名　源付名の
とも一謹名いゆんへく〳〵よ

（細川山ふりのまし）
昔がさりしせのあらしんげよ人へいりうさうね
やうき代々のしらんしとひときをいりう〳〵（細川新名あうまうし世の流名）
べくれとうら秘さ給ゝ。さをまうしにわう（源氏のまて）
あうきうしとのとさをも。いかし〳〵うみう（ろと和泉うやそて）
ゝし世よぶれんをし給をぬこしかしを
ありぶありしとげよそひさ給ぬゆれあ
うろめてさや〳〵はあれとおうざりし
こみもあしねべ今まとげたやうよきてよ（今さうくあうそて昔のくさ名やとえ之）
まうりて非ちりしわづ名つまゝすらしはり
人〳〵まべきやとめけしとこして。ば志のこ（孟覚らく）
のりと人の文の人へまして〳〵つて。給母さて（源の都し孟二条院の高倉し　ひとら　お　東積の丸と早く申にのあいなさ之）
八条の院よ他す〳〵常磐の支え見えて〳〵

こしう悔ことまうしあらあらや
そのさのりう　細和泉ゆるされだく
まされてもどうそ出へ
きんよかう物ゆれバを縁組まそ
お前を勝の御わさ人る
扱りして押て源のおり

作バあしもえくるわさり
と　お東屋の人て舟がい
なゆさ前さればるひそ
引てうひまそゐとこ
姫宮の仮このゆい
御出の様へ源へ
おうまま狭く

花　いつとうろまのごされ森のかどの出の御枝よ
の出へゆくたの
五輪のきをつくも山をど見る様と　師森かど
和泉お国を売あゆそしうかんとそう
人るれハ今冬あうまふしるうのみよもつひるびへきんと
くんを付べしそまのそく時名五出かうし
ひて、ひさしく如よろうと、拘さはがしうさせれ
出てよふてりねだいとおしくそうんびなか
ごさけぶやうよるくるんもびんすこ紙、や
のうよ迷ひてとらんとひ待ら人よよりく
らもあつうそうしと出のしかそいとびそくうう
わげくうし給と、御へなしともうねあさり
と、うやしくとそのそ、ゆひあくを給へしを
あれど、姫宮の仮ことの縁へ何ゆへもしいと

おひろ車のむこしゆぐて
お前恐びおううし給
ひし何くとゆひ物ちとい
もや　咲途の叔よしや
されうら車あぢとおりし
ますまいらい　師谷日

いうらまさてしろうまく
お源の見せりかう人みう
へとまへよわうまでこるす
しのかひつう物と和泉
ちなくゆくうずをと
ゆきうるひ　細御出つゆり
の佐前ひし　師この冬へ
まう給仙よつるひへ

つぶうくひやくらしうねやうしそわとし
と、その日へきんゆへも添り給ひぞ、源の
うまうし給さま物などよるも入てらう
し給、ひろうて、じつきしさんのかぶり
けあ人だらうおごろ車の前申ぐそや仮を
れさうしそいぐくまい、いづくのう分しそ
うそこ出てのまひがりかりつまさると
しうてめき出ゆれバ出ぐうさそ、おやえ
くいうやうよ出のころよりとびいうら面
へじおうしやりそ人しなんよ、いそび
んなり仲かんしそ、おれじうま出ひめぐ
しそいれあうかれとつしひみし出てしまそ。

されつよ袖をぞうらさは
師勝月秋の本性ぞれ
もうくねぶるととけるしわ
つもんくし 掛 あの細よ
古きよ落ちうし世よまた
人らつし抱どくありだ
みだりて只と押てまさ
ひませんは出来め去し
地 うろうざかれ 詞 うし
ゑその跡あるれば源も勝
もうだろうばかりよその
気をを知まえし
年月のつりうときるまされ絡く
気えしるなし 源は あわでは
来り 年月そらの中に
くるまれつ両慎ア殺出
みんなうしひてまんべぶそ思がら

むりよあもまの 細 表れ池
のむ藻よ経の中とより
の足のは あさ走すます
外鳴ど驚にぬくぐまの
なりう
平仲 細もしうあきう
あうどとろそり師平仲
がもうしうきのうのお手摘
の笹よみ哉
これとうくや 詞 の海と
うらしし陸うし 孟藤
みと川おりんとすうて
ろそり死 細 此藤よ若
年月を
海よしせうり激うとへ
激やきり
激のを 細 おつたらへ近
何よ源つまり 孟 勝の右
新激へつさせぶ逢ず 掛く
八従もてきうし ハくそ
やくさえなまうしハくそ
ようくさうしし

どうりるよ抱ぎしめてとさゝよ昔の
あうゆうじきんなでじハ詞しぞあらりよかる
としもうすくゆかしまくハびつくるびしく
ねぐうり出のくてじまんぐよう哉々ぐらうさはと
行せがかうりてとよせがかうけすし心れ
うじろうきるれバ義もとくすうしぞびん
しのさいゐりぎりうゞ行そのゝされひそし
よすんひまりてもさうじのちうえくさめ
れどいぞとけうやるすとつてらもきるうれ
年月のつりうともきぎされそくうくさへ
らくんすしひよりく出がめしきハつぞ
うつくしくそとら良ゆかしうゑ衣ゆくく哀

行烈りよあそぶとしのこゑぐうなじく衣
よゆめして。あめしとん笑もそくあさらこ之人の
まられき給よ。うきとうつりし世られと
ゆがりつでらうよ。庵いぢうりがゆる日なすしれ
じまゝくゝよ激りろうまさん。着よかうりて
ゆるまくしくいゆのこ給まのりくゝ。これを
くつてやとひきうごうしのあふ
年月と中に倫そ逢瀬乃まきしときさ
ぐくかつうあきぐさゞうヽ女
激のをさきしあぐくさき志つかてそりあ
心へもやく絶まさこゝるぞりけそるすれゆかし
まえどいふしへとゆがりしいづうもきれまより

てゞふて語よそれどひ
にうたへう
おち比もそくうかし
はいそびくされまひちや
うされどもくと係と
共にしくまさへえ
なづるくねとくし

世かりハさらいつゞきたることをあらはし世の
さくらこぞと。さひ出語よげる今一まひ
の対面しよりをしもぐらりなりと出かし
まろうをりしもりぞしやうるう前へおつき 常に同宿する故に物勝のへうかきさ教を許とらし
ざらし人のどうしはつさ命ぐるよ世中をとぞ
ひきうまらさしうこととらやしくかやけるさ
てのこよよふれつて数りすくゆかしある
めそいとそくきゝし語ふされど首ゐかれ
ふれ対面よさ世のぐしもとをかくる
ならしてえんづくことりそ今語つぞ
なほらうしくりうとなろうしくて一てき
なりしね世のつぐねしまさぞも哀しとらせひ

ときらしり
古今の三名の一つなり
をりふし夜のえんしまひし
盃扇をとられてうつき
そひさうとの叶のかりし
物見の裏を出さるか
この夜は 細 勝月来の
ちうろうけ 暁 勝月来

まぐれて。歎きさずらしそ物しあらる。哀しう 源のそこ
こそじめぐさんよらも其づくしく
てあけゆくをいとはおもしくて出語りん
元りおしおさおりけのくてすねてそ
よりくちうのくまもいとうらくふあへ
歎きされちりもさそてなあきとかの猶の 細殿之こと 二まき
わきみむらむらこぶち。昔ふぢらの宿し
語しけびのくとまちゐんうし宮ゝ出るま。
と月のつりりよまる行もとそのおもひかと 勝の中宮こ
うさつげわくれは世かりさう中納言の君
のぞなりどうろそ。書ふどやしわけさる 源のそこ
まゐるりをもこの有ではいくよ深きん 源の有

のちまでよき人のまうづべく

まうさしても　細 中納言
君のうし勝間乗え源の
人なくさりしてとみく
うらきりのなどとく
内ともづくみもかぎりあ
まく　孟　勝間乗へ宗
さまよいぬまうで尚侍
はしなかう職しそもる
さし　孟月

名あまた花えなしねなうたかみの宿ひまゐる
いみぞくこのげにいとかなしくべくこそごさり
なくいでそて口笑しやすくひとら出ざ
やうさし　世の山のをやまゐよさしゐ
ひめとしやくらうすかきるのこよなく
わひなくてもまうる花けるひるどとめづく
しく待へてもえ言の心やうそくのほの
あすくもは侍ゆれいざうきさそもなどう
とゞすかるし給いざうんはなやづくみを
うどうあすてこそくよさるる給くし
もありけりと、九ゝやのまへ何まくせに
ひきうしてハ世のゑしくきそみがらく

のぬ御世かくのそりゐぐらん
みこうかしうべきは給
ざうれ果なれぞれば
ほとあなそまらしきれ
と中納言かくあなりと給
まとらめてのうらさ
やうよハせまでとがなるの
らし

ちぞうしも　河　うらすあま
みもはきるへまれへし
し　細　若のみを
うえは長うれざれ見とく
源氏のかうら孟源氏勝
於すものもまづくとを
みうりざ盃よ盗なり

さ流名さんひざきそ、やくめしまろどとひ
せしらも給ひかくねひとめるへ御内侍の
ぢなへめほ、けよのうつつわうるをまいさゆぎ
のぬうと内召をなくるえまうをませ給ふく
うちらの人めとひとゆそそしくつまけ
まば、やくさしあぢうゆくよこうあはさ
うしくてらくのとよれ車まゐるを出すゐ
てぶのまれくらる花一段ゆゑをあくら
人ざるも出ひてらはつくうきぬ、人めし
まけりらしも悲ぬ物をとらりぼ、源の内を
なげつべきやどの前後、いとつくゆかけし
まづなひてもりゐるつる花、ながつらうゑ

しづ／＼と枕を閑に流
れんとひおもしろく
蕗の源へ 細 勝月夜の心
よ源をさゝよりおしとも
勇と云けん 細 源の勇を
ろけんと源ろとかろくし
吉寅勇とあすく〔へさ〕閑
おもいは源のろうとをとい
とふかどきよおおまだ玩
ことられぞ源をうけし
とし兜ろし 毘 師 閑
もまことのと花をとせ
ちらつきまとのんぎし
あさ拙田へよどのうをと
みくみるえしぞれいろ
ずすまのみへよもう中どとし
ごまくやられまおいふまひ
わろくしとこまうさとと
うく乱恐ひおりきの
まおたらんし
のしく云のひうきる
て勝、ら源のお悔りし

勝月夜之
なすら、女房も今更よいとつまりくゝ海
ぐよ云ひそぶれまつるよ、花のうげ八あさま 源とえこ
つくくて
勝 勇をあすけんかうそもまことの閑まそ
けしやうくよこうりすゝまのあし、いとけや
あうれみろまいひなど、こゝろあみしをいわきね 於 源の父よ報く云八まかくし
ことよおり兄ぶし、世さりのてとうね ひとりすまのおかしふるれにし
后をよやいとうくうしひそ恐きそ 細 緑
細 業之 緑之
そのうをも今よりとあすへむとめそ中ふ 於 源の勝八別そ心とめうひ人もし
見つらしれ心ずしあまくと何うみぐ宿に
しにあくらひまは、いぞ久衣をすくあるう
ん、於 源のおたさまする わいへおけれうきれの高

まとくしきえりなら
お 業のかけう女衍ろさ源
のんともしく云ふなし
あらしまわけよ
源 別とらんと云ふ家
うまひよわりしまち
おまよ拙そりすしき
抱らしにうつともうくさ
いかん 師 勝月夜のと
とよみ家の對面の椋
ようらかし縁し

と、綺うけて、女房さそりあしんとんえる 細 業上云う推参しうち 源の史
へれど此やめしくれてまいて扨子中
くしらめまさへあとしまてらん今らも心
らずしくあどうく志をとえるちまつくん
と女湯あれいかりしちけるよ云うきら
ざりとのえあずき世とうけて此の宿らん 勝
の恩乃涙ともまちりしきへきこうね 細 業上八緑うある
どいかへのとも云ゐまへれいはや ぬい 業のと
あくるのど抱らしまくろうかりつ對面子
ん御ちあこさすらいうでひとあるい あ
あゆうしくりそうくして 今一度もあ いつまで一下すひりく
くくひきて縁しらいくひて今あらし 細 業のとと

中〻さらなり　細 意未審

よわき方に中宮まで可
此をかけり 孟 紫の上
これをさそくけるへ
とかく〻

あふ　もえのてのかれ
なりぬるかり　抄 紫の上を
とくんと思ひてかくよ勝
のかすもありのゆゑにて乃
かゝりて
勝るゝ何とやら　抄 女三の宮
ねも おもたげなる生涯のよし

くさ此の人ぞ思ひあかぬさめかれ、前ぞ今より
あくらあつかひすまじく中〻そらしるかたの
しあらましかばとて、さすかに激くもあへる
まことのうらゝしくびよきあつかひもや
そうしぬれ今しきてそらしれぬれど、お
　細 源の御心　抄 紫の上の心
ひとつになきさつゝみかくしてよしへすまへ猫
　根とあふことはかなはぬ根にあへの心に
あかくもよそふとしきてぬを忘れず
まことそありはすかれくろすれとそしる
つまばかりより給様にかうよしそらえの
うし給へぞ此ぬあり、宮の御方もどきに
　孟 女三の宮も紫の上の御名を御心にて
えきかり給ふは、そらくへさせて、つかへ
えきらぬく

ねは何かしれかりつゝ　細 女三の宮
まつりゐにもかうやつつえ
実の母根心あふさるる
給ふくてうふるらむ
こんとも

桐壺の御方は　細 明石姫
君は十三の御年春宮に参り給ひ
ておはまて思ひしくは源氏の
君他人の幸の御方に心をひかう
ことなるにかなし

しうえどもぞ、やすらかにしもにくゝ
づからつゝみてよろしきさまにてこそ
さしまして、心づかひしつべきを
　姫宮は何ごとか思し給はむ
うちそへて、あつかひきこえさせ給
つり。きりつぼの御方はうちはへえまかで給
　孟 明石姫君と春宮の御事なり
はず。御いとまのありがたければ、心やすくならひ給
　入内より此方の事也
ひにけるわかき御心に、いとくるしくのみおぼ
　明石姫君也
したり。夏ごろなやましくし給ふを、とみにも
ゆるしきこえ給はねば、いとわりなしとおぼす
めづらしきさまの御心ちにぞありける
　細 御懐妊なり
まだいとあえかなる御ほどに、いとゆゝしくぞ
　明石姫君の御事
たれもたれもおぼすらむ。からうじてまかで
ぞ給へり。姫宮のおはします御殿のひんがし面に

姉君にならん。中の戸（細 女三宮）
に紫上かはりてよ対面
のみぞしたく

[illegible]（細 紫上の心）
給ふ所明石上いらうか
[illegible]
[illegible]

[illegible]
女三へ対面のこと（孟 紫上乃）

今のへいとまさるひ
てこそハ（細 源の詞也）今の
何ごとをかいふべきことを
[illegible]
[illegible]（孟）今の

ぐしまゐり。姫宮の[illegible]のひんがし（細 紫上の[illegible]）
[illegible]の御方。今（細 実母のつらさ[illegible]）（明石姫君の[illegible]）
[illegible]
[illegible]（孟 紫上[illegible]）
[illegible]（哢 紫上[illegible]）
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]（細 源也）（源の詞也）
[illegible]
らひにこそはあなれ。いとおさなげに物し
給ふめるを。うしろやすくをしへなし給へかし（孟 女三ハ[illegible]源の[illegible]）
ゆるしきこえ給ふ[illegible]（紫上の心）

づかしげにてまじらんとおぼせば。御ぐし
すましひきつくろひて[illegible]
[illegible]わたり給ひて。夕かたかの
わたりのそて夕かたかの対に侍る人のしげ（細 源 紫上へ[illegible]）（細 桐）
いさに対面せんとていでたつ。（孟 女三ハ源の[illegible]）（孟 紫上を）
ちかづききこえさせまほしげにものすめるを。
ゆるしてかたらひ給へ。心などはいとよき人（孟 女三を紹介して源の詞）（細 紫上の事を女三へ源の紹介也）
なり。まだわかわかしくて御あそびがたきに
もつきなからずなんときこえ給へば。はづかし（細 女三の答）
しうこそはあらめ。何ごとをかきこえんと（孟 源の女三ニ[illegible]）（御返事也）
おいらかにの給ふ。人のいらへはことにしたがひ
てこそはおぼし出め。へだてゝおもてなし[illegible]

荒いろ物くはまきらひて
こそいかれとも　細　源の御心
一人女三宮の御心をあまき
さ海を紫上の心知給
へきやうの事をかりしさと
なり
その御わりんを　細　紫上の思
ひやりての御ことをなさる心の
まへさをさいらくとえ
まこし
猶まらのこの　細　紫上を
我心と宮の姫と我身を
たはかりと思ひたまひし
とし　お源の思ひ給ふ心の中
に今までい我ちうとの
人やまうし物をとな
るへし
男の猶のらくろさき海を
細　あさゝくの嫡妻の義
なきをは傷しとと
そのかうふかしも他れ
わりしき　細　縁者甚吟悲
せうかいろのよりもかは
こうか我身よいとゆるめり
のちのゆくしましてかとせ
文女御の君　細　文女御の
いうへしき思うへ
を紫上の御とくひなく
見てまへいう身あさき
人をうんとく
あらへきこうおりけとう
お紫より紫のもとくれ
よろき宮をかくて源の
人としよ思ひまする

しのひそこにはまろよそへし思ふ御中ら　お紫対面の事
を頼みそへ給ふ
けしくてあまりしまへとゆかりてあまりうよ。御心みる
されはる御かたにもあくつかされんなるつりし
くおほさるゝけれと、この御わりんと心つくされ
人をおもはしく紫まてなりまさらへいよいよく　孟　紫上の対面の
明ならて
いつくしうおほとしてあたりのけしきもれうり
うちの人やいふ人々も男の猶ひりのゆるゝ
をさ海をさしとさまりそうかゝりてそれあ
らあるにも思ひつけられて、らちみなこのあめ給。　おもの君に
紫上の身をみて
身あるしにおもひすらわるゝのつてしかりこく
ともかくもかしこきすちのなくてりとさ　孟　紫上の心に
らいかけいはゝかしあやうからはしく
ゆるゆるはゆらうき海よりそくらうつともをそれかそ　師
つらいのちゆくしましてよ宮の御心とそきてらす
うしろやすく思ひてたまはりて流させて文女　おお女三宮
紫のかた也
柳の心中の
のはかなさの涼しさ海ともとを人々
うをはつきられと海くつきりある　紫上の所へ
流見えうりしまえ、笋にうめまれまうら人
紫上の事
の御心をゆけれんか、いとうく悦ひさるへきこ
みをあらしゆと、うら思ひまうくきこえしくよく
きまふあつりしうさきしりしつくへきね　源の心
紫上心
そさうそうきうしけるとのひうしよそへひ
てうちかやうはいまあらしく自ひる猶見へ
さまうさ海くのうれうもとりあへぬ見せて

さまさまに書つくし給へりしも　（孟）業をかきかへ
こまやかにしけくつれなき
あはれぬ海の舟（細）まとひて　め
あらまし（河）の業よりの物かたりそれは
おもふ（？）硯のあとまよひれなきを給
てひさかたの月のまにまに（源）の心
とたゆへよしてこゝろ（抄）くらし
けよりさめて
（お）業よりのあはれのさためなし
男もちろ（？）秋やうやうちかく（孟）（源）のそ
の山をもたちなほりそよ（？）を給ふとしめ
そ
源氏

男まへく　細　我身の人の
秋に変りし（？）の書塚
の山あはれてハあはれなる
愛の後様らもあり夜山
とありし（？）も言紙（？）
へし又なにハもあるよ
や（お）ま　紫山ハなに挟り

かゝるの　細　須磨の浦の秋の夜
はなれ（？）し夜山ハとかくの
ありつれし　いとまの青雨
くもりつゝ（？）いとゞよく
よ源の心ハ不変なりけれ
秋の下紫八紫上の心よ夜
なきの（孟）秋の下葉とハ
秋の心ハとく（？）ねをさそふ
の心よりおもひけるかなしく
ひとゝせまじき　細　心よは
らくまたハ衆生（？）の是世
（？）の習も人のつゝしみ人
とふべし
善光の海方ハ　細　明石の
姫君く花紋すぬ善光
の出御なれども
思ひてこそ　細　紫上の
心ばへありもおもひこそ
はなさへに

よしなし事とハまつれなきことのみおもひ
給へよみたれてかきつくし給ふ（細）紫上の清紙とかきし
みだれぐさのつゆのかゝりてをゆかしこともさしけ
ちまつるまでさくく夜よおもひつゝ（源）の（細）紫上も文
いつとなく（源）とおもひ海にかりぬべきれバ（細）御返事
あまりけさりすくむすまなくとのそわろまじ（源）の心
きこしく（抄）かけしくへすみもしるなり
ゆきひらの中方へのてくおもそれも（細）明石上へ
れかくとハむつかしき物よりのゝさてくま
まいとかくはげしき　あひまへくの（お）明石の姫君の子
とも（細）へのゝとまり給（抄）縁ぞれ
いとさのしくまてうてゝ中のとあけ

ミつハ乙世よ心のうちすれと
女三と他人とも思なる
に汝まうなれハ可笑
く可もよかりしと

ありしき　細　乳母の詞
ありしき汝うけとれ
母女三ハ朱雀院に

て。孟女三ハ紫の上をこそ　みも對面しまつらむと。おぼすげにの
みえまへハ心やすくて。ゆるしくまへかしまやめ
まし。うかる御よ。首のれもとらにとも。細紫上のうたがひこそ
細女三の御乳母也　中納言のうちにと。うちかくしかみじかき
のうらしと　女三宮の母女御ハ紫上のとかくるれて　と前よ口ゆれハとけるれども。ねさめ
まこそしこすれども。つらでなくてにけりうと。
今ありハうとくしきに。おはしますにも乳母まうのうも御も
お　後見ありハそろうちよりまいし　そなこまんにとハめすらうしなど
孟　中納言の詞　抱しう何つんるんとまつらんとさなどの給
へど。そのうしきれうけど。よさ伺ぐよき
くれかしまて。心ほそけよおつりますめ
お紫の上おかうとのたまふ　かたつりまいれども、まはいすつしき
うんちかまつれきかんで。細紫上の御をかくしかしめむ
のれうろむけも。さうくるんぬらへ。ざうく
はかし給ひでも。きさいゆうけるこれなる給ひても。
こんぐこそましをまゝうそ給ひわうしうらく
紫をれるひしも　みをきるんさのさ宮てきを給しおやくて　女三も内に
細紫上の詞　也。いてうでけるうらしはもうそこ乃
らいうでとのとおひはれども何ずすまつけ
をうどますらね身るんうちかしうちかうと。
やをらくまをとるひうらけそひまそし玄よ
をれくるつさまぐく。思なずものことも。ひるを
孟女三の御方ゑ紫をゑひきて　のとそくりうさゝ御。よろやうるまさくしのうへハ
まいとうくんよげるかへられと。あさきるさ

まくらハなき
お女三のかうけとハ紫を
うむと傍せうれと

いとうちしけりうらしれ
せうそこ　野　朱雀院
うちれせうことあり
しるとこひて

世中の人もわいかう
細らかいは嫉妬の心ん
尓わう世中の習し

れうちよハうらとけあへうざそのうちハづ以よ
ハでまうきひるごして、おしさあまらびのまざ
あぐるよつけてもむらしうしらて此めしうう給。
此書の中のこと
世中の人をおいるすくりぞくらうよ嫉妬あわる
つまかしいらひおうふハりのあれハざり鬼川
うええらひのこへぴうよ妬かすらん。浅妬がし
てこのうしびのやうふは妬えをうじもとく
ししハをとうるんあどうらひりうと今こそ
あるさへ源の法ふうしよさうし
しふうされふうしうくてしをゆうくうと前
すうとそれにつけてもまうさやをうくび
業のこと
よふへるあるよううふくけあくさへ

きねいつけてもみやそうれ
お女三のおりして業の光
えおいいそうしへと非常
そうしに源の總切縁まき
こと故よ少りしそ人の云
て此かうしの女三の法光
えとうりしられつく
しるすまりて、細世ろ尓
さあぐふのくうけりひしとひ
法ノ對面の後八事るる
つまくうとに孟人のるを
びひしるうとうりうとし
まうのる法ぶく 細源氏
ぅふ書と法かえのでまる
孟 松風之よつてくうり
ある仏 師法かえ尓八仏經
るあのるとそへしわう
法かえよ薬師仏をつくら
れし例。あき部王記よお
まうのう法あ不断經
まあうるよそくぶきさうらん
ぞうらんまるぞうゑうぎまや
く 孟 最勝王經 金剛
般若壽命經 これを
鎮護國家の三部經
といふ

ししうへハかしうすとうりてしめやかなくして
孟そうう源の法かえを業の光とこうひのうし
きけ、行出月よるのへ法の法かえり。
さう耕くれ堂ふく、薬師佛法あをし
孟源の行緒よ業の供養せうあくし
なり給いうわしきことハをとうよいろあり
すへハちのひやりよとあかし尓てさうに
挟盤貝
經をてうそのとうの人やうくしの極樂そや
ひやしうざいそうりるうきやうこんぐうえ
寛之孟廣大
んおんや、ぞうゑうぎうまうるとじいとゆざけさ
あうものし
法行るとや。王蓮アいとおかくちうのへう。
秋の法堂と
みぐうの三面向くいをんうさすく、紅葉
のうげもけものべ乃穂うらうぞらひまも
のうるよううへハさとひあ河ゆらりあまる
べし。君がれまされうみ此だ このまし いる

車のひきいれてとくあげてひきこしうちに
ぞ清げなる殿もしくはさいはひしくせ
させ給ふ廿三日をはじめの日にて、この院に
うつらせ給ふべくつゞひはてもするうつゝ殿
これもくらしの殿しまかりて二条院まして太
御まうけはおもしろくせ給へれくぞくさせ給ふ
大かたのしるぐりしられたるさまの御まへ
とよ御方ぐしもさうく しらえまうけつるのさを
つくりまうり給ふあひきしいんの房こうり
まゐるとよそひて殿よりく渡大臣ゞ御ぞう
をさへまそのまうけいかゞしくさせ給へ

御こしく 細 年満くひく
づきと正月廿二日二日此院をくて
三院の御方よりて
て細き日なるべし 自然
誕生とふんどうらう
試院て 細 三条院と御わ
八根殿にて御所にて御覧
御心ことさらて御極以下の
するべし 師 二条院
八人ゞげさうらふよ三条
院八御ことにて御あれ
太政く二ヶ院にて御
まうけはおもしろく御わ
院八池にありて御遊
極めとぶ二条院よく
せうらし 哭
ひとしと八 細 御ろ扇とも
えくひてさまり給ひし
ん殿のとふらいぞそと例
のさらしひて 是八永平七

のしらん殿のまもらいぞしと例のまもりてうへ
御賀八心殿放出ス三間ニ立テ三螺鈿侍子今案紫宸への御賀二条院にて
母陽成院八二条院く例ゞ成

らそんのし 哭 賀の時侍
ほどろうさしく人ふりら
でさしきまで上皇ゞの
かへりそてざりしく 螺鈿
ハあそびのおまし
紫のあやの斗ひ 師より
づの袖よあわひとすこ
し唐のもびらの袖を
あやつりせぬうし
元慶七年十二月十七
日陽成院諸親王源氏
殿大臣御賀西対
一間ニ立ツ御衣机八前ニ装泥
螺鈿御調度八合ヲ各
有黒漆綾霞ニ清涼記ニ
陰陽賀之年ハ延喜十六年
机五脚紺綾冬ニ御衣ニ
天暦四年三月廿六日於テ
常寧殿有中宮御賀
衣筥十二合一基ニ六交御
衣五具冬御衣五具
ミ〜のびのミそぎこの斗ひ

てらそんの侍よしそのまかきの西にま
よりぞのくる十二ときて衣箱の御そを
ひけるとに例のごとく紫のあや乃
斗ひたとうてらうしろしろてうら
のんいわしくかうくしておはしまさよ ときの
てゑかゝるりのらはんのすそのそのひか
ひしくろうきしの襲てらんのけそくこゞ
綾の表紐の衣よあかきらかくへなど御裳
舎のれあゝうしそ、おとしの御方のさまぞ
しまへるゆかんかうくしおはしそうの御
屏風四帖をしまかりしまるんとをせ給ける。

御かくりのとをすべてこゝにて（以下判読困難） 細 前にあるはさきのちらし。例の
ぢんのおしき
天皇四十御賀ニ御挿頭臺造沈香山以金為鶴含御挿頭花ヲ
うしろの屏風四帖 師 御座は中央にあれば屏風をうしろにさせし
なるべし
せんずいたん 細 せんずいは庭の池
をいふ。たんは一字淵とよむ
字也。ふちも同じ

つくしくつくして。例の四季の絵なれど。め
づらしきせんずいたんなど。めなれずおもしろし。
北のかべにそへて。おき物のみづしふたよろひ
たてゝ。御てうどどもれいのことなり。南の
ひさしに。かんだちめ。左右のおとゞ。式部卿の宮
をはじめ奉りて。つぎ〳〵はまして。まいり給はぬ
人なし。舞台のさうに。楽人のひらばりうちて。
にしひんがしに。とんじき八十ぐ。ろくのから
ひつ四十づゝつゞけてたてたり。ひつじの

まんざいらく 細 舞楽也
皇麞 舞楽也
るは見えしより
らくそん 河 落蹲 南宮
譜ニ曰 善舞此曲者伴
田麿呂右兵衛小曲
権中納言右衛門督
既夕霧柏木舞人よく
ひきそへらくそんのかう
あやを舞つるや
つらき位は中々とぞ見えて
細 つらきは源氏中納言拉任
大臣次第中将已上四人二
人ずつ及ハ源の

時ばかりに楽人まいる。まんざいらく。わうじやう
などまひて。日のくるゝほどに。こまのらんじやう
して。らくそんのまひ出たるほど。猶つねの
めなれぬまひのさまなれば。まひはつるほど
に。権中納言。衛門督おりて。いりあや
をほのかにまひて。紅葉のかげに入ぬるな
ごり。あかずけうありと人々おぼしたり。
いにしへの朱雀院の行幸に。青海波のいみじ
かりし夕べ。思ひ出給ふ人々は。権中納言衛門督の
又おとらずたちつゞき給ひにける。世々
のおぼえありさま。かたちようゐなども。をさ〳〵
おとらず。つかさくらゐはやゝすゝみてさへ
こそなど。よはひのほどをもかぞへて。なほさ

えいぐわとく
衰に淡つきしく 桐壷
帝のきさきの御ことなりし也
らうらうや歓楽極まりて哀
情多し
おほやんどころの別當とも
細業上を此の樂とす
へし昔家司みどりを補を
るりのあれつゝ源氏今流
号を承り給ひ称まさへ
すくまうづらをど源の盛退
のありて没むしてあら
莫し何今もいらへ流
中の事をよりまゐらせ
ねゆへかりのかとくされ
ちるの流号の後も代
井りでどころにおれ家業
上の家司に奉上八大かさ
源の宝家の栄え心所
とりそれてありわ
らん 深田家記し 師をるく
鶴の毛衣よ
あまし席田の詞よりう
けり 依るふせし乃田の
くりつかさ川よやをむ
露のく一所すひつのく
ちゝせとなつてぞあそびお
つかし二段盃 祝言とそと
きこ
むかしおりしとろりのねど
ともまそて おりとりうの
名地まそ源の年あかし
給をし桐壷帝の御世
にさちひ初めて

あへきまで昔にかはらずつゞきさらいへる流
うしなはれけるとめでたくもおはしける源
氏長よ流つよしく栄ゆしぬりてしだ地わ
らが衣よりつゞきてあや人どもまかりけりの御所の別
乃列歯ども人ぐひきみそゞくのりしひつま
まりてひで川づくりてつぎくしかり金さる
こさ地より代ちいかしくてぞ山はなかり池
おに条院の築山池の流し
のつゞきる流のかそめいるゐに年さら〔へ〕てあそ
けずるも
ふ露の毛衣よ出りひさかのて流れのまひらくま
毛ハ源の流ありけるも
アをく文井よしれしてりは美家とらそ
お禾業とも申し
とのへさを給ふるが朱雀院とりかうま
琴 吟
ぶかりかとぐれし給はりとやかりさてし
ゆくにあかぐらえ清きよしいかりの〔て〕ねぐとを
源氏
しそめづくしくひきわたせあるよい仰乃
ありかせるみ一方の法ありさ御かうわる
藤壷之皆上りそこれ給奨
りもみどながしいそくり入道の宮おつとま
しくかゞり法楽みぐ秘しそもこゝ一々う
盃 源のふき
まつゝましがふまよぶよまつけてゆへころ
ざしそもそしまりうんと〔あ〕りおくらうれ
冷泉院
しくのことひ出家し給らかも前斎宮の
細
なりしまさぬこしるをみかてもちくなう
六条御息所
さりぐもつくゆかるまよ此流の御しくそご
よ例の給ふさ御のりこまりをつらして
とえさをなりぬとなりとりよありぬん

例の給ふありる女の　おそ天
も文〔は〕朝覲とその給
幸あり源ハ悲びさらす
かれいきやくのそをる
ささし冷泉の御ふしくお

ことし御賀によことつ
けて行幸あらんと也
とぞ
世の中のわづらひならんとて
河 白氏文集 驪宮高 吾君
不遊有深意 一人出兮
不容易 六宮従兮百司
備 八十一車千万騎 朝有
宴飲暮有賜 中人之
産数百家 未足充君
一日費 孟 行幸は民の費なるゆへ
にしてとゞめ給ふ所
勝なり
ことしの御いのりは也
お南年中の御いのりを也
のこり 孟 秋好中宮より
源の御賀させ給ふ
すこの京の七大寺 花 延長
二年 天子四十算 布四千
段 十三寺に諷誦を修
せしむ 河 御記 延長四
年十二月十九日 此月奉為
太皇息災増算寿 於
東大 興福 元興 大安 薬
師 西大 法隆 御修経之事
其布施用絹六百疋布六
千端
ちかき都の四十寺 花 延長大
略のちかき寺の事也
よつの寺也
又京と北の 細 二教の
御さとの事也 今
源のれいの御はからひにて
まことの 孟 秋好の父母おや
しきよしの御賀をせんとて
とのゝにて源氏を賀する
こと
かうあながちに
とりもちのゝ事をさへ
細 御ふくもおもく
世と源氏の事で
むすめとも
師内よりの御賀の事
御辞退なれど
しれい
四十の賀
細 源の御かたにて

らし給ふ。ことしはこの御賀にことつけて、
行幸などもあるべくおぼしおきてけれ
ど、世中のわづらひならんことゝ、さらにをさ
せ給はずしくなんと、いなびきこえ給ふ
よしなれば、口おしくおぼしとゞまりぬ。しは
すの廿日あまりの程に、中宮まかでさせ
給ひて、ことしのゝこりの御いのりに、ならの京
の七大寺に御誦経、布四千反。この
ちかき都の四十寺に、絹四百疋をわかちて
せさせ給ふ。ありがたき御はぐゝみを思し
しりながら、何ごとにつけてかはふかき
御心ざしをもあらはし御らんぜさせ給はんと
て、ちゝ宮、母御息所のおはせましの御ため
の心ざしをも、とりそへおぼすに、かうあながち
に、おほやけにも聞え返させ給へば、事お
ほくもえし給はず。四十の賀と
いふことは、さき〴〵をきゝ侍るにも、残りの
よはひ久しきためしなん、すくなかりけるを、
此度は猶世のひゞきとゞめさせ給ひて、
まことにのちにたらん事をかぞへさせ給へと
ありけれど、猶おほやけざまにて、いといか
めしくなんありける。宮のすませ給ふ町
のしん殿に、御しつらひなどして、
ことにかはらず、上達部のろくなど、だいきやう

沙汰と云益し云房よりく云まきあ侍ら又余長き例もあれど是人多くて付ていう
くのまうあまみぐより何仁明天皇嘉祥二年より天暦四年二まて嗣続ける大将定国四十歳にて頭をうし
幸うせ給ひけるのると　細　おもくまハ楽人の禄ぶらりし事は中史のうれ也とそ
上きのろくるど
ひきかうにうるどしくて
先正月二日二宮大饗食事
西宮記云大納言白大掛二領中納言同色一領参議紅大褂一領四位柳色合小褂一領五位細長一連ママ延喜中宮式云親王以下大納言以上各白大褂二領中納言三位参議浅白褂衣一領非参議三位并四位参議浅褂衣一領五位綿一連高唱四位五位各賜之今案此冊冥ハ中史のせうせ給ふ所うてみりやけしよ有と云ふく叙正公卿已下の禄大饗の例を用らる但其色目ハうされしと大饗のごとくあれ

よろづをしくて、ささうちまいしくよ女のさうう
ぞく、桃の衣の宮侍すらうきんぞうあるどさ
どの殿上人よハおろくさほそうすら一うえねこ
しぐしみぐしぐそつぎくいろしけゆみおほくさう
ぐらうすらうあうくささうしとつくもちく
うきむひハはえうしうすどお前すの清りすに
そつくうしうろもおさく衣よやん
わくう世のひとりのとうあうくさう
これつ「ひさうは加冥よるんあめうむう

ゆりし物給ふも　細　ちうよ地くる只上よる四十ちうくハ為誦経施功徳を旅入せしれ又亜長安
ゐ余派の冊冥よハ米産の獄まそ驟始のうおりくとくそうらのすを思しく功徳よ方り
ゆよ字句をあて
細　年上よハ紅葉をあり
まししきを例の宮かり
完しわしまうくもし
中納言うそつけ
細　月近しまつるとせ也
くちゐるべくきまよあうぶれハ
夕霧よゆづりまうるし
この中納言よ冊冥のあど
まうびくさん
細　あらの國わるよ仮て夕
霧をうるみしおびそし

さぞへづけとめれど、いとくうさくてこらく
さはうすらくひのこどりはえぞつぞくあり
作しめやうらよハおりしきあそしつきた
とむけりやハとそ、中納言よぞつけさせまひ
てけうぞ此の古ち福やもひしておく給ろう
この中納言よれハ冊冥の孫しろつしひくきくん
と覚しめしく、織よるうきをき何流にしるひ
ぎをしも世給ひりしけとく織りわするこる
びきとうんけうくやさんうしゐうとひけ
しり給うしうしのまうよれおろうしひまう
けあそぐくろへきろやうしよ志るしまうれぞ

西の饗は 花内裏より
ところ〳〵の御饗には西
蔵寮ごとく院より
饗はとんじきのやうにて
ありけるとし 則蔵人所
定めとなしたる定まり
〔[illegible]〕
殿上人の 花 殿上人垂
まうで〔[illegible]〕院の殿上人垂
まの殿上人なとて垂布
くよゆるされて昇殿を
ゆるしなどのつかひに
中宮の〔[illegible]〕
し院にて昇殿しうら
とも内にて〔[illegible]〕昇殿
せずとは殿上の役にはた
〔[illegible]〕
ならは伺ふ 細内より肴
盃給はる〔[illegible]〕
御前にも出仕〔[illegible]〕
〔[illegible]〕別ろのをされ
〔[illegible]〕

細 内より御産の御祝ひたまはし

かくはかなきことしもぞこまかにて西く
の饗なども蔵人所より穀倉院よりつかうま
つるさまおもしろくて〔[illegible]〕中宮の御よ
て頭中将宣旨奉りて〔[illegible]〕人々参の
めさく大納言中納言二人宰相殿人殿
上人 例の内蔵寮の〔[illegible]〕ぞくす
しはて〔[illegible]〕など出仕の〔[illegible]〕
あそうてつるまつる〔[illegible]〕
ありてまいりまうで院といひて
ゆるさまつりける〔[illegible]〕
〔[illegible]〕

屏風四帖よしらの作て
かせ給ふ 何絹屏風を
唐綾〔[illegible]〕
〔[illegible]〕
新儀式云 母屋四間副北
障子立 倭和御半帳屏
風三帖 御帳東立同屏
風一帖 御殿天皇御座下
例〔[illegible]〕有〔[illegible]〕
〔[illegible]〕
何清涼殿置物御厨子
置棚 孝道記 小舟一階 笙
置物 第二階 左琵琶 右笙 指子
華筵 如第三階 筆 箱
硯和硯 新羽 南〔[illegible]〕
〔[illegible]〕鶏婁 大篳篥 横笛 吹
太鼓 次鉦鼓 拍笛 拍子
〔[illegible]〕四十疋 細上より給
〔[illegible]〕例〔[illegible]〕
寛延長二年正月廿五日
自宮〔[illegible]〕院 〔[illegible]〕
於内裏院引出物 御馬
四十疋 退出〔[illegible]〕

の〔[illegible]〕の院は〔[illegible]〕
とわりき源氏のえ〔[illegible]〕給は屏風口絵よ
うちの〔[illegible]〕
じんより〔[illegible]〕
〔[illegible]〕
御屏風のすこづきのやく〔[illegible]〕
さまど〔[illegible]〕
物の〔[illegible]〕蔵人所より
給はりまつりて〔[illegible]〕
しく物給はまれ〔[illegible]〕
法〔[illegible]〕馬四疋 是れ出のるつくさ
六位府の〔[illegible]〕

御覧じ賽給之と業延長の御賀の御屏風之ゝ歌よりまつらせたまへにうつて御の御む
すゝめのうりえを引く内裏まて近衆よこのすを御らんまそしもまたの宿人へさめてし
えを御此物語のたる、内裏よりひかせらるくにうつて左衛のなまづさ衛府の衣人をさし召きを
引 其く略く
近衛府の衣人　河六衛府左右近衛府左右兵衛府左右衛門府
まんざいらく　細 此本ノ楽
秋多あるべし。されど緑あ
弁くとあげて出るなるぞし。
見いづれも御衣よそよう
あらう舞ふ
すゞろうう舞て　細 舞
を略して御おの御経う
あうると春日翁
とし比まひみよるるれその
孟 桐壺の和琴をこにゆの名り
くはまりくねらし所 ...
此年比そひて旅しさ御
... しもとし

のかう顔。日らかれそぬれいの万歳楽(まんざいらく)賀皇恩(とう)
蘇合(そかう)ぐふ舞。秦王破陣楽(まんきじゃう)のわくら
まるまよめづらしくうそしきやしーするはあそ
がよられん人をいれまへと。びそく御の夢(味 莫)
御覧侍ぐすかとせまうつさ抛のしごまよおへ
しそいとよみしゆかの人よこきんの御くしおこ
ど和琴(ロ元)ひき給ふしづくさひのかひまけらぬ御
ことの吹えすりや。ひとゆうよ気ま御門
孟 和琴ノよつ ... 源の君とのら ...

今さうら御あうしひ
おもしと殺仕とそはる
れぬとかゞすれども師と
いりあく旁るとしひと
よおよふ御むの紀ぶのさ
御とくらとのよ　河 大倉日記
兼平四年十二月九日御賀
ゆぐとくおりぞまゐ。御
とくら物語の若一とまひ
いれうら。せんざいの御ての
万葉集とひをりよ幸
ふゆをさ。やましとして一ワさ
紀此例今の物がうかう
御例よりうりとみづき
たく　河も略記
御宮ともむ文とうて太の
つうさどもこよのがくして
河 延長二年正月廿五日
御賀紀 御る引出く後

つゝしきれども いづ昔の御物語どもしあじ
そでまく。つまとさうう御あうしくひよ。ぞうさ
よつけても。ゆうくしつしひまづさ御むじうびるがど。
かゆく出くしまて御ぎさあそさうひ気らて。
地の面白きとどうかりあてく。此京ひゝさき
どとえてゆ給つど。御をくらりのまおそく
れうう和琴(ロ元)と。一ことの給ふ御絶をくさくあさん
のそとひとしくそひよ唐うしらの御かんむらとくろ
まうのなるど。いれて。御東宮よひとくひちれ給
小御むしまどとむらうつて太のうつさじとと。
この御のうくしての宮人のう
く大きねの小御くとそさまてしかのみし
(注) 大政大臣へ　河 唐の自抄　細 先年ある　異同もかれうろうを給れつ　孟 案え　省　えんみん

主殿寮采女雅樂寮入自日華月華ノ両門東西相並ニ兼明門前ニ時酉ノ三刻也遊

奏ス楽ヲ三曲唐高麗各二曲　夕霧右大将なれば右馬寮の御監也

内大臣一階　細　一階ハ未
権院いづれも源を
はなれ給ハぬ御中
なりとし
我うちおちハ
めづらしからぬ事な
れ大りみくの御ゆかり
のめでたさをあらハ
すとし

夕霧の方　細　蓬生と云
巻の御息所にとされど
も御末くいまと繁昌
あるとし　三　師云後車わ
らさいの夕霧も蓬生も
権勢なしびなかりし
うじ。と夕霧いひだし合
中大いふ[illegible]

ことしハ代まさひとつめでたくめなれど。内大臣。
一族おほくつゞきてのぼりゆくらいろくしる程。
いひあはしたる事よくしかすれハ物くるう
おりのはめづらしくあるかはかりけるかなく　孟夕霧の源乃
一日ころおさすかどなるくしくとあるさ
らつきしうどおほろのへまゝずれ笑くこ
とくのへりくらさらしるさや[illegible]
給ふもかのそり今方の停止の事を所と御恨　蓬上也
かうらいとさかり給はん程の御もくせりしを
のひ来るしまするんさ雨くなりりけるぞの　細　蓬生也
しまのひろゝ、孫とらくたかさのくしもどく三条め　細　雲井雁

こちたまハ　細　花ちる里也夕
霧とあのこゝしまるに
まりてと日のまゝれ教り
へらかとし　師　花ちる里ハ
かりうまつけさうろの
そへをすらしとも

こゝをかくまんは
孟明石の姫御方の腹ちるく
御形勝也

上霧もいとぞ給めりしれなかまつるまろ
御かしあそらくの梅乃さかりしとどこ
あるまいつくしきのこしゝの咲きさり
給ひとるまゝさよけさくかゝのくし
きりぞまとおくらひ給いかしと出がくゝう
ども給の気乃御ゆかりまいとなくをとおすへら　孟夕霧おしまふかれきよし
れまかくくりね。きりつつのれいなきちらづ　細　源四十一才也　細　御息所也
き給ねるまうり正月納日うちまぎれくふ
ぞんまさせまいでくやしろくの御おろ
ぬまもち殺しあらまど此くの気ゆかさこ　細　冥くしきえ葵
よとそのへてうしかずら明ぞのてきもいとお　のよのゝ也　御座の也

ことのさへおもひのさかる
もろさまざまなれば
業上の俤子あさきえにしも
しきなりしを此出気を
ひきすてられしをこと

そうしさ物よ出ずしむとをうちと、このちへを
どのざらことむてきまなねいぐらぬしくさう
げうむつさ物のくられしく出たまて候ざ
（細明石姫君十四歳）へとおもえのるうれ俱どりよいうよかえとんとゞ
明そ出ずしとはとべてよ二月なかうらあるし
（明石姫君の出産の気色あるべし）く御気色ありてまやうき給ふよはこうろ
どもさそくべし。陰陽師どもよ。所をかへて
つしとをまべく申されば。外のきこえるれさ
らんと出でつるしとそのあり（細明石上の住まひ町）れゆから
の中君いさいよまろうしまり給ふあきさいさぐ
出かさるうふかへ川らぐしくとあすへおゞり
しかりうよ（寝殿の）ぢんのまろうかりて。

此時にかかりてせよ
明石姫君の平産されば
明石上の善果なりあり
平産なうくねいは明石上の
業因つさうさきるのなる
是ハなり
此由を書きまとめ　細三巻
後ハ始く姫君をとらさ
てこまつとと

むかしのことをしまれかみも
物明石上ハ姫君へ善縁
ありしもおかのまてよハ
よあかれわくきり
ないねこ

ほかくさそてうかり
孟明石そのそことを尼
君のやうるくえ
かゝへありとつらハ
孟姫君の此人おかと
いゆゑるそへど今もしかそ

けしさざんざ君つとひてのくそうざくく君（細明石上）
この付よりりきくとともことべきさごさみめれ
ばうじとふとつしし給ふ。彼出ずし尼君と今ハ（細明石上の母）
こよろきわけんへまくぞおかんし此由を（孟年よりてかれらさ）
さばとことをまらは夢のならしぞいつうきおき
てらうづきされたすかどしころびそく君ハう（明石上）
うそひさふらひまへど。昔のことをあさ様よ
しもききて君をおも給つゞりろさば此御面
君ろかびよえへど。氣わりていで涙ぐら
よるめりしきとしくじめとほすさむつう
すりきも。細つうきえおやしくもありしさ（孟姫君のこと）
人れとらまりり給ひしかどかゝる人あり

ほかなき心
むかしのひしかたのごと
おん姫君の御ため御誕生
の事也 孟尼女の姫君
へ申さるゝ也
今はとて京人のかへりたまひ
しに おん源氏物語の
時明石上との契を今は
ふるさとへとおもひに姫
君生れ給ふゆへよく
ておはしますとても

とぶらひ給ふことさまざまあればやうやく
すこしさかえ給ひ むかしのちぎりのごとくお
もふの君のけしき今はまうし給へり
さうし今はとて京人のかへり給ふをよろこぶ
心をまどはして今は浪のそこのやうなるまで
そのおかれまし 孟姫君の御誕生ゆへ
[illegible]
[illegible]
とおもひしことのあはれなり
よくきこえさせしかばつかはして
もうけ給ひ給ひて おんも姫
ちかはしまずへけるにけりていとしかるべし

わが君はよろしけなりて
いとしかるべきことなれば
おん殊勝なる御心遣よ
みな紫上の御ことよろしき
よろこびとおもひ知給ひて
男とはなすまじき物によそへて
おん妻としぬまじき様よ
すべて人のならひとおもひ
しかるに中宮の御心書
物し 孟尼女の御かたよ
てさらに御いとほしくおもひ
なるよおもひしとうちいふ
は今のゆつりを姫君
のこと

かみたの 孟姫君の御
の入たのるをも君を
うけ

てすこしはなやかにて人のおもふまゝにあらず
ろかはかなきなりけり男とはいふまじき也
よそひてこそみちの人の事ともおもはず
とはおもひたちたまふをおもひとはさ
世の人はさまよひ出るやうを思つかひ
なにしにとふこゝろそかうぬらくもてなし
まうくすくなかりぬ〈姫君の母明石上をいふ〉
がらぬもなれ給ひて〈明石浦にてとらし〉
うちそひておもふもこの給ひ
〈孟尼女の事〉とおもひおもひかへるけにこそ
くれぐれとおもひおりしやうの人のあの
は此人の世にもあらぬやうにしておもはる也

みじかき夜半すぎのさよ嵐
ても　尼君のゑみを見
上の詞しみじかき夜　と
いたひさ見事し大かたなる
きのく
なさけふかく　細　醫者まで
こそかうにしくなさふ
らへとて　花常楽きよ
なさけふかくのつくふそ
みをのうらよなさけ楽
じくやへとあり
うしめきそして　細　年よ
ゆゝされどのしめくる

うて彼をとむがうしくおどかきぐくみあひこえ
妙光姫君の御こと
れまひねばくぬ衾よもがめくくおかつすみかられ
細明君之　こゝら　細くのくすし　験君達のこ
くる夏まひて目中のれかがよまるくゝあさこ
姫君の之
まりま夏つゞひ物ふほかしくのくさうよ御瑞ま
へましま人もさふかつぜと尼君前えてゐと
細　明君上旬
らくきふうくひ給おゑみぐうしやうじろさは
あすひのさまをてこゝそさふらひ給をも風る
尼君と見ゆきんもわんふしし
どきはづかしくてどのづうしわらうひのかゝまうも
多ゆうこえ　舞ゆう
わうんよくまじきどやゝのさ御してゐくさう
つとすゞきまつりやるおひたふ御りさくらいゝく
尼君ん　妙花巻のんこ
をひまつりしめきそしてかうまふとへ口か
五老巻して耳をこて給之
きれない。わくとりさふきそしてねそうりさうは
尼君の年齢之
いさいふちうりかもわくぞりし。六千代君の
細　さりやうよみて古句之
おどろかり。おまはすゞる、いてのづしうさよおそてな
目
おさ御ーして。めかやくさよえするさきくれさ家
お尼君の子をきゝうちろ旅よ明君上の任まこ
あーさのおやまく昔とひ出てうさ御るれ
お明君のお御之
ば、ひらうふれてござへのひゞく、かや
給つらん。よそこのよれ御りのやうるうびが
お者共之居てよ出し
おかしどをよとりまをつ。おやしき昔の
こゞをいつくまうぞてきつんたや。妻のくち
お姫君の子御之
こそ忘れとうらみ思ひてこすりはへば
つゝる御めりしくこてうくすそれりかう
をいかくあづさん猶めりしうさ御よとく

をよゝし　つなれて
孟明君の尼君の何とて
なりされて人とも経
ぶらのひるすぢをや侍う
ん　孟吉さみまかお
えうあつすどもを
うれつうんこく

すべなくらしと[illegible]を
細らしきる[illegible]
の[illegible]も[illegible]
[illegible]
師[illegible]
[illegible]世[illegible]
口おかしく[illegible]
[illegible] 姫君の
[illegible] 明[illegible]
上の[illegible]
[illegible]を口
[illegible]
[illegible]
[illegible]
と[illegible]上の[illegible]

[illegible]
今[illegible]
[illegible]世[illegible]
[illegible]
日中の加持果て[illegible]
[illegible]
姫君[illegible]

ひらひらてハマのひらひらし 歯の道

老の波 細 [illegible]
盃[illegible]
[illegible]
て 伝 名例律曰 九十以上七歳以下 雖有死罪不加刑
略記
細 姫君の[illegible]
[illegible]今日[illegible]
[illegible]
[illegible]入[illegible]の[illegible]
[illegible]
世を捨て 細 入[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
盃 潜[illegible]
[illegible]
盃 尼公の[illegible]
老の波[illegible]
[illegible]世[illegible]
[illegible]
盃 姫君[illegible]
[illegible]
[illegible]海の[illegible]
[illegible]打[illegible]
世を捨てあくしの浦にすむ人[illegible]の[illegible]
[illegible]

孟入道のことをいふ也
わかれんと
別れん暁のことも
細 前より思くかへらせ給ふと
ありしが此君の御入道
は別れかし時を前は
ものせんかたを口惜
くおぼしめしし也花玉の
給ふ也

ゆゝしき事よ
孟 御前中宮 今上后 東三条
女院法女 母ハ入道播
磨守女 皇太后宮 御子
醍醐天皇御母 内大臣
高藤女 母ハ宮野大領
弥益ガ女 也

しるし 別れん暁のこともなほのがれ
がたかれぬ事とかなしくもおもひなり
ありしかど やすらひの十余日のほどに
平安 らかにむまれ給ひてはかばかしく
ありさまはいみじくうれしきを
すぐしてしかもみつかはしつれバ暇なく
ゆかしき御ことを此ほど見たまひておはしませ
とりすさハかくれの方ぞまづけしきある
おほやけいりさけらびやかなるべし
うちかたり人くきよらにまもり給ふ
うかりしもしろ花のさかりにうちしれど

ましれぬことくさかれいし
てハ尾張のかはかよみれ
とものうれの方してよめ
くの御かたりしかはい
とゞ式部さまやうしれバ
そ見りの女房のとも給ひ
ゝ人まうちきんとするに
しかしもいさめてまかでゝ
こゝろさるもきりくまゐりて
おぼえ上の御事露やまの白
きおぼえつらや 河御前
當日上下着白装束
九夜改白装束 後朝着
也 九条右丞相記云女房
合着白裳唐衣 一双
院誕
まこのせんしるる内侍の
ことぞつくまつる
細 ふ湯よまゐり給ふ 既
宮有殿にて今も女房
のなりかるしそれが内
侍のとけを差しつる 黒死
沐むるく湯よ 延長四年
六月二日皇后産男児
村上天皇内侍奉仕御湯大君

そのうへもかくりことわらかさかゆう
ぞくさまそく人の釈ゆきてりつるをつといい
じまそてるまさる御いとおもしろつらう
かうしてうち給ひて人のうへよてもさき
らひきらるべいとめづらしうなり
さいかしまうひつらひけよおかつする経ど
としこせいてかるうちまゐりはかきしのとだ
ぶさきそしてもまうりをなほりてはゆくわくわ
つひみどとつきまつり給ふ云々乃宣
有ある内侍のとけそ一くくつるはむら
へゆるかりさらまへるそいと家まいら
しらのことる浪のまうるよすくらうさ

前渡抄 ひとへゆゑお湯とおはしけるにあはせ給ひけるおほとこもりしけれはひとへゆゑ

明石よりも ちかくのりても 細 明石姫君の母とちかくも口惜しくおもふらん 一師 あつくく姫君の御母

明石入道の女なりとはいへどもをかのをこしとえ

やすからずいとおしうくやしと、わざとまうしく

けうらくげよう慶へしくよりのし給へる

なくらなしきこと 細 菓子也 その湯どのゝこし給る

どもまよびそんよういとこうなうや、云

日とのあまに、まへの地ぐよはくらうまぬ七日

の夜ぐらんくもはらぶやしすひのくしと

細 朱雀よりあつくとゝするられと御腹道隆に依てこ

あり。朱雀院のくせとすて おくらうし

元 朱雀院の御かたより御まいらせさせ給ひしと

にいとかうや、蔵人所より弁 室前 屯食

まらく、めづらかなるさま御衝 装

七日の夜 ここちゆるぶや

一 うぶやしなひの事也

元 延長元年七月廿四日朱

雀院御誕生 七日の夜ふ

やしなひ内裏よりせらる。

同四年六月一日村上院七

夜は后宮やしなひ内裏

よりせらる旨見えたり例也

御前の物は沈の懸盤

盤六本 銀の器 馬駄

盤やうの物と見えたり

蔵人所 此所五拾人或廿人也

給ふとれよはふらぬ一のむろさ一まるなどみえ給ふなり

蔵人所より 別 同云蔵人所より弁一勘 別弁の室なるらけあるは蔵人方へ作ることく

あるげごとは、八足ゆらう

細 中納言より左のするる哉

何ることくさとくとつし

よりぶ義は限りあれば

さもするさき物し 孟大守

之祗候がらく中納言より

なめしくくまかで

すゝのひつらなみきらふしは

一説者の細之 源氏のこる何

は錦部しまて大弐きびの

まうはゆびさしく左給

しりぞ内のこまるなる

うらくしなうるくめもそ

まゐりてわかりしくるく

ごとには、ちらまゝうめしくさきせ給

つぎくのことしらぬ尺の家の その比哉

此御事をしらすひきと いとすぐみなく我もくともつくし

てつらうまうりならゆくの覚えもこの程のこ

とくりは、例のことふくもとしくそりなほりぞ

世よるくひできことさき程よ内し風雨

めしくぐ海なるなやびの中のひひつらふ

べきかしそめをとあり ぜめよそう 地ぐ 源氏也

の覚えもいうるよ程えのくいでさき音りのらく

細 上古の風なるべし

大路のわたりさゆうけさあるなど、今まで云世

ぬかしめしきこえまうくらうしさき人とも
まりうろとふしくしきこえあふべくとり
あらや日ごろよりのそひさのがりやうよお
ますけにあふれめのしなどん心えしぬる
こゝまめまでさふかふかまは忘れんもくれ
好りさりとえりてつうくはまとあふれり
さのけんをきそのこうくなくげさうく
男ならんおのゝさるべきうこすはひでて
よくらうよきにけたゝぬあどとおもひ
とあしきひのくへいまやあるらゑいとこう
まて。さつうゆうしるく見えこうしうど。

今は家のかたくは[illegible]
すゝみがりぬようらうしらく川く[illegible]
まふれんもそ。おまくり川あどはしめうしう
つくりそうくらうおかみすりを。いとわかくし
ぬ舊氏わりしつゝさふかくをとく[illegible]
ざいのわまぞ義いはとうさえをえこてろのどう
まさなりしぬあんおかりをて見えてわる。中そ
すりそめて意をうしゆかうしぞ。命をとえ
こあかるどりつまりりぬ。彼おかしあくもがりれ
こしつてんをこてさうひどつかんらみも。い
とられしく見えてられば。いまあん此世のさう
ひとうてろやらくゆるさてろうくさて。曾子で
どあるよりひて此家とかおるよあしてあくり

今いまの御こゝろに　細ん。の
あきらかなる[illegible]
うめる上と紫のむつま
しく思ひまいらせ給はん
おまえり川　おまへさ。家ゆゑでも
と思ひけるり川の事のはと
られはおかきそうく。[illegible]
のまうまつてわろ[illegible]

いまはあん此世のさうひそん
ゆるく　孟　入道の身
今生よそひのくさうらうは
あるきわとこうちそて才子
とも此氏のすでとも中
そうくべきのりつうふ

このまれハ男子と云く

一 うきまうしの世がつくるまさ
こと若衆の法徳セとの
云のの今の御しるまく

言まことあるみるまゝしそ
ひとものうつります
言まよ名利のその身を
らでいゆゑより人とも
のがせぶらうしこ

の国みづからの地ハこれそのちるれことまま志
酒くこの酒のれくの我よ人もうましへでさ
くみりき山おりどもしうろも志めを見るが
らおしくるよこりるんのらまさひとまは
そ志らうべきみをおくどしとおひてごく
すうしの世がつくるさこし めりくれバ筆ま
ゆくなづしへかうど今いさら大と弘龍をさ
乃をひてるん河うひりうこのちうとこふしご
ろとるすりてハ家まことなうしるしてゝ
いらまうよりをまうざうつゝられたらくて
給人ぞうりよつけてるん一くずら見くも

みそれくくまがしう
男を何うて世まおろ物
ずれよ春依よぐさ共て
みづくおくね世界ま男
をくへするぬとものす
てよのらく
めのいとまうりて
文ある日此隙入くえ之
金仏もちがひやうよ
おそハうる文出時入る
の虫仏儀気をうろづる
へし

その人ハまごりく
姫気の内あって若衆の
生れまるとしるぞよ為
いまづけの第を世りふ
まおくなど吟れ上を世ふ
事をく御能の外とく

忠そまうて世のとじめまみくうくてれうと
よをれまうこのとくハ世おしし世中日々
うらよめぐくひ給つれとおすまいうくを
うし男をとうへきうのよ云ま人ますつまを
おことるさ浪ハきてしらめさ曲つくをとか
れぞハこのつるもめれハとせりりて金仏もけ
じひすらでうまやくるうてあん山をもうて
こもなしぬとつてまうけ給ハれだ若衆
いま衆くの系りまて世とくえ生れまつるよ
しょうるんおく悦ゆ給そゆへハうかうく
くつきるさ山ふしの男よ今日文まこ乃
しのまうえをとふみも侍しくぢくるめし

こゝろその人の家れねんひ
九品蓮臺のねんひのを
けいとそて明ん上のさ
いゝんとのゝへのりしと
なりら

すゝの山を　細　須弥の山之
義あらよこ志因果経をひ
てんめこ。玉石のひろさん
こゝの[illegible]よハ明ん上ときまう
西ノ上らこ女あれでたて。
月日の光ハ月を明右始
君こ日ハ今のりうあめこ
[illegible]しくハ山のあとへ入石
ハせるよ[illegible]すき有るよ恩光
まあ[illegible]しくし山をぞ
いろき海よハ四海を掌
まの[illegible]ちいき我身に[illegible]の
[illegible]ハ般若の身よ掉指
て彼岸よ[illegible]へくら[illegible]れ
為[illegible]れ邈
[illegible]經[illegible]

宮の弁[illegible]ぶさとさく。六時のつとめよもさく
れいとをうらまりけて蓮の上乃つ西れね
ぐひをバさし西そてるんかんじなるし。我お
りしむまれ給いんとさし。そのとしれ二月の
ことはの夢よらしやんりぐりしすゝの山を
太のまよさしげらう山の左右よら月日の
ひらうさやうまさし出ぐ。世をてらしをつ
いゝ山のあとを乃ろげよりくれて。そのうえれわさ
山をバひろき海よらうんべ。とうそてち いさ 我身よ
のりて。西の方をさして こぎ[illegible]とらんと
ゆい 夢見とく 稀らうとをするぬ身まぞの
いかりくうなりしかぐしよつけてらぶらか

夢枕須弥三者夢諸衆生入我身内四者夢手執日月唯願世尊
為我解説普光答曰夢臥海者汝在生死大海之中夢枕須弥者出於生死夢
諸衆生入身内者為彼作帰依処夢執日者智光普照執月者清涼
度衆生令離熱悩此夢因縁是汝将来成仏之相善恵聞已不勝踊躍　雑字函　大蔵経
今世内典外典よ夢をとけるり多少今一の拘経よ止るハ善恵仙人の五種の奇夢を
とけりはかならず不遠経を引てハうへそすあらんし。此須弥といふハ梵語よハ蘇迷盧山唐
よハ妙高山とこ四宝を以て飾るにより妙と云。池よ入る事八万由旬。高さ八万
由旬。谷て十六万由旬の山なりまるつくて東西南北よ四洲あり。日月ハ山の
中服をめぐり昼夜を照らす。明ん入石の夢ハ明ん の上牛ん と手する時の夢をとえり。
志うらくを合て又ハ須弥の山ハ山よおうきハ上るさき山なりとなまよ捧じとあるへ
女ハ太よおちら明ん上とりふ山のまゝよ日月の指かうハ月ハ中宮日ハ東宮よまとんかへ
の上の仏女中宮よ立給ひて若宮を生給ひつき瑞うなりらハ山の下よ隠てとこきえよ
あるいんもいふハ入石遁世ヲ薬苑をむさわしければ、をは汝徳みよりらんと山をと八広海
よらく人あとは宗家よ法給上付給ひて四海を掌よ保あふらし。我身ハおそ母に
のりなをさして行ハ入石般若の舟よ掉て生死海を渡て西方極楽の岸よつきんべ
きまさよふ現當二世願ふと成就して。頃安養瑞る世。又玄奘三藏ハ渡天の希よ
須弥の海中よおりとをあるよ尺まよして慈恩伝よあり。又夢よ日月を吞としてれハ必生
貴子とらも見る夢ハ無明薫習のさすで不と又くも。仏もみかく夢をさいせしとてへ
しても法を役まへり。前よ此次の詞よも因教の心と弱らおまよも夢を可信る事を
くゆうとうへり。不記此物語の作者も吉画の大瑕の夢を入れて出けるともや侍らん　罪乃
於山をいひろき海よう
かとよらしとハ明ん上を
保氏よまうつとせをこんく

いかりさことをへ徳いそんとんのうらよ忠

まと鏡ハ細元の御作乃
ことし
ぞくのこの文をえらばしも
周礼六芸の中に占夢わ
らと法華経にハ常有是
好夢ならわりぞそそ
経論にまた夢を信ぜん
くらり不可勝計両界
ちゃくをそうね身にまま
へりのてちんうろなよ
此夢のおりんるをも我身
よ及ぼざおるるれど学ひ
なりて修よ受然なて
懐妊よゆりむそしと。
おうつの夜よゆりむさ於
明石上生れてのちよ播
磨入道よゆりむてまえ

はゆしと。その比よりたゝうれ給ふしこゝろざし。（明石上のそちまゝとして）
ぞくの方見ぬこともゆしみもおふく内教の心（外典俗書外典のことし）（おもひ、）
と見る中にも夢を信ずべきことしおわく（内典とそ仏法の教なれ）
しかいやちうきみところのうちにもひとじ
けすくおもひいづるなかりしりど。ちうくすまよ（明石上を悟ずるし）（此夢の合んるまるゝは）
ぞうね身におもひをえりてなんうろなよりむ（そねへしと）
さ給ふし。又この世乃こゝりまでつてるを待そ。光の（細上乗中羽を取て播磨守よ成ゆれしこと）
彼きのよ立んとしとおもひぐらめそ。此海よ（彼よ名のまでのことしつ切てとし）
とくじ給ひし程も。ひさしきをふむことよ学（細明石上の果報をさるのことし）
え給ひし。かんかひとつよゆりくの報見そそ（ぞん）
給へ。そうりやゆいつくりよおもひのぐし時る（思ひをも報果しまりべき時それまれなるし）（細元ハ播磨の比のうしまみよ始めのつゝましし）

ほつれハつのゆみなおきて　わがひら

うすいゆぬ世まで
（細現在の国と）のみと来来
の楽と乞へてとく五濁
みまのゆ誕生られハ夢の
ごとく乳るるうち過ハね
の利ひとなとけんとく
うのうさ十万おくの
従是西方過十万億仏土
有世界名曰極楽（比は弥陀経）
わまちうまし　前　玄賓僧都
山よへ向のゆくよりも雲
（比おまうことをかすまひけき）
頼のうちハすゆゆまま水
アことなんうすり
ふらあん　細玄賓の世を
よりらすべきことをそう
みえの夜の写しら明よ
趣くんや香わり妄想とハ
おえたそうなり出ゆとく
ゑハすぞえず世の夢なり
きうとハおまゐいども仁一
つよのとともひしに東京誕生

給ん世まよ往吉の社とかじめぞらしやゆ（此は宮住まるハ此常夜の志ゆし往吉の気のりまぞゆくめゆく）
ま見せしよ給ふなどかうくひ給ふんこの
ひとへの世ひらうさ世ようらひ給ゆれへる
まことしの方十万億の海つぞそ。おお九品の（て）（おく）（くわん）
ん黒のそこへそうひおすくゆ得ゆれバ今いハ
まてむうかゆらすと得。給ふ雅ぞその夕ま（玄来迎引接を得とし）（思え）
て別業らさりれやゆよの来まてつとあ給ひ（只その夜は霧さかるの　とるあし）
んとてなんよりんハいりぬる
ひらうりぞん暁らりくぬまそう今ぞうし（会る）（あかつき）
よのゆめうちりすちそて月日うとそう。令（いのち）
流らん月日もさうしまみ（とい）
しんありへのそゐめ垂なゐ霞衣ふもなまゐり（とうめしそ、つま）（玄服衣へ茶め）（てあれハ又よの是へのつゐとく）

れていはぞ二を着どうろふしく日つきてり 御文の日付を命日とも云ハ多への人あり孟文の日付し女のるこの文字
ろし命日とまつへしとく 哭
まんがの為し てるの功とる
衆生そとし元あり。へ今ハ弁財天恩愛無為のんそて
文子恩愛の通ひとさん
あまのかへしらん人のなとけつ夜叔ふもや浮れ
まづきゆを遺法しける
れとも歎香抄諸餓鬼の
金轄なとうに 浮び目連
又母のために孟蘭盆をま
うけ侍り明のの上岁に
あらわていかぞつ恩を
執せんるうを忘れきらん
や但我と変化の物と
とひすせうくとるを所
海子四生の中れ化生を云
べきうし記されど人界
ハ勤物の附ことに生るを
いわりとなしられ今の事
化生ハ業弁の報力哉
[illegible]

やつれもふさぐ我方ハ変化のものと見しあり
て施法しのさわみは功徳をつくりまくらん
功徳を施しまへとく
よれよのしをまとへてそ浮世を忘れふふ
多。わがひ侍る所ふぞるまいてり待るはかあ
御安養国なり
れやうさ對面も侍らねんさはのおりれぞうし
娑婆世界の名也彼到彼岸
梵波羅蜜
よつてりて。どくあひそんこを助わをきてその
御行者の社し
社ふをそあつかふる戒文どもを助わきたるの
御流 文若 御封 義
だんのふぞこよ。みむし。みそてなりかう。お
孟尼云へハ行すを不忘
まぶつをみは。ごらくよりしむどうて。この月
孟則十四日と命日と云ふしめんまて
十四日よなん善のつかりゆ[illegible]

弥勒の変化寒山拾得ハ文殊普賢といふがごとし八道の変化のものと云なり
よえて寸出や志しをり 師点グハンフと或ハ二モ二
我文とも 御点グハンモン孟わうひのを我去之ろく 弥名義ろく 私云 近代よ祭て四日を
十四日よなん 御志ふ志ふらとひふへづきくし
へしちといふ廿四盛りしてへこノ二十とうとて了殊気
ら信心ありとかせり
御薩埵王子飢虎に身
を施しまひし気
捨身と捨て山よ入り
我すれバ其のくらんす
もまられを 哭

みつさ山よへ侍めつりひるまさ男とへ火布勇
施しるとこさんとく
うこみるをし侍りるんぞこふは我たりし
孟尼云への文章言名を
を侍んまえとく
やうるり浮世をすけら出たへあしらうるう
気海去く
所ふつくまう對面ハあらるんとのこあり尼
開き成のえとこの経し
あ此ふことそてうのつてひの大法よ。之へハ
此清文出まて二日といつまるん彼さえ
一涼山なり
まうと咲よう川らひ待ふしなまうしらを
御絶学
め汁をくらよ。ありしまでハさてくひし
ふどられくへしまで。借一人へらしらん二人合ん。

今いとせまそむきさり
物りと　細 おりゆりると
うけるあ由して世尊別
のるまへきまみとろりと
我ひしよ只今此毒伝
とえ侍りて只今第統
あしきの足ひハ限りを
うさき物まりけりしと
仰むりしへ后せしめを
あしきの限と云ひし
よ人と山すとまも所数
さハのうちれらとと
法堂よせふうしまひし
孟琴琵琶あまを法堂
ま絶へく 扮へ后の的
ふ海の堂へ参進く

法供よさふつしきを給、今つとしよとそしとさ
給しおりとよりましきとらめしと云ふまへ
しうどのうち給ひうとしさとこるひのひ
まくよらりつしるがしうきころし給
しきんの法ことひんと、りしをまてるひき
らべまつ、仏よせらり声まそてるん法堂に
世絶入みりた給しさうしぬまのどよめ、世間くハ
すうきてをおりをるん法弟子たじ六十余
人るん去てさし限さふしひれふ痛まり
つけてられそぶん声まそてる紙しのうちをと
るん京の法れうしそとうりまりまり

雲うそしとよまり（かいれとてうさとりうされ）…
まきりてゝるりしひらふんてるん此物くだる
あし、此たとこもよとへりそて京まうちるぞり
うわし人の老法しよまりてとまれる
いて哀よく仏のしとしうて仏の弟子ハ
のさうしさひしつきまよりしのさうめをハ
うぎくしうしれよのと呼てなかうれ
薪つきまろしのましひハかうてまとりるる
ありて尼君のるしとあふまへるへしう
ぎりるしれゝさハとろすとの事くよおそ
すうそうう法さうそこるんおうとさまされ
ばハまびてりうりまつりいそとくまへ男を

沙羅の弟子　細　如来常在
霊鷲山とうすれまま身
子ぞも出て仰しよ仏
わ尼君の歌ゝとりう
ろうりとく　仏堂立霊
鷲山のなく仏えうりり
滅度ありとも常住不
滅せしとおうれるし薪
つきうるハ佛涅槃の説く
佛此夜滅度如薪
盡火滅之説也法華序
花佛涅槃の附三明六
通の大羅漢も身
毛堅立遍身血現涙盡
目肝大苦悩と大経よ見く
しより

わけありてハ
細かにわけすゝむること
きしてかくし
さまざまの人あるそのうち
ありそれ　御上相なる
しけるすくなしとふかく
と尼公のいふこといふを
うけくるしく　お同義
まその人ハ何ともめとく
むすめこその
孟他人ハよろしきハ身よ
り骨肉となるもの中
又その者ハいさゝか
へし

そのあとの人ハいかにもしそのあとを
かくよの所あるとしものを
しまうしおのれ尼の方を
無礼なりし似合ぬことを
まづ此相京の世にふるまで
へ御上とものがれし
まふへのひとつにたるといひ
しく今ありへの公義これ
をうけてのるなり
らく

もそありて御母のけるうそへのまひあひこ
まふこともうきさ代表なりしとなんとや
てかゝつるけさハしらせひて物しまする
よかとつらくらすけるから何そね
まう出ちくりうそて此文をとまふ
よけよきさしとあんかそよまんけるその
人いそよともめとくむおしきこしのまう
青うきのこと出まつしと出ひきうち
給へよいおひそて色えそわりよそれはとこ
あまよつらしくいふひすし。後をえをきとめ。
どは義うちよくいゆくされぬのすく。
さうへひかりそへ彼方へまうしもありおじさ
と母よあとくしまかと中比のへしくは
出つしとへつくちくるき義よくのとをとけ
てんかうく物し給ぬかうしかへくといひあそ
をあふあまきとひさしくあめしひて。
実の情よくゆはられしく世をふてまき
しとも方よおまちてなすひすくに
給ちおろれよいみをきといひもとられて
こそ給れ。難あるぬ方うてこなかうえ
しおとをてうしらよあげこなししき
よ世の人よふひなすくちふをおつか
あらしといひ給へしうとけつ世よりくる
れへうつくさ中の難りとハといひけるとお

世をすてしうしとよあらを
仰しなさるよ　故にお捨て
といひいふぬのみよとの
つらしうよ世みてぬ身の
者義をといひしうし丈夫
住しよすく給ひとてくえ
おろうきことへといひけるを
と

よむきかし世に立ちり
孟 京を背てゆかんに頼
て又上ぬしてと尼公の
御心師相国者は後
来世なくなし

世をそむきてひたむきにゆかむと
とりきてこちさのとなみひ
て御入道の人に物をひつ
めるやうなるかならぬく
ありふみと宮ひまなと

すゞ遣にともむべき婚の世のわかれを残させたまへり
て。年月をまかさせて。猶よりく覚しぬれとと 細 源の御すし
おもそそむきかし世に立ちて御ゑ。 孟 若宮家御誕生ともろ宮
ひあかれ。ことゝもすら絶りのかし。うさ 栗 院
つくさよハ物語つかすくれしきことれのちら 入道宮をふくし
そひてしぬをつねよう。あハとをつくそ かたひの絶給ふ
なし。け世と別ねかるん口おしく覚て侍る。
世にあんしげかまれ。人ふてぬらぐへよう。 孟 入道のみこと尼の御と
とすそてひがむしろやうなりし我侍りつき。て
ら行こなすをひてとのくへきとなすく腹を ちぎり まさひとのこと
きそかれべきまよいと見くくを我を侍 孟 入道と尼公とし
しかいひるれバいくよちらさ侍なめ。

して別めんそらひつかりて。いて義まう 細 御ゑ上の御
らひそこ絶れりこもいまへく泣て。人まと 孟 御ゑとし
ぐれんゆくされのなしこと物りしもや数まう 紀妻のことそへ侍た世のならとし
ぬ男よいかのぶをしげやうよそひあかべきよ
をあしぬ物りし。義かる高給よ物語つかな
くてやさなんのこゝてそけかしかれまる何
のことふうべきんの御いあしてそ見く紛れ。
まそうえこり絶なハ世中をきこめなさた
やうてこし給るばひいあすくたんとて我りまそ
がく義なるこそぐり給らひあかし給ゆる 源氏とし
も物くゞの気のあるさよありとこ事始 明石の方と
ひてもと。猶よそひかくれてうんとをうく

ねぢくぬ男よハ 細 紫上
どぞも秋物うなきり秋物
ともえしぬらぬとをし

きんとハ秋のすそとかふ 孟 万叉
御ゑ上御心曉文のさめ
とこそえいしふくとし
しらけのこと

明石と 細 御ゑ上かたかふ
らひしと源氏の御さら
んかしこ 蜂まよつ
きをりて御ゑ上れきて
ひとしなし

のくるしきにまよふ人のよの
頭尼公のゆくへよりこひ
まとひし御花宮の御
方女姫君の御ことあつかひ
よつみ事出来しかば
の御ことありつかひ男とも
らうまうせぬよし

ゆくへ見えしときれ
花若君の車につけてこえ
けんと尼君にみせは
やの御心にて

みしらぬこそ [illegible]

さてやすみぬべし。男ひとりはすまゐつりうと
さひそなりゆくさひあへはてあるの
どのつとめしてまうんらよまくらをて男を
ともにしてわくらんへいこして暁より
まりまぬ。為家はいかでおいしまぬとて
すみへいこしもたきぬ、今そこもうらえて
人の女はれの見えもいとありけりなん。ゆかし出
つまにさせ給ふ。法もしるのつひぞて。
こともれど、あまりとてあそまでながく
りせ中やりもやうすれば、ゆくしきなる
給はかんよの給めりきにこひ給ひそととよ

細 尼公の御
細 南の對へ参給ふ
細 姫君の御
細 姫君の
尼公の事を
花実東宮へ立まいりて
細 婿の尼公のことをいうれとのかたき
細 尼君へ
孟 尼君の

うれしとのこせんだ。みしらぬことそいひてや
これはこまゆ御くあめし [illegible] せよ
こそゆれとそしろふこのかたこつりさ
とそまうのかりのぬ、家ありとくまうり
思ふうしのこあれはりくぬかしこし、
そりわりめでしきこしへうひていりよ
かりしうくぬかさらんと。父のとものなか
てりう家君のひで参りせすしんの御ろて
わづかひしまふ御息所えれいは何のころ
やとうしぬようりあて、わうつくしま君く
しあしき日君くぬかしうか。同じるきさ
男はさる御そうしきこし浅君てまつれはど
うしやとやを問ひりて、いそしくち何めし

細 尼公の頭のうたの文也
細 姫君の姫君のかくれ
御息所の姫君のことにて御所へ参り
花実のおこりの御ことを
思ひの御事
孟 姫君の花座所

家うそちへさまのことを
細 姫君かりて姫君よ
とくまうりまへとく

御息所へ 細 姫君へ
家りて御息所と
まうし后がいとらへさせ
の細身より大路院に縁
生ひ後と御息所といひ
つり暁東宮の御時に
これがのどの御息所とて
古今第一巻に名后と東
宮の御息所とやに同じ
ことへ御子のおりまへ

よく／＼ぞんじ
くるしひがつておかつとも
わど（おとめれ表作まて）
とらへれ、よろしひがつてと
いやさうりのように如語
ゐてくみ出やりてかかり

せうつ海よ 細 ゆえ上の
詞え出母なぞる如語で
のまえと替へられとし
益 点名なぞのえへそと
せへずもとし
ねるやうもれんとおりなど
まんへ 益よりのれんとうる
らひんなんまでし上無
今くしし

されよ海しまつかくあしひかつてもつと
分得ど何くわひまでともいふど、出方まで（ゆえ上さ）
いふんでしかしめ、紙帯じいかやうに出やとも
やまそこしをりぬとんもむ中くわくれな（徐詞）
るへるまつごとわりおとのてきに色いのくへおて（細業上 お ゆえ上）
のおこりあわりわつてなどりやるまでよ、かり
（の我店方よりぶり語え人もくなくの何し）
（細娘志のれおし）
さかるへよまりあてこのかどこそて忘
らうと語せかよ海よるまひなそてさとおあまそ
いまりくらてまて何くのれしと世中さじめ（お親男の宅へみき合）
ちれば只とやしとし
がさわれいうとろめるさよなん何ぞ半 よと
れんしせわーうどもまへまんへいるしこうかし
くもしくるぞ如何なぞ何しも今くのとぞら

おやしき語されど
益 へたの文おやしるる
るの語のなう今せし

うそくりとまへまりとまだ
れど 細 娘志と如命の
つまじ紙男世をきおく
しくとくめおとこさし

めをれんぜくるへさう男みゆも何くねば我
さ何しぶらせで何か世よなんへさるるきこ
とよをいまおしさとをくべく何せうしとえひ
何りて、とらしくおやしき語すれどこ
れを作へともこのれ親文へるさなれ、（気うん）
しなどよとうとまでうれのしれさうへうら
人なりよれんしてて、ぜらのこどもへ
をませまへうしとさくよいなりしさを語そか
ぎうりとこまりとさつればこうつしても世
とそむしさ何なんとやて きさん へなり ゆけ（お ゆえ上の心のうらみ）
ばよう何んのどうよさ出わし何しぞ、ら（益業上の御意とられまふまてし）
の、へるれんぞいと来てまよりせすへさそくる世語

身よ御座りまする御ざり
細川勝元上の秘密よりまゝ
まつりて堂上を手秘
万事と思ふべし
りよう御身よそひさ
こさせんよつけても
盃勝元上の秘密のほど
とふ別して姫君を
堂上へゆづりまふらせ
いとかりしを押しあへ
て　盃　堂の名に起に
見るまとへ出りえまり
ましし

くひろまりへくさかま
へかも　細川殿上の礼よ
うき様之　盃　姫君乃
おゝそ秘よりれよも田
石上の鑑初之

あゝいとまごくして抱きのめふかくさ御気色とゞこ
御身は身はこまよまくまふりておつさ流世
かもわつさんとぞ御前かりようの御身よ
そひゆるしまさんよつけてもつかうさ身
の種よ御身はゆづりさてなお御前も
いとかりしを抱しよ御りにしめんとせ
いる我よのつゑよせうのあへきうり御さる今
いさしてさりきれしろやうくたひるか
そ御りあどいと思わくさて　盃姫君　結ひ微づこ
てさていつもどうくむつましろくさかすへふる
つねよふらしけぬさ御しまそかりなく
抱づこ[illegible]の[illegible]の[illegible]
いしさてこそくかくげたる御をとまら
のくまかくえしてもしへよくれどさげさわ
　お香の君さまさ
つゞへよるあ六枝よさみずりまよいとよ
　みちえ西りかり
うくさくろよのくさまてりいつく義よ身が
　細　姫君之
て流ひさひゆきのやうくかれゆくれぞぞ
　御房殿の君之
ゆゑめそてよるよ御めりし流いは姫君の御方よ
　細　女三宮の御方之
おりしきろど中の流さうしじうりふてわさる
　お以吉のおよ中のさがわけてとわり
見えれいえしとのさうくさぞれ事すとすと
　入江の女房之
しのさまさてさづりしいもこうくれ思う
　細　勝元之
　細今我誕生の為君へお　浮の句
りのまい姫どうさまてりや何のまさ思て
さりさかりくりとゆめし　まへいだ文もとどそうれ
　姫君之
　細　勝元上の句
いしへもゆめく結ひりぞれさよいよりてうし

流ろさ　細勝元上之帳をと
し刻よせてりくろくへぞ

のさかりしら山はせなりを
ゆせり
なほ〳〵　紫上の山ふう
（あらを綴りまつる）
こなたに隠りてこそ
細　紫上のよろこびまいり
あかつきさくし
にこうろて　盃明石上の深
物しなひ御あさき今て
八人の今比あるとおいはせ
女よかりまさ人よふに
師女又あらしかりあも
人まゐせ　そそまろぬ
にし花　姫君こそおそ
しまさとしもあるさ深
らせかひ又なせ給人人
うけ給ひりいとはんにて

細流の釣
こうらし給ひしこうして給ひ、これやしや、
盃紫上と紫の秋好中宮らふと
あらさよしらからじまりて、ふとさ
とさしよそあすずりくあつひ人やら
あしびきぬもこれぬるして、ねつぎの人か
らちめつりわしくあすじりくわらしま
つ給ひしあさよりつてしそこなすりし御
いめしの多へいげしらそてせひら御あさこれて
紫上の釣
しられ女よかりしまさんざまおあさふらく
えたまひ給ひんてそらく御しらめましせ男
いらぶりあしとすてしまされど、らやさくれ
かしあわれさられしそをりやらよつてそ
明石八人のあれさしらさそうし云深し
がりうしるあさうてまり給ひて
[illegible]
じれぞく

ことさらし給ひて　盃明石上の深
あまさしまて又まつらせ
あかつきのらくらやまさく
むまりてとく
お紫上明石上などは給日一
同して海を隔てさとさ
つらさえ
まげんへのやさうよ　細
よくられ家しら都戸給
とぞう盃明石上まさハ
われて深よりのみ深よ
又ひろしまうさと

あなうこそ今らうしう

お点　ンナリナ
ことさらし給ひしらしひて
ますせてこそあつらさまへきこあつまか、
盃さうし
へこそ今はされもしくさしあるらさうし
まとはよおたのみ
らあどのゝふてそおさなくれず川かりやさ
よろひりくれてつれもすくいひ女しあふめ
おうしとそ流ー丁とひさやつてすべれがりや
お明石上の深し
のたうらよりりくつもくいくまうけよ
細
女君
こらんごらりけるあさ御志てもましゑめり
つろもこもまぐへらへさん人もさ御めし御
細流の釣
まけはさておそらよそとぶそのくこそぞ、ふう
玉も深のこうれてのまつて
きこのわんけさうへのあかうしきまて、
かんじとめくろらてそすれとのさうへてあれ

細 此君の歌に若くし
くわかくるは人をうらみよ
りやうのぬすとうけ給
はらさるし 孟 源氏は
はゝしまいかにふかとし
給をもてまちてゐ也
お女三の宮をもらる
へし

細 あゝ思
あづかりしくて
を給ふのまづかりさ
よそのまてよせ

うらそやのまへりしくかりくへてくと給めら（けさう人の来ることまどのかふてとらって）
れんすくしは逢ちくぬやらうたられもさるひ
ごとてそ時しいそくれとそ例く忘て
まつれと物哀あらはられくしきしこともえら（女房もゆえにし八九のすと思ひ了解く）
それはおやしとうらくさゝひさるさ海（孟 源の不審ならひまつて）
られはまつうつしくてうかおりしの思ひて（ゆえのそ）
つ母ひて給しはいのりの春教又よすし（孟 此君の伺は入道のうし）（しうん 言 おもこまぬ）
あちき教るとの給ちとれくらふとまつし（執のらく給ん）（源氏ますさく世すへくと給）
せなるへきおりあくはおらんしとく（ヘ）（猿給ふをとく）
やとそ給ふとも今いつはくすくてみな
くいあけさを給りんし逢の元給よけ（細 源し）表（孟 源の）
わりんへきあわりく歯そりしと此かりして
とくるひまてすことのひまうくん今よあつく

此らの年比つもむらと
しらよろすらく
細 此君の名誉は（みだれ）飛蝶の消滅（せうめつ）
を事のおもらへしと之
世の中まよりあるさは此
りくの人 細 貴賎高僧
とくわまさに給ひ中
みをも名利よのを深て
高実の名志は此君入道
猶の人をもなりしと
もとふか（な）さあひ今の
師地とるひのこすれ
難あり方もあるとを
お世方の欲もらをを
ぞくわくみもるまり
しくし

細 やまとにあるな し
今上へ夜対面ありと

てらくのとしぞつらさもこまれら
らんり世井まよしわらさらさくの
人らてえらふもとのせまそえら限とる
まこりかくさつやわらんくしこそさそ（文かきわかくと）（入道まで）
あれいとうたかりつてとよはまら（へ此のくすとのまて）
やさをいくらかくさふすりよ熟をあひし
人の末様おひまりしら此世てすれぬ（此山弥高実の名志まるへし）
みをあくぬりのくもさのふえを縁あく
なせようらひすらまくらとてそさくし
くまして今はふらしき限てしおかすと
ひとそれはさんとそうやをとさ男ころ

盃ろうさ祇園すゝ八宮に
よ下向そて對面あるへ
きとなく
とりかねさくしぬ
西いぶ意のこゝろもさきと
えぬめくふ山のふりきん
とへハいらゝん 盃汁細
まう
おやこの中こらもよさう
き與の 盃尼公八さぞな
きふらんまぬの中ん
ろかるくぬみてなく
世の中これあひき與となく
云ひしてゆくぞくれ
おぜのさをもよひともろ
ひどのあ入尼八さぞしく
ゐめしく合そとくされ
バいそよ熱あんと尼公
のすとのむ也

ゆるやかりへ
花よ縁のまうさをとハ梵
ざのやうろうしいつて
杉とそ義で 細面白き
ことぞく師彼もちえ
きれしぞ義のをきりと
思ひしまいるる也さ
とろてし
杉わもくしろくふで
細 弟扱とくら大みてのどと
のやうにもとめえことのふ
まいらてくくののつて
一の文へ国のあとく 盃明石
のへにえ石の済まろり
細河海よ小祇文の案の
右丞相のるよ辞ごて
西宮文臣すゝ将門と征
伐のため軍よりくるま
勲賞の定ありしに
清慎公賞の数しき

バあびてつとめはよもかしくさそとの縁合
細 明石上翁
ハりの給ひし示ともとく。急の為さきとこしぬ
山ふとるん哭待つとやゆれバさしかバそこの
ゆいぢんすくつきがまことそこハりよしのや。
尼君いりよる給ぐん。おやこの中よりまし又
おまぬのこと ちぎり
さりき海の契そこそは。こもそえべくそれとそし
源のきみくのうかとのまかなし
うら諷ゞくまつり。よしの州より世中これお
あき海をとろくあんひとりはくまてよおや
しく忘しく出ひ出からく人ゝ志れあり
細 一入のまうるべしとし
さ海るれバよりさちそりのあすりくへんいう
細 明石上のよす
よ義なりんなどのつこよ。よつけがふよ付意とう
盃 源のきみ合をかうりやそそ入道の文をまこし
しうりも出づりありける。しうしらつしハくし

明石上詞
いとおやとろきがんじしりいしぞうよかおと
よくへめれどけらんしとどもへきとりしを
細 教へこう給ふ時のこと
やまじつと給ひとそてるん。今ハとて別かり
どきそれこそあくられハ給つと給りのあきを
おゆるこの折と
れとそてき海よくしらすき給ふりすてい
盃 源の詞なく
とりこくうすどかれでしくくすてこそあくべ
それもまだどもまべて何くなるをいふう
細 源の世にうまきこちゆ 師忘
そくエ忘川へくるとよくハのさけせかりうこ
よろずまうかきにんそおもむくしとと
のなどさそこそすくるかりのれの先祖の
かゞハいとりらくあまりくれてるきく
とつきそとれやけるよつうきつの給なく
須まりのくうひめあるそそのむくひなく

とハかくみつれに申されしと実の右丞相刑のうさかりしさと称らくされ書の家しとと
ばかりとしてあれと申されれども法あるには法あまりあり。実二郎は民アで太政大臣とす
書家の奉書とならりたり。家よくありてまとめさりて三統よもりけるにやがて家業を
ゐるを頼りてや清慎公の子孫とまるくめて小野宮を他家に讓りたり。同記よくり
ゐるよりし男 暑記
安まのうさに 細 只此物語の
よりそ明石姫君のめぐとの
あきらかなるし若君ハ女子の
事 かね綾のすと分り
若君と雨夜に右馬頭の上に
てつるべしとし若君明石公
八大臣の御末く村上院乃
第一の皇子廣平親王ハ民
アで之方にのひとすの文家
勝ぞりしそれよ清貴冷
泉ハ后腹にておりしに
てり第一の皇子とあそそ
安さまに立ちたり。民アて
を思かいろときをにすよ
ひて思死よせしかをを後
冷泉院御ちかひしうるら
せまては此花山院三条
院とて かり くもまれ
御門と成たまひしも後中宮の三条院の法事
中将しハ此経にうかきる紹介りて戦記

も忠ハあるとさあるにとひとつふめりしと女よ
のうさまつけされとりくていとつさるしとらふ
づさみはあくぬをしそうしのとこちひのまう
盃 くやうにゆんた 右中宮左大臣は若昌
ハ彼公宮のかをとちひ國わらこ
しまてそいめくわうじ後よしのへハ絡つ
この道乃まうりまめやかに御おやちてひゞく
細 明石入道の事
しくすゞろにもうさこんつきしよりさんもとり
盃 彼之方よりめ言へ法りまひし時の事と
めさまされあぐくもさかいすうしさかハ
らりまてもすらかれとむひしことハこの家の
生れ後し明にむらきりよくもむひそりょし
大臣家の御孫ハちつれるかりしかとし
くりしかれりへは後はなられさうしかし

りやうよ冷泉の御末いづれもはかくく後世あらぬハ納言の末をそらく左大臣
しまて三条院の御心をとかよ損子は肉親より下ハ後朱雀の御代よ
三条院とまうけかりしまして後よ後明門院とさきを御末のなこそ今の世ま
でつたへさせあへ三条院の御末男子ハ絶て女の方より御子孫を残し
此物語よりる明石入道とハ明石のうへそ后何さやうるれハつりて字子記
を物語より後のうらすれどとある
道のまうりよりそうて 細 道のまうりよきさこ 盃 世の中ハ道のうらのうきをうしうう
つきのとてそむへ
この道の 評 明石女御の生経にあはせうらしと

盃 入道 端道の事
すくこそむひうらへかれしはくうてのうさてぞおう
源氏 鑑よまのうし
あくるみよのぞこしあうりくうりようこさはよハ
うじ死め子らうしてひしを此入ひとりのあ
入道とそらて
まうそすくれつくう死のうくをすうるよと
細 偶作して
えんとゆしかれハこのうちよおりをし
縁つされハまくさぐてなうくべきもの縁なり

ろくまもよいろうしらさ
細 入道の祈誓よりて
源氏の左遷のうち色業
ゆうう
られハ父ぞして 細 源氏
死文とろへしきへてあつ

つきとくに河明のの名に
これさには源氏からのことも
思ひてなほらんとし
今からは細源氏君貴
訓に事の中なからへの
のこと見えず見えぬこと
かくてさらんつき細空蝉
兄弟などいはやうまでぞ
こと
ことは細紀伊守他
人のいふことをしらるれ
源氏の心おしはかりよとく
家にかへりてかくひかれ
継母とかくれも細空蝉
は源氏に源氏なりしを
ころいはくしをかくれ
見る世人の志の賊勝
なきとかや
たゞ人の世のこと
細継母のうへがらなる
とかくものりそのまされ
なかんかいはゝし嘆世上
の継母いふくと思ひて
からうかくもはしりこれ
やうられよりしきらあく
しかし
それのみありてもわらちり
そくのんゆかしくらん
嘆さらん人のことなれ
うらくそれとあのまゝ
みつ見て継母もつみえ
かしくなりへしとし
いそくかつこそいふそりくう
らうくこのひきとまとま
くまんと継母のさんて
なうくよりのおかし所
なをとてりのおやくこ
なくのへ御ぞ世ひ
ならすとて細りくらう
らうさ継子をとりてかは
まく母の罪業なるべきよ
つけてもそひさうらうとく
表の世れのことすくね人
細おもて人とは定お
つ人にはこ人へは恨と
侍られいふ人のゆゑと
えどもそれはやすてりて
りのく益をおすに罪おけ

今からさしあたりてしもかくしもかんと女はおもはれへて
給へつゞくるは宿世くちをしき人の心ちて
なりしうらみにおもひぬ思ど細雲上の人はあさましきに思ひよる事かなひ
とかくは紀伊守とあいまいかくしさることゝもへさ中に
かくねびつべくしもとかくこ海のかけの表と
とりけひとしのくらうとありは紀伊守かけの
ことはとかくそおもひてよみしきらひ
なれ給はよみくらともめれうろさしかく
らぞかくいはんするかひとさくるゝ也いふ
しへの世乃継人みとしさことそさくらんよれ
もくさけるれゞならうくしきさくらおく

継子のかく
んよりしらぞくされどなき継母のかくもりうかき
とけうくみさとゆうくもうらんくへと
死去の後
さとさとひくもそりくろのうらんさらそひさ
死去は母
のちひさうくて継子とおもへきことく
くしわかれ色いのそりらなけとつてえる生
大からきこ
よらく
しきうもさいをつらしもあるなしおかり
けの昔の世はありうるんぬ人はうるかしく
先の人のひらうきそく
先継子とも継母ともおもてこゝろさとちて
とおれとひくりくつてさる時かいぞのつ
らりて多とをありしとゝとおれへのかりさし
とおかりのしらきしよりうくしくらせとう
さきこうかくし
けおのさうかくるすく人へとりてこるゝかくんおりへ
いとらちとけうさくのひら海なるさけさる子
細源の見乃ひの見るさこゝろ
んおかへさのかくれはおかれと人の心れとおりて
こ海うるとそしけさとさうる中へうしらひ

まハ八猿ハ八嘘てゆく〳〵
ひとつく 咒紙も人とつる[illegible]
とうしく〳〵
さしとある[illegible]じき 細
そく[illegible]ひろろハ[illegible]
ゆへ[illegible]ひ 元[illegible]
つひし此流第本の[illegible]
さことくらろ付勝の[illegible]

えろろくてわろく
細 待べきもうくみる
ごきもすきし

うきしくの心の色うく
ゑより業上のすとの
きて

[illegible]

えくの人て[illegible]やくれねとし
孟 業上の[illegible]
[illegible]
[illegible]
師式[illegible]
細 [illegible]

うさましさ 細りし業上
[illegible]
此流[illegible]付来
[illegible]

[illegible]

その事の上ハ　細 御息所上ま
御息所ものおもひのきこえ有
女御を鍾愛し給ふゆゑ
ならんとても　細 同
まるまの御心をも猶
そひまうのけしきなりの
いうみゝ御息所上とえ
なやみ安くおもひのえ
なし　師 女君と紫上ハ
おもひくも又給ふる
御息所ゆづり給くと
のこと也
これもさまありて
是まで御息所上の御事の
こゝろ女母のやうにも
あれども進退しき
ありてしるへのさまび
おしかるべき
なりし

ここらおゝこころのうちに
ざかりは　師 女三へ源の
ありまかりのえらさま
なひとくさいとけしに
女三ハ序にいひかへさ
うるとく
ふ(?)ある(?)ハ　細 紫上も武
人の所にもこかして思
下ぬのさま（?）ねを今上
さこハ不及く　師 紫上も
玉体なれと女三ハ古なり
皇女なれハ及びなきは

らうしくつましくものうまへつゝしと
こゝら海よりとくえなるまでのことゝと
やすまへぐる。その所にやは。おのくつれ
わらべども。このすりかを海とうらにいひて
をとえをきしね出ふつゝるるをゆづり也え
えうらしまちりそれもなさとり。かゝらぬそ
ゆらえんはみどあらぬけりそみなしことり。
あはれのこゝろなのもみやなくされだべしとあ
んふりひるいまでしきあるすることまでと。
まめえをひくしき。ひとはさらをまら
みなつけて人のこゝろをいとゞしくあはれ
さるかたにすめやかに御心にしみつゝ
すんじの給ひよひつけてとこゝろやすらくこともひとつ
よろしかるべしとおもひてけるに、對面しこそのよふ
をいとやんごとなきこゝろなしのことゝおもひける
られけるよるなるこゝろ人へまかりてよりしとて
まるあからさまのいとこゝろとゞしきみ人のち
こそぬそてしげきこゝろのれくくるくへのれり
のめあさらなかりしげるさのりきさみあり
つきのとめそてでまことなるもいとにしも見る
しがすすさらみとかつもれといとまことうき
はふらうしくとぶらうしゃあし給ふにつけ
てをまうすくをはいひてそしけなくきえて給
る。なほんしきさまめかせて海みなるも本

うち上の御心みだれし
こゝへ入れの殊とまの路

かびらの国に　細 耶輸多羅
り福地の国に行まうまて
ある人必有為の殊よ此
行奥入給ふ伊勢物語
経底ニ後ニ依る所に依て
只知らしてまうすと文
る勝しるし此経より
只福分の経ありと名
てあらまし思案尼云へ
被入たのまよ給らるなる
しそ又對面ハありまん
こゝそし一徊とお報てと
しや

らうめる世よおほしてうらみ給へきゆかりなれ
かしおもへハ今へうしろめたうさきうしとも
ましうこのすゑこりかゝるやうすましと
ものやうのこゝそ親よつかへつるすこしたえても
うでゝうち見るのにとねまさそしやうなりし
ひとつくに打さのえて後の世とたのひやうつ
みづからるかくらねのなんで此時世の中くと
とこひとつゝねかしとおしうこゝうしりや
めゝらしくおりしまとといとつてみると思かハ
えもいへぬのはりつきまつけてうすさまは
うらんぐさるりくまおりぬれハものゝつうら
はけりひるゝまの給はいくらく也けり

お 入道上の御方ともうして
細 入道の宮と女三の宮と
お 入道と二つ蓮の縁とみゆ
細 夕霧女三宮のひろくとみゆ
六条院よ女三の宮のおりまして
お 女三宮の御方く
五 女三の宮の御と夕霧の心の上

うへのさしさハいかりしく
おとりてむらさの御かと
うしくいまそて袖よりく
けうこともハるまぐ

まんをかうへしなんか
女三宮の女房に云とう
ぬまりく
あるものゝやうまたいろ
の御心なるへ　細とるやう
かうへ達りらうり中ま
とみ長宮女子へ物も
人もおりしし天下に思ひ
のおく人もまし物くさ
まことは宗よこらも思へり
うゑんでも此花やらうみ
すらよひりれてこなりに
路ありく人の心ハ友達人
八倍よりまうりてらう

きうへる一もちもてうへのさしきハうらしく
世のなかしよ思いなうりてけしつきはり
あつれともききくけさやうまりのうつくハえ
えもし女房なしも中かくしきハらくかく
もうやうるるうしらひとのひさみろよくら
くるやききてれそゆるハいとぬりくもてう
ぬまそつゝひまつひつゝ袖もひるけなう
れおうしはひるうしるよしとのうや
うよふ思ひみくらハらうのしらはおりくハふ
しもそしぬとさすれハ身よ人思はれねも
ひそひさんもおうきうしこそらゆきけ
よしこ侍りるうくまうしをしらまれ

細 みなりきんて

よのくうやうの我んとつてし 所も同じ女房の中のすゝしのうちのおもつけんてらん
のうすこやうかへん袖にあもおりやそくんさんとゆきそるやさかんへいまさ
えとれよひれこおすけよひとくえれとおすしるすを八のてえもいらつひる
おり女房あるもあれとまれかこるみるなうしく

かう河の国よ 細一條よ世にいふ
ハるさきし 孟源の河んえ
こと尖ぱよ宮仕せしし一篇
よ世かしとえるえ成川本
桜そえ中将ての宮とえ

さうえの人はひんつみなしけるひとそる
しまするうちとて明られいひけさう
佛のひとゝつれよんれさうらうえのお
とわれどもひと河て国よ世中とおかしの結
すえ国まし深いつしのよつるにこまかに
くね川かも上るれびうつさことこまかに
さしそこんおしめてかしめと結へしゆ
ありつゝいつしめとしのへこ世結つとさう
しこの川おりさ国ひうとへつしくと

通うしさしし文学の状
しまく
とすきる桃よ今つとゐきき
ゑよ我ゆつびて
思業雲井をめ叔わびくハこ
とんもおうつしりど今
く秋南よぬそめられ
すみれよやうしくるも心
びて腸んも筆まて六条

のしゆ絡の志もげよてあらうるさ世
まえれ業の川おうへつしるの つとんれよ
へめれど思そうくとりいつくさしくあしる
すゝきの川やうす紙をとくしてさみすか
よ川らしうらんをよりけるぞ方をまつんさ
くんよくしてそすしてえへあるくとと
かそうけをわそれどさてのそるんさし
れをうけハ川小勞も窓ひとゆかと方て
うきれハみつひありてとられきうつし
さるどりの志給をぬ人つうぞうしる
今つてしめつしてよん中ゆひく代くる
よつどひのするゆおりさ国ひとよのどう

清よく面くほど大
女清のちゝのゝ面を夕霧
の人忘れねど一ツよい
うしやかしくもひつる
れでござるそれ
人めの多くばかりまでそと
お清の清游君がおり
てそれがしおとわん
やしく夕霧のそこへ
こなたのわかりるんやと
ゆかしく　孟　女三と夕霧
の御名をもし思案夕霧
くしかハ実人うらしうと
その家おと今わとめある
さまんゆかびてしらえて
女三ともとひけれ一会
ようつて清よるの家案
又よまうるるさいらくま
出よつらとのきをと
なり人一念の上にて誠慎
懼もべきすとのまじむ
るしや

よおしるとうろひたれよさてられども
とまして　女三こ　けるハ人の清ほどとてかも清
かくんしるる清月　お清の例その清ん　その心そうる清
れでござるそれ
わろしとそれ　清の清氣をれど見知るにとて
そしさかしもあるぞ人めのたかりまこ
そとくまうてまるよしかわけるすさくさま　女三よ道をと
ほどとも
しまあしねどこまうからあり人やと處
そくそひなし　孟　節子之　清り参りの人のうちきと信よ
つるよまうおとして　細末御座　人ひるかけし
おきれバ　お女三之　にともらくとのりつきあのき
まのひしけしろよるてみどくはしくさ
まりととして面ぐの清ぐさめあり比ひ
かりすしろ清よとめば面しらハ出かりの

流あるもめきおしとへ　お女三と[illegible]
めきりしとし

へうけるくとも
思案女三と紙物よせんへ
思れかありくともござまあ
らぞ人のさされのふやう
よかをまおどこ細ととし
けまとくひろさ清男まこ
それ　細　女三さふみどうよた
ござろてき男してへるけ思之

　お女三と物来よまつんるとかうまうござるるかしけ清華の若
と面らせよくせし　女三の大家流へおつきしうえ　とうくこし面よな
つら清へるハいしかしくむめつきさうち
それども　今も物来の女三とそうて　かえりひそるれども　その若りう
そうしひつきよりうち　女三のそのこ　女房のさしよりよ清るに楊
　女三のおよ世物へて座敷として　とも出つてうまゆまとくまあまそりぞくてる
わもらこひの人への清けりへのよかまを　お女三之　ともれ
業まそまり世人もみとし　孟　営こ　まそろんど世の人をしまる清ひ例うろとさく
てハろしけまくととろうりのえなにせもら
ござりし　げようくひろうされ男のこえしあそら
せまとまと　ござしめくつねまこの小例帳とらふ清らめし
ともいひろげましてせ中さてめるさされ　松喬

けしき見えたる女三の御方よりそれと見せぬ御けはひもとより 細 女三宮の乳母子柏木の乳母の妹也
小侍従といふ人
わかくの宮よりしたしかりけり
細 源の院の志あるは
その時のこと柏木の思ひ給
うし 師 源氏の御山で
わりしまうで女三を我物
せさせんとおもひかけける
きこえけるをよそにて給ふ身
をうらみける事あまりて
しのびてありしてせ人の
いましめともなるべし

とのゝ御わたりしは日いありて [illegible] とて
まさとも心き給ふとも [illegible] 立ぬる
さけり三月ばかりの空うらゝかなる日 [illegible]
給よ 細 蛍兵部卿の宮 柏木 など [illegible]
まで御物語などし給ふつれゞゝなる [illegible]
ばとてつれゞゝなるに [illegible]
れいやけさらに [illegible] や 何 ワざして
くらしかたきことども [illegible] 源の [illegible]
つるいつもぞいでき [illegible] 例のこゆ
とつきてさふらひつるこのむかわりし
ば [illegible] ねのやしなひとうと

給ふ物の [illegible]
しこまりてわそびして給 [illegible] こう
めしつくらうけ [illegible] 鞠 [illegible] 蹴鞠
と源の御と
めでうれしくなさきぞうなひ [illegible] 蹴鞠
おれよし [illegible]
んどめあつまり若きみ
ぬ物しつらしのさま [illegible] かや [illegible]
大きみずんやとの給て [illegible]
りこまりつべき [illegible]
みしはあれば [illegible]
そいふどのゆゝしあひたれて [illegible]
つまの用ども蹴鞠のいで [illegible]

まゐりてわそびして
給 劉向別録ニ曰蹴鞠
者黄帝所作或曰起戦
國時以練武士知有才也
元奥寺の板の本にあそ
天智天皇大臣鎌足入鹿
をうち給ふ蹴鞠のおり男合紀
私古今著聞集蹴鞠乃
道経においての壮観也
文武にまた大寶元年
よ以真始りたるとや

宮もまだのゆゝしあひて
まゐて 細 アつ御そりとし
一年ばかりかへりまいれてとあり
かなはぬとて蹴鞠なり
しまとうまゝ
[illegible] 細 [illegible]
[illegible]

西の對の東面に鞠の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]蹴鞠[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]上古には[illegible]蹴鞠[illegible]

の[illegible]攻弁[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]引合て[illegible]
[illegible]
[illegible]
庭の[illegible]
[illegible]花の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]中に[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]人の[illegible]
[illegible]

冠のひたひすこしくつろぎたり 河 何朝候月高冠額抜 朗詠 さればこそくつろぎたるべし

いときよげなる事を一つもみて 細 花鳥説

後のたれかれもよくもみえぬ 鞠

とりよせて 細

とふさるべし 細 鞠にあがりたる人はたが桜をとし折りて

花 資雅ハ鞠の枝を腰にさしてけるよしみえて

桜ハさきて

細 三月の末

み桜のかげによりて、人々花のうへもわすれて心に入れたるを、大殿も宮も、すみのかうらんに出て御覧ず。いとらうある心ばへども見えて、かずおほくなりゆくに、上らうもみだれて、かうぶりのひたひすこしくつろぎたり。大将の君も御位のほどおもふこそ、例ならぬみだりがはしさかなとおぼゆれ。見るめは人よりけにわかくをかしげにて、桜のなほしのやゝなえたるに、さしぬきのすそつかた、すこしふくみて、けしきばかりひきあげ給へり。かろがろしうも見えず、ものきよげなるうちとけすがたに、花のゆきのやうにふりかゝれば、

うちみあげて、しほれたる枝すこしおしおりて、みはしの中のしなのほどにゐ給ひぬ。かむの君つゞきて、花みだりがはしくちるめりや、桜はよぎてこそなどのたまひつゝ、宮の御前の方をしりめに見れば、例の、ことにをさまらぬけはひどもして、いろいろこぼれ出たるみすのつまづま、すきかげなど、春のたむけのぬさぶくろにやとおぼゆ。御几帳どもしどけなくひきやりつゝ、人げちかく世づきてぞ見ゆるに、からねこのいとちいさくをかしげなるを、すこし大きなる猫おひつゞきて、にはかにみすのつまよりはしり出るに

いとしくの身と切りくすれ
ら袋よ入さらりやさそて
きぬのつまのさきさげばよ
こへきらし

女三の宮の猫をこし
まんつくとびえさそくさそて。そふよくととこじ
まづられもよろかね
ろきこ海よふけそらひどもとこきぬの毛るひ
宮こ
きくうましきくらもて。猫いやさしよくな
とすつぬりや。つかいとろず　つきこう
猫の中けいとつなを引きて
まろとみのよひきうけゆり門られなりるとよ
りんとおそうしろふ綱よことものそでいとあろ
ろまひきさあげられさると。ととくよひさるを
とんりるしこのそうしらのゆ　こよあんら
んてもふあはさうしげよて。にまちらし
さらけそひどもるのすてのさいはせう
わりるろ綱よごらくすれこて　らのえ
点 女三宮こ
みんありそうしうちとみしの二の中れひんど

えしもろ充の二のま
細 路の名れ　六の目かり
の相よまうハ寝殿のひ
んがしおりてとま殿て
此相々えかくし。すへハ仏
殿の南の階もいでそく楽
そ女房。西ハ女三宮住
よ女房の宮よとくあらし
ゆらみれども。びんがしゆ
てといふうや。階よよ
まう桜のかしまそのこ
とらなれバ南おりてうさ
びひもるすし二の宮とえ
階の西二ろろめの宮る所
ことしの東のそさのわき
さると。階の東の宮ころ
見えとなしてみへし
点 そのすそぐらまあそく
御ものうよおろり、ゆゑろ
まろ紙まや

のそでうれバまざされ所りなくかうえよ
女三の猿宮こ
こいれらかこうゞいよやうんてくさうもさき。
細 つきぐくし
すぎくよあそまくこいさるりくろけちめえ
衣紙のえし　花きぬの宮くろハ衣紙の
るすやうよ。さうりしのつまろやうよえそて桜の
るろなり
おり梅の目そまうゞるるゞし。れらのとそ
まぞけさやらよこ面ろハつとそうりうけゆろ
やらよるびそそ。すそのかさやらよそぐれ、さ
細点 エデハツスン
るいとく川らしげそて七八寸弁ぞ。あまり
ぐらゞ
細点 立女
まつるれぞのすそぐらよ。いとほそくさや
三のちゐくて衣の裳くらるるこ
くりそ。すぐくつきらこのくらあつるぞかあ。
いひあつしそあてよらうしげおちりかりげ
なれバさやうなくれ。おくらつきこんとをとうろ

人〻あらそをとめもえ
きうけぬなるべし
花もかしまじて鞠に心を
いれさわがしさまを女三
の女房達の見いりてはを
ものあらはなるをさそ女三
のみへしまかども見付ざ
るべし猫よ人のつくよ
き人のかうこゆへなど

けふうちなるも　細　夕霧
今ちと見まいらせしと
かりへだてし
猫のつなゆりしつれバ
お猫の縄にて簾の川
れのまかくよるを

をいとおかしげずらかし。まりよおとこみぐるき（柏木の女三宮を見るの所也）
女三宮の。花のちるとをしらもあへぬ気色
だをとこかしこて人〻ざあらそへと。かしこもえて
つけぬるなべし。猫のいつくるけバ。こうり（女三の宮こ）
あへる物をもりち。ありて右しあどいとわひら
しそり。くはらしの人やとかくとさしさ
まだねいとうはさかつきれど。とうひしうら（お夕霧も此所を見付給ふと）（さしうりをとろ）
人も中くいとかくしくれバ。うでそろ（夕えんも慥くしもとまこ）（女三よ気色をつ）
とえさをてうら花そつきさてへるよぞ。（けやさうかとし）
やをらひき入給ひう。かうらふもい（女三のこ）
とおしぬうちしのびど。猫のつなかはし
つれバ。んもあらしうらびげらがましし

わろきすかさ　師　かく
きのうし。女の窮住家
とく唐客をさゞつ時
義色唐家代ま見る
こゑ仕人ハうしきねよ
そうまなあじきろべし
よりてまさうみくも
あらもたとうり
此ことをまねことよせて
お　柏木のつまぐし

こかさえつき取りて　花鳥
對の宮のひさしの方く

さびしりんをとまめくろ出門種ハむかしのつとめさ
がうてされだちりよりはあくれどくらの中
よまろきさうちき姿からも人〻はまづさるべく
をあくがらつつはけそうひなさども。らよりうて（柏木のこ）
物宿ゆぎしぬりわよりてるしされど中さ（柏木の見ぬ気色よほどなく物うさうこ）
よあくでめでやとも夫ねハいとおしくかがさう（女三の御すがたさ）
わんなきうらのすくさめよ猫に〻繪のしきさ
まぞてがきらびさされバいとらうびらくて。（猫よきうの書風まうれ）
らうくけよううちすくも。ゐろうしくさひよ
そらうしそて。すききびえてさや。かとくびんれらんど
よことをて。ムび並乃のかざいとうらくしや。こ（お源の宿大納言の智をとさしていふ）
すうなつえとそて。ことばのこるすみかりてまいり

笹よの花よりよりさし

つぶいりちる　細 鶏僕ゞ
て用ひらのし　同 俵餅
一 俵の紫まてくるまへ
さこ俵の紫と合せら
ゆらみの影よわまづ
とくけてつくこその趣を
麹の下まして食ともうくし
ろ下要せうのと大臣よ
け取りくことより俵被る三
香合俵餅などなり注
つり
大和ハ心ちりよ　孟 夕霧
のへよ柏木の心をとくおお
うくおひまゐてお 柏木
の女三をあうまでかなふを
をかくちらく夕霧の下也

まれば、それぞれすきまもよりのぬ、さるもおか　孟 弟云々
とりあへて古物語しおふつきくの夜よみへハ、　孟 次ここし
すのころよりつくさめしていきとろすく、つぎい　俵餅
りちるずしろく、じやうのゆれしきさ浪く　梨 指子
まそこのみてこそまよとりまをつくあるとわら　花 宮居之
さんてそ得れどもふさるつさうくものべ　細 着まやし お千
うりしてお くしけまいろ悲つ徳をまこと　柏木之
いろくおひえありてやくめすれバそるに本に　こ夕莫の着のくそれ
めきせつけくるがめやる、大和ハ心ちりにおや
いうつりこそのすさきうげ、おひ出るこや　女三のこと　柏木のこと
めんとおほひとてらじらかなりつる古徳
とう川いうろじくしそのへんりしいてやこ　細 君との方へ

うれハこそ世の田わしより
共ゑる者よ女三を世まうろハ
朱雀の清んさる源の事
萬とおほふおどうり源
の清んぞしハ女三へ寄事
どまハるさと

寧ねの表　細 柏木と衣残
みくさ寄つ徳と云まらを
まろ川のつこ　細 伏うぞ
おろうみなどとも治とも
さひ路ハふうるし　お 夕霧
のうかりろくしと田りて
んとさひしするをえる
知こ

ゐるこの清あのうさ酒のさはわらまうなめう池をと
とおかつよりうれバこそ世の田がはくの徳かりハ
うちくの清んさんしめろうやそのかせあつられ
とおひありそぞ程くらぐよのようい田わりくぬ　河内本用之
いそけるさいちりうこそやうするれどもうへろ
めぐるやうちりや とおひ田とさうる寧ね時雲
ハじまろ川のつこいを堺さくく女どくしれなお
が翁物のひまよりの間のりかも それとえ　女三こと
まりつるみも衣着よりのかざしの三つしあ
るべきさまやと咲られしきんしつしておてぞ　寧ね　宮まで用之
のこ宏も古徳ハ昔物語まいつぐまのへしゆかさ
かぐのまよろ川のこくまくろるくしひてぞち　源と役仕とも　侍の祖と

ふるさとハつてへおりま
じられどりのくにならん
細 鞠などのそろへる絵に
とまでハおりしくとし
へるふしの名をもあと云
絵の卉物なる筋にかく
玉けりのさくく 孟 文作て
とのしぢまもこと 柳原を
おわふの
家の風乃こしも吹つたへ
孟 ふさこの月の経も世
がら家の風ともなせ
てしがれ別のこなとなん
さぞ鞠ばかりをお待
てやとし
いくぞ待つも 細 源の細
くさかのこそ侍などに
載てもよろくべきとも
御鞠などのもとにれなり
なりハ家の傳記みるあ
しとめくくハ真あるべ
うらへなるへひて
お女三の源のめさまし
猿よハらとらしまず
と袖まのむつくらまく
れ也へよろしくのするよ
と女三の身と云云
へ

まけのさびめし給し中よ お源の殺絵の人成ハまさら足 よまりなんえと よ
のみちりならとく
ぐずるりかしだらうねきこと ハつてへおりほじ
それど柏のすがたんるがこよそうりそれハ 柏木 いとど
のよりとの事つて
めそとそよげすりしこうてそへしつれしとの給
細木馬の巻に
へバうちかくるそとそぐくしきうこよけハ ぬ 女柏の四度の名くしさりこハそつてへ
ぬとく
うと待ら家のなどのきしも吹つてへ待らん
り後の世乃さわしとなつことなくここ侍
めぐれと戸あへバいうで侍るなる 源内 今こと
なりけるめとごさらしつてつんさなけ家の
つてへなどよろきとじめられさらんしそげ
うハあしや人なじしそれ給わ海の句
女柏の名そ
ひやうなどうらかくとうとまつるもうらへ
よるしひてハうぞうりのくしめらぬきらつそ
人いりのし給ハん何るまようけそう哀とそ
女三の宮
ゆうしまようらハらびしきて思へとしと思
ひめらしすまいとごとすくれあくりをえ
つわらへて男の何こと思ひ去てまれバまよ
のそふさがりてまぞてあぬ 又紙の志ひとか
夕霧柏木同車之
細 柏木の句
車ふくれの経物語しまふる代ひ比のつ
きぐみは此燈よ去りてすさうしつまへ
女宮に
さるりくらくみのやうるさんいとまのひ
まゐらつけて絵の身りすぐさずまれと
源の作ありしを
わ給つると去ありしこぞそう月のうらま
こちめしさそまうのまへとうこしひらぶろ

残まで秋てのことよ
我涙の多くも紫上の方
まで孟州まで(?)へく
ぞり

まず(?)くハ[illegible]
細 紫上ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
細 柳木の宮 [illegible]

るゝ道の程物語し給うて宮の
御ことの猶いはまほしければ院には猶こ
のたいにのみものせさせ給ふなめりなかの御おぼ
えのことなるなめりかしこの宮いかにおぼすらむ
みかどのならびなくならはし奉り給へるに
さしもあらでくしたまひにたらむこそ心ぐるしけれ
とあいなくいへばたいだいしきこといかでかさはあらむ
こなたはさまかはりておほしたて給へるむつびの
けぢめばかりにこそあべかめれ宮をばかた
がたにつけていとやむごとなく思ひきこえ給へる
ものをとかたりたまへばいであなかま給へみな
きゝ侍りいといとほしげなるをりをりあなるをや
さるは世におしなべたらぬ人の御おぼえを
ありがたきわざなりやといとほしがる

いかなれば花に木づたふ鶯の桜をわきて
ねぐらとはせぬ春の鳥の桜ひとつにとまらぬ心よ
あやしとおぼゆることぞかしとくちずさびにいへば
いであなあぢきなのもの扱ひやさればよと思ふ

夕
み山木にねぐらさだむるはこ鳥もいかでか
花の色にあくべきわりなきことひたおもむきにのみやはといらへて

いとあはれに 細 柳木の宮
女三の宮の[illegible]
[illegible]
女三[illegible]
[illegible]
細 鶯ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
細 夕霧の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ちひさくかきればいとゞ推しはかりにちがひぬべしとて
み山おくに　細 はき名のよ花鳥にみえたり。深山木に縁ある花とよむ也と見えたれども
世をいとふ身によそへてありしとかく。仰 驚かす也。深山にすむ鳥あればなり
花をいひてわするべきにあらず。深山にある事也　河 果たり方　花鳥万葉
鳥名の異名として深山木につゞけたるなりけり。ぞくにいふかほよ鳥は
花鳥 鳥の名のやうにきこえて[illegible]山のさくらをめでける事也。八雲抄に鳥名也
鳥名も不知也。只ながめてきこゆる事なり。師説には花とも鳥ともいはずしてよむべき
く時鳥といふ。今案、万葉の歌によみたるを見るに猶さだめがたし。深山木に集まる鳥
とらへ花の色は女三をいふべし
ひとつもなき　細 探り行にいかなる事かあらん

づくりなればしるしにはいかなるとはし夕霧の大将のひとりごとおぼしつゞけゝるにつけても
よひすぎてしりてどのくわかれぬる人の　細 伺来之
ちかきほどの事と　細 文句の詞也
花は桜みやびのひとのゆびにもひとの様をのこして
そぞろのしのびに　花は三つ人をいふ也
めづらしかりけるよ。人にかたりかゝらでは心許なし。年比の
ちらつぼをさがりてかれど鏡見でありけり
それとなくかゞみのすみにてかきつけたりけるにや　そのうちに

くわえて　花鳥 細 頭痛の事也。頭痛の若痛く
おもひやりて心をうちにきえぬべきを
たらんをうちにこそかゝるべき事を
此女三の事をおもへば心をまどはし
まかすなればやこそあらめ
うて
とかくもまぎれなき
いの人とぞ　孟 この人は
柏木の方違のことをおもひ
ことをもちぬと女三の事を
おもひわびぬ
源氏の宮の　河 養在深閨 人未識　長恨歌
細 奥深きところに細き
うちにかくれて
小侍従かり　細 かりそめに少将
従がりし人と云。花鳥
の仮の句
みるきの京　細 陸中比陸

とがりするに此夕べりらいつく。柏木は
くていかなる人かりよかきゆゑばかりこそ
こゝ酒のみかつまどひ侍るとにはせんとを
うくもうさまぎれてこの人のそうり
そめまでもやすき物いまさまぐるの
ふりうひもうろくもきよ。どのうこ
くもりの隙とうちひいうやうかれ
あどい思ひやりてふうきまことの間に何
ぐりりのことにつけそうがちうさけ
思ひとよるをあしとをすべくてしてむつく
いかをみれば小侍従が館のみなもとて
一日のうぢにさそくれてこうきがしるな

の内をいふ家ハ右かは
わらはべ立てりみやら
よし衛どうきぐ東の
きぐるさよ
あやるいふよ 細 見いだしたる
わらはべもせぬ人也

ましれてあかぬ 孟 柏木
の意し 柳もてなすアア
ならうせて我物よせぬ殊
いせいへもみぬなげかう
我名あまたあつまる
一面のもと 細 柏木あり
まろがあらしこゝとかに
給はへあつまりて

なげいてうつりを 細 小竹がたが
猫ん名やうこそなるを
只いまいかなる上は人しそて
んなきよつもしゆるかなに

柳木のあはる とあくりれ
ともひて衛立もんやみ
給へん我身まかりも
まくるさとうかく

大将のさるすわもと
孟夕霧のほんえまつけ
くるしかされたる心
人の又なりたるすとハ

さけりてたゞしばしといふよ見るおしとし
ひて見弁しあえし耳下之
給へんそのゆゑゝしりくるしくらくう
しかやすくさよをするゝしくなげかる
どうさそて
孟 柏木意し
しそてよ心てわしぬまげさハあけれ我心
物思しき花のゆゑりかとあれど衛門督ハ一
目のなきよくしねがくしよのつるのあるかあよ
衛門督ハおさはさきて
こそなくしみりか柏木へよく見げくぬ何も
女三の宮をさす
かれハぴ文とめて見りてこの人ハらうくの
とかはれぬ物よしきひ給しまぐ
らそくく衛門督からきしけすかなき給をとぞ
まへあやうくわりやそひ給しんに見つくし
衛門督
のこうあがしまりがくくるんとこらうと
細 女三宮の内
らひて見はれども人とよそてあつことを
こたへいふうゝし何ごうろとするけよのまふて
孟 比句まで女三乃
かをひろげるとはんをぞ心なへぬとい
岩合まうと
ひとる所とあかさまじうしらしもとのつれの
なきかげしあやせしれすよのまかりてあつ
源氏のつるよりのくめかみせるや
そて。かくしのさびらかしこのつうくびとた。
夕霧し
大将よろしくまふよいもけるさいの給ふ
女三の宮だけなるのあそのあようるせ
めれどとのつしりそうりてこ給るや
をあろへいまゝしめゆのして衛門督かし出る
よ大将のうつりとありまくしさう中てしさ
源氏の
らん時。いふよあきらめ給りんと。ひさのこゝせまう

盃　柳末のえへいろを一掛

しめさてはめのすバうりを

酒さいめんく　細川本　酒さし

おかさそく

さしつくたまり

例のうく　細いつもうや

くうりふ仲娘うく過　　見重　伯語

つれすしうか

ハえらものつまこりへろる

とまつしてとろきさ一回ハ

酒除の内までつれるすくほ

けいつくれとうひくとちめざ

すれるこしさへハまるの

るとすとゆうさばりしに

えぶきもあくねとりくて

うわけくしやもと

えをもあへやういまよ

盃何とこう　すと縁で

とえものつまより　兄語

いしるすとくてさい　後が

ゆるす兄ころく

今さしよいろいるいぞそ

らちんりなりのすハそひうけまのそ　之か

りんしよをバせかうそでえくらうゆあしのゑゐの　細川本酒

しらぞおさるらりろ一ねもらもれさしい

之へ　仲娘うるに

らくるけきバすまゆしくまあそしこうて東へ

細文の細とも

さくしみともあくねバひさ思びて倒れけく

一回もつれるすしうわせとあんめぶ海むうとゆう　帥ゆうこ如亞へ未あそ入来ともるすとぞう

しきてしぢうしーとこずすとおくねやいま

あれうけくしやもとたやりうきとしてとうえそ

お延小仲娘

今さしよいろよかいくそ山禄と

盃甲貴るときの　と仲娘ろ文

ぬ松よちくらけさとうひるさくとを

よ云まで

とあり

盃ろをか　甲貴よ天るる禄もあり地を及びゑ仏し丸のろさざ

ありて河海りきありすめそ

細判